

東京プログラム

Tokyo Program

日本参加青年及び外国参加青年は、9月24日から26日の2泊3日にわたり、都内において一堂に会し、「東京プログラム」に参加した。プログラム期間中には辻清人内閣府副大臣への表敬訪問を実施するとともに、各テーマに分かれ、テーマに関連する企業や団体等への訪問、ファシリテーターの進行の下グループディスカッションを実施した。

Japanese and Overseas participants gathered in Tokyo for a three-day, two-night "Tokyo Program" from September 24 to 26. During the program, they paid a courtesy call on Mr. TSUJI Kiyoto, State Minister of the Cabinet Office. They also visited companies and organizations related to their respective themes and engaged in group discussions facilitated by experts.

グループディスカッション・文化交流レセプション等

Group Discussions, Cultural Exchange Party, etc.



ブレインストーミングをしながらディスカッションする参加青年
(グループディスカッション)

Participants engaging in a discussion while brainstorming.



ディスカッションの成果をまとめる(グループディスカッション)
Summarize the discussion results.



東京プログラムの成果を発表する(成果発表会)
Presenting the outcomes of the Tokyo Program.



文化交流レセプション
Cultural Exchange Party

Theme I : 障害者分野 / Persons with Disabilities

9月25日:テーマ別視察 September 25: Thematic Study Tour



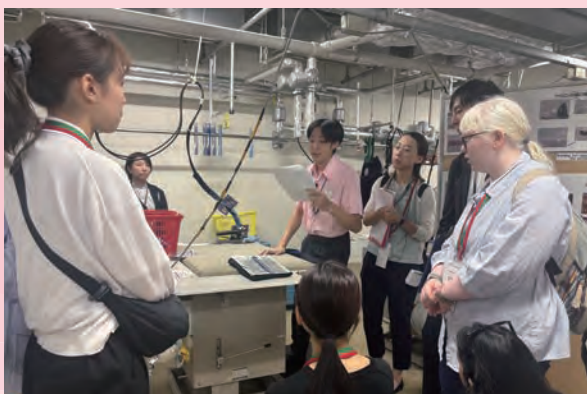
障害者雇用施策についての説明を受ける参加青年
(株式会社舞浜コーポレーション)

Participants listening to an explanation about employment measures for people with disabilities.
(Maihama Corporation Co., Ltd)



障害者の働く現場を見学する参加青年
(株式会社舞浜コーポレーション)

Participants visiting a workplace for people with disabilities.
(Maihama Corporation Co., Ltd)



障害者の業務内容について説明を受ける参加青年
(株式会社舞浜コーポレーション)

Participants listening to an explanation about the job duties of people with disabilities. (Maihama Corporation Co., Ltd)



障害を持つ従業員から説明を受け、ナプキン折り業務の体験をする青年(株式会社舞浜コーポレーション)

Participants listening to an explanation from an employee with a disability and experiencing the task of folding napkins.
(Maihama Corporation Co., Ltd)

9月26日:三原じゅん子大臣とアレッサンドラ・ロカテッリ伊障害者担当大臣との会談 September 26 : A meeting between H.E. Minister MIHARA Junko and H.E. Minister Alessandra LOCATELLI

令和7年度のイタリアとの交流事業は、令和6年の「G7包摂と障害に関する担当閣僚会合」への出席のため訪伊した三原大臣からロカテッリ大臣へ提案し、賛同いただいたことがきっかけで実施された。

9月26日には、東京において両大臣が再び面会し、三原大臣より、本事業へのイタリアの協力に対して謝意を述べるとともに、障害者施策について意見交換を行った。

The INDEX2025 with Italy was initiated following a proposal by H.E. Minister MIHARA Junko to H.E. Minister Alessandra LOCATELLI during the 2024 G7 Ministerial Meeting on Inclusion and Disability. On September 26, the two ministers met again in Tokyo, where H.E. Minister MIHARA expressed her appreciation for Italy's cooperation in the program and exchanged views with H.E. Minister LOCATELLI on disability policies.



Theme II : 高齢社会分野 / Ageing Society

9月25日:テーマ別視察
September 25: Thematic Study Tour

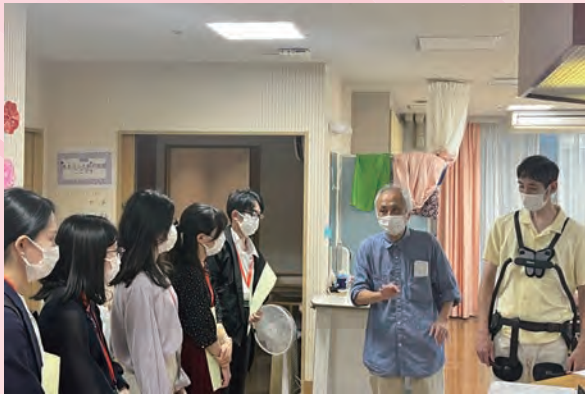


専務理事から施設概要について説明を受ける参加青年
(社会福祉法人江東園)

Participants listening to an explanation about the facility overview from the Executive Director. (Social Welfare Corporation Kotoen)



施設職員と共に記念撮影(社会福祉法人江東園)
A commemorative photo with the facility staff members.
(Social Welfare Corporation Kotoen)



施設で導入している支援ロボットについて説明を受ける
(社会福祉法人シルヴァーウィング)
Listening to an explanation about the assistive robots introduced at the facility. (Social Welfare Corporation Silver Wing)



高齢者の孤独感解消支援ロボットについて説明を受ける
(社会福祉法人シルヴァーウィング)
Listening to an explanation about robots designed to help alleviate loneliness among the elderly. (Social Welfare Corporation Silver Wing)



施設利用者、及びセラピードッグ運営団体職員との記念撮影
(社会福祉法人シルヴァーウィング)
A commemorative photo with facility users and staff members from the therapy dog organization. (Social Welfare Corporation Silver Wing)



質疑応答を行う参加青年(社会福祉法人シルヴァーウィング)
Participants engaging in an Q&A session. (Social Welfare Corporation Silver Wing)

Theme III : バリアフリー・ユニバーサルデザイン分野 Accessibility and Universal Design

9月25日:テーマ別視察
September 25: Thematic Study Tour



東京都福祉局からバリアフリー施策に関する説明を受ける
(東京都庁)

Listening to an explanation about accessibility measures from the Bureau of Social Welfare of the Tokyo Metropolitan Government. (Tokyo Metropolitan Government Office)



都庁のインフォメーションデスクに設置されたバリアフリー機器
を見学する(東京都庁)

Visiting the accessibility equipment installed at the information desk of the Tokyo Metropolitan Government Building.



地下鉄のバリアフリーについて説明を聞く
(都営地下鉄・国立競技場駅)

Listening to an explanation about subway accessibility. (Toei Subway Kokuritsu-kyogijo Station)



国立競技場をバックに記念撮影

A commemorative photo with the Japan National Stadium in the background.



施設構造について、現場を見ながら説明を受ける(東京体育館)

Listening to an explanation about the facility structure while touring the site. (Tokyo Metropolitan Gymnasium)



バスのバリアフリーについて説明を聞く
(都営バス・小滝橋営業所)

Listening to an explanation about bus accessibility. (Toei Bus Otakibashi Office)

第1章

事業概要

- 国際社会青年育成事業の概要
- 日本国内全行動記録



国際社会青年育成事業の概要

1. 経緯及び内容

(1) 経緯

昭和34(1959)年の上皇皇后陛下の御成婚に由来し、平成5(1993)年の天皇皇后陛下の御成婚を記念する事業として平成6(1994)年度より実施してきた「国際青年育成交流事業」を、お代替わりを契機に発展させたもの。

(2) 内容

国際社会や地域社会の担い手として、様々な社会課題の解決に向けて国際的視野を持って貢献できる人材を育成するため、世界各国が共通して抱える社会課題についてテーマを設定し、日本青年を当該テーマについて特徴的な取組を行う国々に派遣するとともに、当該派遣国の青年を我が国に招へいし、現地の青年とのディスカッションや文化交流等の活動を行う。

2. 令和7年度事業の概要

(1) テーマ及び交流国

- ① 障害者分野／イタリア共和国
- ② 高齢社会分野／ドイツ連邦共和国
- ③ バリアフリー・ユニバーサルデザイン分野／フランス共和国

(2) 参加者（日本青年外国派遣及び外国青年日本招へい）

- ① 日本青年外国派遣
 - 団長(1名)
 - 副団長(1名)
 - 団員(8名)18歳～30歳の日本参加青年(※1)
- ② 外国青年日本招へい
 - 団員(8名)(※2)18歳～30歳の外国参加青年(※1)

※1 テーマに関する実務に従事している者は40歳まで対象

※2 8名の中から、リーダーを1名決定

(3) 日程及び主な活動

- ① 事前研修
 - 日程 : 令和7年7月10日(木)～12日(土)(3日間)
 - 場所 : 国立オリンピック記念青少年総合センター 等

- 対象 : 日本参加青年
 - 主な活動: テーマ及び交流国に関する講義、在京交流国大使館訪問、団別研修 等
- ② 出発前研修
- 日程 : 令和7年9月12日(金)～13日(土)(2日間)
 - 場所 : 都市センターホテル、ホテルルポール麴町
 - 対象 : 日本参加青年
 - 主な活動: 団別研修、派遣日程に関する説明、壮行会 等
- ③ 本体プログラム
- (ア)日本青年外国派遣
- 日程 : 令和7年9月14日(日)～23日(火)(10日間)
 - 場所 : ローマ、クレモナ、ブレシア、コモ、ラベンナ 等(イタリア)
フランクフルト、ボン 等(ドイツ)
パリ、ナント(フランス)
 - 対象 : 日本参加青年
 - 主な活動: 政府機関・テーマ別関連施設訪問、ホームステイ 等
- (イ)外国青年日本招へい
- i. 外国青年地方プログラム
- 日程 : 令和7年9月19日(金)～23日(火)(5日間)
 - 場所 : 新潟県(障害者)、鳥取県(高齢社会)、大分県(バリアフリー・ユニバーサルデザイン)
 - 対象 : 外国参加青年
 - 主な活動: 行政機関・テーマ別関連施設訪問、ホームステイ 等
- ii. 東京プログラム
- 日程 : 令和7年9月24日(水)～26日(金)(3日間)
 - 場所 : 都市センターホテル 等
 - 主な活動: 行政機関・テーマ別関連施設訪問、ディスカッション、文化交流レセプション 等
- ④ 帰国後研修
- 日程 : 令和7年9月27日(土)(1日間)
 - 場所 : 都市センターホテル
 - 対象 : 日本参加青年
 - 主な活動: 団別研修、事後活動についての説明、成果発表・解散式 等

(4) 経費負担

以下の経費については、原則として日本政府が負担。

- 日本参加青年等(団長等を含む)及び外国参加青年(リーダーを含む)の日本と交流国との間の往復に係る航空運賃
- 日本参加青年等の交流国における滞在費(宿泊費、食費、交通費等)
- 外国参加青年等の日本における滞在費(宿泊費、食費、交通費等)
等

日本国内全行動記録

月日	時間	行動日程
9月18日 (木)	外国参加青年	
	イタリア 10:25 12:00 13:00 15:00	羽田空港着(AZ792) ホテル着 オリエンテーション ホテルチェックイン
	ドイツ 9:45 11:30 13:00 15:00	羽田空港着(LH716) ホテル着 オリエンテーション ホテルチェックイン
9月19日 (金)	外国参加青年	
	イタリア 7:15 8:22 9:39	ホテル発、新潟県へ移動 東京駅発(とき307) 越後湯沢駅着 地方プログラム
	ドイツ 7:45 9:20 10:35	ホテル発、鳥取県へ移動 羽田空港発(ANA293) 鳥取空港着 地方プログラム
9月20日 (土)	外国参加青年	
	フランス 7:45 10:00 11:35	ホテル発、大分県へ移動 羽田空港発(JL663) 大分空港着 地方プログラム
		地方プログラム
9月21日 (日)	外国参加青年	
		地方プログラム
9月22日 (月)	外国参加青年	
		地方プログラム
9月23日 (火)	外国参加青年	
	イタリア 14:27 16:28	新潟駅発(とき324) 東京駅着 ホテルチェックイン 自由時間
	ドイツ 15:10 16:40	米子空港発(ANA1088) 羽田空港着 ホテルチェックイン 自由時間
9月23日 (火)	外国参加青年	
	フランス 12:30 14:05	大分空港発(JL668) 羽田空港着 ホテルチェックイン 自由時間
	日本参加青年	
	10:25 16:15 18:30	イタリア派遣団帰国(羽田→ホテル) ドイツ派遣団帰国(成田→ホテル) フランス派遣団帰国(羽田→ホテル)
9月24日 (水)	東京プログラム 第1日目	
	8:50- 9:30	内閣府へ移動
	9:30-10:30	オリエンテーション
	10:30-10:50	辻清人内閣府副大臣表敬訪問
	11:00-11:50	行政官によるテーマ別講義
	12:00-12:20	グループディスカッション
	12:20-13:20	ホテルへ移動
	13:30-14:40	昼食
15:00-17:00	グループディスカッション	
17:00-20:00	夕食	

月日	時間	行動日程
9月25日 (木)	東京プログラム 第2日目	
	テ ー マ Ⅰ	10:00-17:00 株式会社舞浜コーポレーション訪問 11:30-12:30 昼食 17:00-18:00 ホテルへ移動 18:00-18:30 グループディスカッション
	テ ー マ Ⅱ	9:30-12:00 社会福祉法人江東園訪問 12:00-13:00 昼食 13:00-13:40 移動 13:40-15:45 社会福祉法人シルヴァーウィング訪問 15:45-16:30 ホテルへ移動 16:30-18:00 グループディスカッション
	テ ー マ Ⅲ	9:30-10:30 都庁訪問 10:30-11:30 都営地下鉄視察&乗車体験(都庁前~国立競技場) 11:30-12:15 国立競技場見学 12:30-13:00 昼食 13:00-13:30 東京体育館見学 14:00-16:00 都営バス視察&乗車体験(小滝橋車庫~平河町二丁目) 16:00-16:15 ホテルへ移動 16:30-18:00 グループディスカッション
		18:00-20:00 夕食
	東京プログラム 第3日目	
		9:00-12:00 グループディスカッション 12:00-13:30 昼食 13:30-15:00 成果発表会準備 15:15-16:30 成果発表会・評価会 18:00-20:00 文化交流レセプション
9月27日 (土)	外国参加青年	
		9:00-11:00 自己評価会 11:00-12:00 修了式 12:00 昼食、自由時間
	日本参加青年	
		帰国後研修、解散
9月28日 (日)	外国参加青年	
	イ タ リ ア	9:30 ホテルチェックアウト 9:45 ホテル発、羽田空港へ移動 12:45 羽田空港発(AZ793)
	ド イ ツ	6:45 ホテルチェックアウト 7:00 ホテル発、羽田空港へ移動 9:40 羽田空港発(NH223)
	フ ラ ン ス	6:00 ホテルチェックアウト 6:15 ホテル発、羽田空港へ移動 8:50 羽田空港発(AF187)

第2章

日本参加青年の研修

- 研修日程表



研修日程表

【事前研修】

研修会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

	第1日目	第2日目			第3日目	
月日	7月10日(木)	7月11日(金)			7月12日(土)	
		イタリア団	ドイツ団	フランス団	イタリア団	ドイツ団・フランス団
7:00						
7:30						
8:00						
8:30		団長・副団長MTG			チェックアウト	
9:00		団別研修			団別研修	団別研修
9:30		テーマに関する講義			テーマに関する講義②	
10:00					団別研修	
10:30		派遣国に関する講義			団別研修	
11:00						
11:30		派遣国に関する講義				
12:00						
12:30	副団長MTG	参加青年受付	昼食	昼食	昼食	昼食
13:00	開講式		団別研修	移動	渡航に関する説明	
13:30	内閣府からの説明及びオリエンテーション			移動		
14:00			移動	ドイツ大使館訪問	フランス大使館訪問	
14:30				移動	閉講式	
15:00	団別研修 (チームビルディング 他)		イタリア大使館訪問	移動	参加青年解散	
15:30			移動	団別研修	移動	団長・副団長会議
16:00			団別研修	団別研修		
16:30			ディスカッション講座			
17:00	チェックイン					
17:30						
18:00	夕食					
18:30			夕食懇談会			
19:00						
19:30	団別研修					
20:00						
20:30			団別研修			
21:00						
21:30	自主研修		自主研修			
22:00						

※ 日程表の空欄は、準備・休憩・移動にかかる時間

【出発前研修】

研修会場：ホテルルポール麹町

【帰国後研修】 研修会場：
ホテルルポール麹町

	第1日目	第2日目	第3日目
月日	9月12日 (金)	9月13日 (土)	9月14日 (日)
7:00			
7:30			
8:00			
8:30		副団長MTG	
9:00		団別研修	【フランス派遣団】 6:15 ホテル発 ↓ 7:00 羽田空港着 ↓ 8:50 羽田空港発 (AF187)
9:30			
10:00			
10:30			
11:00		昼食	【ドイツ派遣団】 6:30 ホテル発 ↓ 8:30 成田空港着 ↓ 10:40 成田空港発 (JL407)
11:30			
12:00			
12:30			
13:00		団別研修	【イタリア派遣団】 9:45 ホテル発 ↓ 10:45 羽田空港着 ↓ 12:45 羽田空港発 (AZ793)
13:30	受付		
14:00			
14:30	オリエンテーション		
15:00		壮行会	
15:30		団別研修	成果記録の作成について
16:00			
16:30	団別研修		
17:00	渡航に関する説明		
17:30	チェックイン	事務連絡	
18:00		夕食	
18:30	夕食		団長・副団長会議
19:00			
19:30		自主研修	
20:00	団別研修		
20:30			
21:00			
21:30			
22:00			

	第1日目	
月日	9月27日 (土)	
7:00		
7:30		
8:00		
8:30	チェックアウト	
9:00		
9:30	団別研修	成果記録の作成について
10:00		
10:30		
11:00	昼食	団長・副団長会議 海外旅行保険の申請
11:30		
12:00		
12:30		
13:00		
13:30		自己評価会
14:00		
14:30		事後活動について
15:00		
15:30		成果発表・解散式
16:00		解散
16:30		
17:00		
17:30		
18:00		
18:30		
19:00		
19:30		
20:00		
20:30		
21:00		
21:30		
22:00		

※ 日程表の空欄は、準備・休憩・移動にかかる時間

第3章

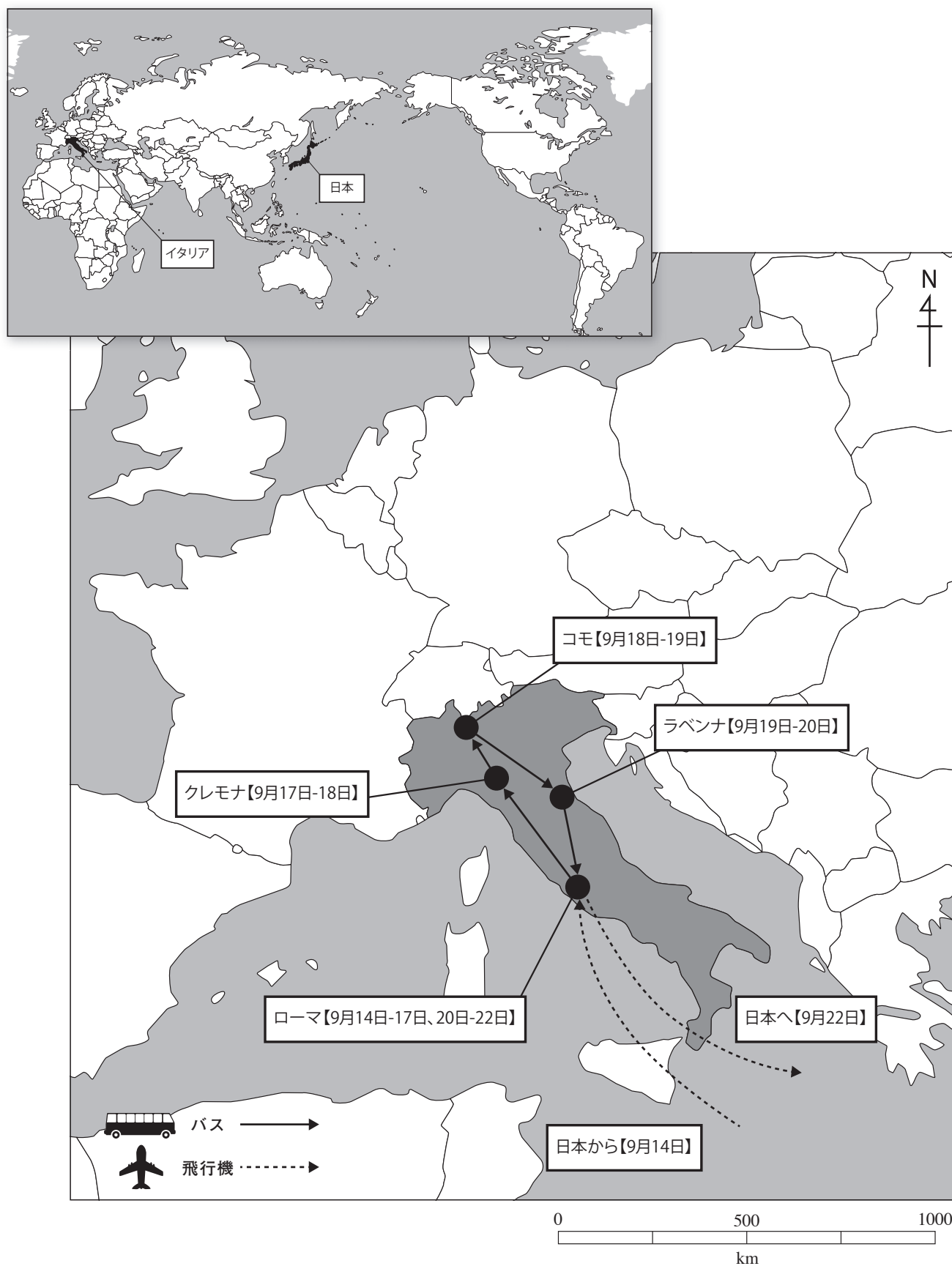
テーマ I 障害者分野

- 日本青年イタリア派遣
- イタリア青年日本招へい



日本青年イタリア派遣

イタリア派遣団行動地図



イタリア派遣団行動記録

月日	時間	行動日程	滞在都市
9月14日 (日)	12:45 20:30 23:15	東京(羽田発)(AZ793) ローマ着 ホテル着	東京 ↓ ローマ
9月15日 (月)	9:00 9:30-11:00 11:00-12:15 12:45-14:20 15:30-17:30	ホテル発 アレッサンドラ・ロカテッリ障害者担当大臣表敬訪問(於:イタリア首相府) 首相官邸(キージ宮殿)訪問 Trattoria de Gli Amiciにて昼食 Romulea Autistic Football Club - SS ROMULEA 訪問 夕食	
9月16日 (火)	8:30 9:00-12:30 13:30 17:40 19:15-21:00	ホテル発 State Institute of Specialized Education for the Deaf A.Magarotto 訪問 ホテル着 自由行動、昼食 ホテル発 レセプション(於:大使公邸)	
9月17日 (水)	9:15	ホテル発、クレモナへ 夕食	↓ クレモナ
9月18日 (木)	9:30 10:00-12:00 15:00-17:00 19:15	ホテル発 Fondazione Sospiro (Foundation Sospiro) 訪問 昼食 Anffas Brescia (National Association of Families Persons with intellectual and/or Relational Disabilities) 訪問 コモへ移動 ホテル着 夕食	↓ ブレシア ↓ コモ
9月19日 (金)	8:15 9:25 9:45-12:15 12:30-13:30 16:30	ホテル発 コモ湖散策 コモ湖発 COMETA 訪問 ANAGRAMMA 訪問、昼食 ラベンナへ移動 ホテル着 夕食	↓ ラベンナ
9月20日 (土)	8:30 9:00-11:00	ホテル発 Insieme a Te (インクルーシブビーチ) 訪問 ローマへ移動 ホームステイ	↓ ローマ
9月21日 (日)	19:00-22:00	ホームステイ 歓送夕食会 ※Albergo Etico (ロカテッリ大臣から紹介いただいた障害者雇用に積極的なホテル)に宿泊	
9月22日 (月)	~10:00 10:20 11:00 14:55	自由行動 ホテル発 空港着 ローマ発(AZ792便)	
9月23日 (火)	10:25	東京(羽田)着	↓ 東京

イタリア派遣団プログラム一覧

9月15日（月）

プログラム	アレッサンドラ・ロカテッリ障害者担当大臣表敬訪問（於：イタリア首相府）
所在地	ローマ
主たる面会者	アレッサンドラ・ロカテッリ(Alessandra Locatelli) 障害者担当大臣 ピエル・ルイジ・ザンポルリーニ(Pier Luigi Zamporlini) 公使・障害者担当大臣付外交顧問 アントネッラ・ニコトラ(Antonella Nicotra) 首相府 障害者政策局長 アントニオ・マリア・カポネット(Antonio Maria Caponetto) 障害者担当大臣官房長
概要	イタリア首相府にてロカテッリ障害者担当大臣を表敬訪問し、今回のテーマである「障害者」に関して、青年交流派遣が行われることへの意義と感謝、どのような点を重視してイタリアでは取組を進めているか等について説明を受けた。南団長からは、今回のイタリア政府による歓迎への御礼と本派遣の意義を含めた挨拶を行った。ニコトラ障害者政策局長からは、イタリアの障害者政策に関わる御説明をいただき、表敬訪問は終了した。

プログラム	首相官邸（キージ宮殿）訪問
所在地	ローマ
主たる面会者	アントネッラ・ニコトラ(Antonella Nicotra) 首相府 障害者政策局長
概要	表敬訪問後、首相官邸であるキージ宮殿に向かい、職員よりその建物の歴史や各部屋の使用用途について説明を受けた。17世紀には教皇を排出した名門キージ家が一時所有したことからその名で呼ばれている歴史ある宮殿であり、名誉大階段(Scalone d'Onore)、ガレオーネの間(Salone del Galeone)、地球儀の間(Salone del Mappamondo)、キージ図書館(Biblioteca Chigiana)、緑の部屋(Sala Verde)などの部屋や施設が存在する。

プログラム	Trattoria de Gli Amiciにて昼食
所在地	ローマ
主たる面会者	ジュゼッペ・アントニオ・ルッソ(Giuseppe Antonio Russo) レストラン責任者
概要	障害者が働いているレストランであるTrattoria de Gli Amiciで昼食を取った。昼食の配膳をしてくれるのはいずれも障害者であり、明るく俊敏に働きつつ、他の客との温かい交流(ハグをする様子もあった)が見られた。昼食を取っている途中にレストラン責任者であるルッソ氏から当該レストラン設立の背景やこれまでの歴史についての説明を受けた。青年からはスタッフの育成や今後のレストランの方針について尋ね、障害者をプロフェッショナル人材として育成し、他のレストランにも派遣するなど、積極的に取組を普及していくと回答があった。

プログラム	Romulea Autistic Football Club - SS ROMULEA 訪問
所在地	ローマ
主たる面会者	ピエトロ・チレインチオーネ(Pietro Cireincione) コンピュータ・エキスパート/ 自閉症セルフアドボケート トマツォ・アロッタ(Tommasso Arrotta) コーチ/ 教育者 リカルド・デ・ヴィート(Riccardo De Vito) 選手 ジョジョ・デ・アミチ(Gioglio De Amici) 氏
概要	当施設が参画しているEU五か国間に跨る自閉症とスポーツの共同研究及び当該施設の自閉症取組の歴史について講義を受けた。その後、施設併設の自閉症当事者が働くカフェにて、選手として競技に参加している自閉症当事者を交え質疑応答を実施した。

9月16日（火）

プログラム	State Institute of Specialized Education for the Deaf A.Magarotto 訪問
所在地	ローマ
主たる面会者	イザベッラ・ピント(Isabella Pinto)校長 イェツラ・カテリーナ先生 フェデリカ・ベネツィオーノ(Federica Pilosu)先生
概要	特別支援学校や学級が基本的になくインクルーシブ教育を実践しているイタリアにおいて、聴覚障害のある生徒が多く通っており、逆インクルーシブ教育を行っているろう学校である。校長室で校長先生から学校の説明を受け、質疑応答を行った後、校舎の見学を行った。デザインに力を入れており、デザイン用の設備を見た後、デザインについて学び実践している授業も見学し、先生と学生からお話を伺った。

プログラム	レセプション(於:大使公邸)
所在地	ローマ
主たる面会者	鈴木 哲 駐イタリア日本国特命全権大使 アレッサンドラ・ロカテッリ(Alessandra Locatelli)障害者担当大臣 ピエル・ルイーダ・ザンポルリーニ(Pier Luigi Zamporlini)障害者担当大臣室 国際関係顧問
概要	鈴木大使及びロカテッリ大臣から、障害者支援をテーマとした日伊交流の意義と今後の展望についての挨拶があった後、日本青年代表及びイタリア青年代表から挨拶を行った。その後、日本青年による日本文化紹介として花笠音頭を披露し、参加青年同士の交流を深めた。

9月18日（木）

プログラム	Fondazione Sospiro(Foundation Sospiro) 訪問
所在地	ソスピロ(クレモナ)
主たる面会者	ジョバンニ・スコッティ(Giovanni Scotti)氏(会長) セラフィーノ・コルティ氏(心理学者)
概要	130年の歴史がある貴族のセカンドハウスを活用し、障害者と高齢者の支援を行う施設。職員数は800人で成人のみ住んでいる居住施設も完備されており、医療サービスや居住施設などの財源はロンバルディア州政府がすべてカバーしている。その他にも地元の市から補助金が出されている他、寄付や募金活動、基金通じて得た資金を財源としている。

プログラム	Anffas Brescia (National Assosiation of Families Persons with intellectual and/or Relational Disabilities) 訪問
所在地	ブレシア
主たる面会者	パウロ氏(ディレクター) シルビア氏(現場責任者) 他、利用者数名
概要	ブレシア県を拠点とする知的障害及び発達障害を持つ人々の権利と福祉を守るための施設である。ディレクターのパウロ氏から事業概要・活動背景について御説明いただいた。次に責任者のシルビアさんより障害者ケアのガイドラインについての説明をいただいた。

9月19日（金）

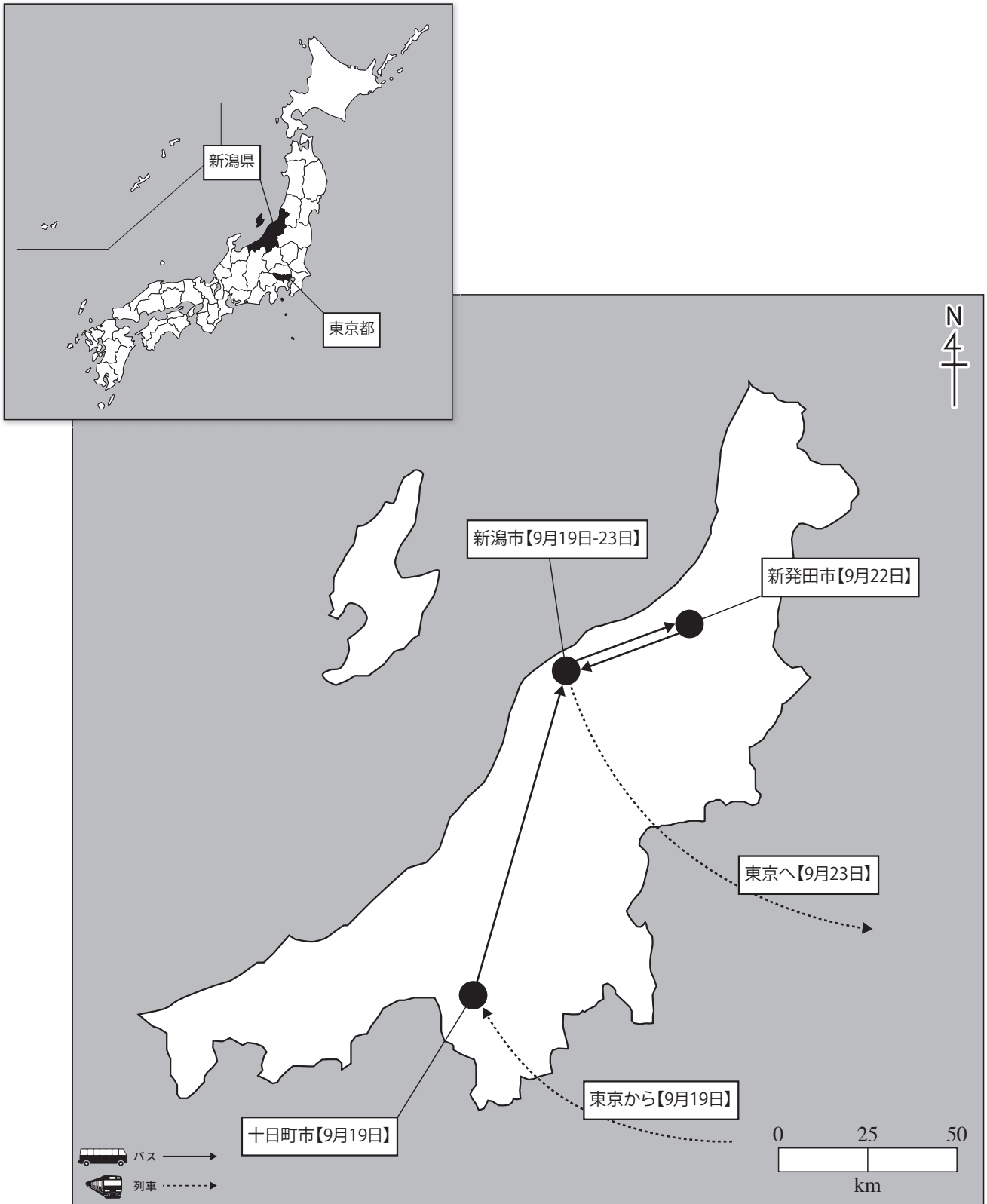
プログラム	COMETA 訪問
所在地	コモ
主たる面会者	テレサ・サルビノ (Teresa Salvino) 受入責任者
概要	障害者、ドロップアウト経験者、移民といった社会的に困難な状況にある生徒が通う職業訓練校及び木工訓練センターである。サルビノ氏の案内の元、まずは職業訓練校の屋外設備、屋内で行っている活動の説明を受け、授業の様子を見学した。続いて木工訓練センターへ向かい、作業している様子や作品を紹介していただいた。

プログラム	ANAGRAMMA 訪問
所在地	コモ
主たる面会者	テレサ・サルビノ (Teresa Salvino) 受入責任者 マルセッロ・ベッタグリオ (Marcello Bettaglio) レストランマネージャー
概要	COMETAが運営するレストランで、COMETAの職業訓練校で学んだ知的障害の当事者などが従業員として勤務されていた。実際に食事を頂きながら従業員の方が働く様子を見学したり、サルビノ氏にお話を伺ったりすることで、COMETAが実施している取組をより深く理解する時間となった。

9月20日（土）

プログラム	Insieme a Te (インクルーシブビーチ) 訪問
所在地	ラベンナ
主たる面会者	デボラ・ドナーティ (Devola Donati) 会長 ボランティア青年 7 名
概要	「Insieme a Te」はイタリア語で「あなたと一緒に」という意味で、重度障害者などビーチを訪れることにバリアがある人とその家族が共に楽しめるインクルーシブビーチである。会長であるデボラ氏からインクルーシブビーチの概要と経緯について御説明いただき、その後見学を行った。見学後の質疑応答では、デボラ氏だけでなくビーチでボランティアを行っている青年たちとの意見交換も行った。

地方プログラム行動地図（新潟県）



地方プログラム行動記録（新潟県）

月日	時間	行動日程
9月19日 (金)	8:22 9:39 10:00 10:40 10:45-14:00 11:00 12:10 13:05 13:35 14:00 15:40 16:00-16:30 16:40 17:45 18:15 19:00-20:30	東京駅発（とき307） 越後湯沢駅着 越後湯沢駅発 バス内オリエンテーション 十日町小学校着 テーマ別施設訪問① 十日町市立十日町小学校、ふれあいの丘支援学校、発達支援センター「おひさま」 ・授業見学 ・学校紹介、校内見学 ・給食 ・児童と交流 ・懇談、意見交換 十日町小学校発 新潟県庁着 鈴木康之新潟県副知事表敬訪問 新潟県よりレクチャー ・新潟県の概要 ・障害者分野に関する行政の取り組みと特色 新潟県庁発 ホテル着 歓迎会 ホームステイ
9月20日 (土)		ホームステイ
9月21日 (日)	14:30 15:00-17:00 15:30 17:15 18:00	ホームステイ ホストファミリーと昼食 新潟県障害者交流センター集合 テーマ別施設訪問② 新潟県障害者交流センター ・施設紹介、見学 ・利用者との交流（ポッチャ） 新潟県障害者交流センター発 ホテル着、チェックイン ホテル周辺で自由夕食
9月22日 (月)	9:45 10:00-13:30 11:35 12:30 13:30 14:00 14:30 14:45 15:15 17:00 18:00	豊栄福祉交流センター着 テーマ別施設訪問③ 社会福祉法人とよさか福祉会 豊栄福祉交流センター クローバー訪問 ・施設見学、利用者との交流 ・ローカルユースとのディスカッションプログラム ・昼食 豊栄福祉交流センター発 新発田城着 ・見学、周辺を散策 新発田城発 清水園着 ・見学 ・五階菱へ移動、休憩 ・自由散策、買い物 五階菱発 ホテル着 ローカルユースとの自由夕食

月日	時間	行動日程
9月23日 (火)	10:00	ホテルチェックアウト
	10:30	白根グレープガーデン着 ・ブドウ狩り体験
	11:30	白根グレープガーデン発
	11:50	新潟ふるさと村着
	12:00	・昼食 ・自由散策、買い物
	13:30	新潟ふるさと村発
	13:50	新潟駅着
	14:27	新潟駅発（とき324）
	16:28	東京駅着



第4章

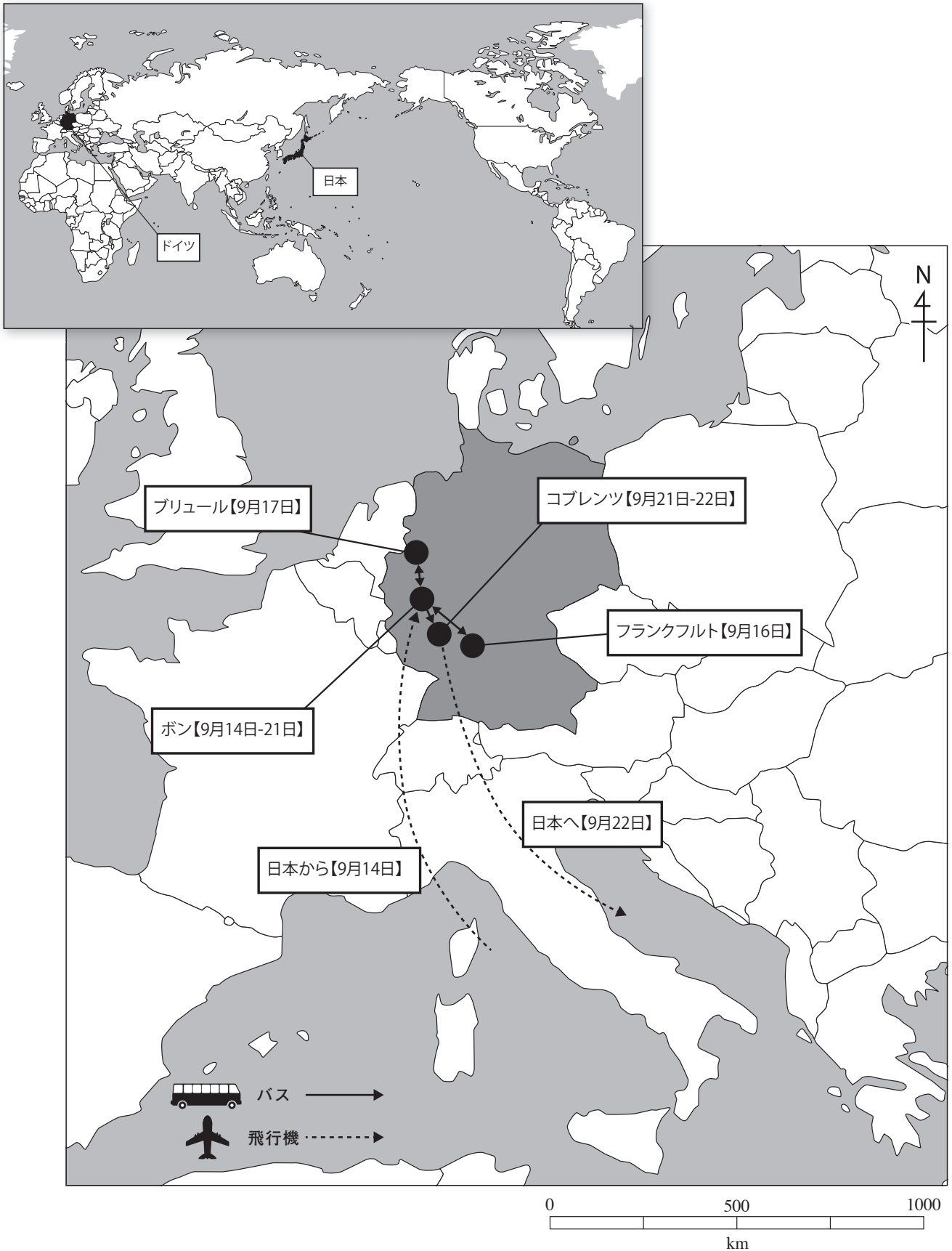
テーマⅡ 高齢社会分野

- 日本青年ドイツ派遣
- ドイツ青年日本招へい



日本青年ドイツ派遣

ドイツ派遣団行動地図



ドイツ派遣団行動記録

月日	時間	行動日程	滞在都市
9月14日 (日)	10:40 17:50 21:00	東京（成田発）(JL407) フランクフルト着 ホテル着	東京 ↓ ボン
9月15日 (月)	9:30 10:05-10:15 10:20-12:10 12:30-13:15 14:00-15:45 16:30	ホテル発 オリエンテーション（於：BAGSO） ドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関（IJAB）及びドイツ高齢市民組織全国協議会（BAGSO）からの講義 昼食 ドイツ連邦教育・家庭・高齢者・女性・青少年省（BMBFSFJ）表敬訪問及び講義 ホテル着 夕食	
9月16日 (火)	8:00 10:30-13:00 16:00-17:20 17:20-19:00 22:30	ホテル発 フランクフルト高齢者・障がい者支援協会訪問及び講義 昼食 在フランクフルト日本国総領事公邸表敬訪問 ドイツ青年とともに総領事公邸でレセプション ホテル着	
9月17日 (水)	9:00 10:00-12:15 12:30-13:30 13:45-15:30 16:00-18:10	ホテル発 ブリュール市役所訪問及び講義 昼食 アウグストブルク城における文化体験 「サイクリング・ウィズアウト・エイジ」ドイツ調整事務局訪問及び講義 夕食	
9月18日 (木)	9:00 11:00-13:30 16:00	ホテル発 ロレスプロイヒ村の商店（DORO）訪問及び講義 昼食 ホテル着 夕食	
9月19日 (金)	9:00 10:00-12:15 12:30-13:30 14:30-16:00 17:00	ホテル発 多世代ハウス「国際ハウス」訪問及び講義、トロイスドルフ副市長との面会 昼食 ボン市内で自由行動 ホームステイマッチング（於：IJAB）	
9月20日 (土)		ホームステイ	
9月21日 (日)	AM 12:00-14:00 14:30～ 15:30	ホームステイ 歓送昼食会 コブレンツへ移動 ホテル着	↓ コブレンツ
9月22日 (月)	～12:00 13:00-14:20 17:00 20:10	自由行動 ライン川クルーズ (Boppard - St.Goar) 空港着 フランクフルト発 (JL408)	
9月23日 (火)	16:15	東京（成田）着	↓ 東京

ドイツ派遣団プログラム一覧

9月15日（月）

プログラム	ドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関 (IJAB) 及びドイツ高齢市民組織全国協議会 (BAGSO) からの講義
所在地	ボン
主たる面会者	Dr. Guido Klumpp (BAGSO マネージングディレクター) Ina Voelcker (BAGSO 国際高齢化政策担当室長) Christina Gerlach (IJAB 国際青年政策協力室長)
概要	BAGSOは1989年設立のボンを拠点とする非営利団体であり、高齢者に関する様々な提言を政府へ行ったり、シニア市民デーの開催等を行ったりしており、傘下に120の関連団体を有する。IJABはBMBFSFJ(ドイツ連邦教育・家庭・高齢者・女性・青少年省)より委託を受け青少年育成活動を行う組織である。講義ではBAGSOの組織構成や力を入れている活動について50分程度説明を受け、日本青年からの質疑応答を10分程度行った。その後、IJABの国際交流プログラムについて30分程の説明の後、日本青年から質疑応答を10分程度行った。

プログラム	ドイツ連邦教育・家庭・高齢者・女性・青少年省 (BMBFSFJ) 表敬訪問及び講義
所在地	ボン
主たる面会者	Nicole Zundorf-Hinte (高齢者インクルージョン国際政策部長) Ella Feger(インターン)
概要	高齢者インクルージョン国際政策部長の Zundorf-Hinte氏よりドイツにおける高齢者政策について1時間程度講義を受けた。その後、30分程度日本青年から質疑応答を行った。

9月16日（火）

プログラム	フランクフルト高齢者・障がい者支援協会 (FRANKFURTER VERBAND) 訪問及び講義
所在地	フランクフルト
主たる面会者	Frédéric Lauscher (理事)
概要	FRANKFURTER VERBANDは、1918年にフランクフルト市民によって設立された非営利団体である。1920年代に最初の介護施設を開設し、今日では、高齢者支援の分野における数少ない総合的なサービス提供機関として、地域密着型の相談・支援活動から施設介護まで幅広く事業を展開。現在、約1,500名の職員が約30,000人の高齢者を支援しており、フランクフルト市における主要な高齢者福祉の担い手の一つとなっている。同協会の理事から設立の経緯、組織形態、目的などを御講義いただいた後、30分程度質疑応答を行った。

プログラム	在フランクフルト日本国総領事公邸表敬訪問及びレセプション
所在地	フランクフルト
主たる面会者	伊藤 毅(総領事) 奥野舞子(副領事)
概要	総領事への表敬訪問を行い、1時間程度日本青年から質疑応答を行った。質疑応答ではドイツにおける高齢社会の現状から、総領事としてドイツに赴任して驚いたことなど様々なことにお答えいただいた。その後、ドイツ招へい青年も合流し、レセプションが開催された。レセプションでは練習したソーラン節と日本紹介クイズを披露し、ドイツ招へい青年との親睦を深めた。

9月17日（水）

プログラム	ブリュール市役所訪問及び講義
所在地	ブリュール
主たる面会者	Dieter Freytag (ブリュール市長) Aurelia Vietzen-Niggemeyer (高齢化インクルージョン人口動態部門部長)
概要	市長より歓迎の御挨拶をいただいた後、ブリュール市の高齢社会対策の政策について担当の方から講義を受け、日本青年から質疑応答を行った。

プログラム	アウグストブルク城における文化体験
所在地	ブリュール
概要	18世紀に建てられた繊細で優美なロココ様式の宮殿であり、世界遺産にもなっているアウグストブルク城を訪れた。美しくダイナミックな天井画やエレガントさと荘厳さが印象的で、国賓を迎えたと言われる「階段の間」等を見学し、ドイツの当時の美学、歴史、建築様式についての学びを深めた。

プログラム	「サイクリング・ウィズアウト・エイジ」ドイツ調整事務局 (National Coordination office of "CYCLING WITHOUT AGE": Radeln ohne Alter) 訪問及び講義
所在地	ボン
主たる面会者	Daniela Kinkel (資金調達・公報担当)
概要	同団体はデンマークで設立された非営利団体であり、高齢者や移動に制約のある方々を対象に、三輪の力車タイプの自転車による無料ライドを実施している。活動を通じ「社会的参加」「世代間交流」「地域とのつながり」を促進しており、単なる移動手段ではなく、コミュニティづくり・孤立防止の視点が重視されている。訪問時は、施設の取組について御講義をいただき、質疑応答を行った。実際に公園で自転車に乗る体験を行った後、動画を視聴し、世界中に展開する同団体の取組を学んだ。

9月18日（木）

プログラム	ロレスブロイヒ村の商店 (DORO) 訪問及び講義
所在地	ジマーラート
主たる面会者	Bernd Goffart (ジマーラート市長) Andreas Mund (DORO運営組織 第一会長) Reinhold Köller (DORO運営組織 第二会長) Markus Terodde (アーヘン地方担当部長)
概要	同施設は地域の人々によって創設され、日用品等の販売を行う商店としての機能の他、交流拠点としての役割も果たす。店内にはカフェスペースがあり、住民の孤立防止や地域のつながり強化に貢献している。ここでは、DOROの設立の経緯や現在力を入れている取り組みについて1時間程度お話をいただき、日本青年から質疑応答を行った。その後、記念撮影を行い日本青年からソーラン節を披露した。

9月19日（金）

プログラム	多世代ハウス「国際ハウス」(Mehrgenerationenhaus "Haus International") 訪問及び講義、トロイスドルフ副市長との面会
所在地	トロイスドルフ
主たる面会者	Tanja Gaspers (トロイスドルフ副市長) Kirsten Steinhoff-Fahadi (ディレクター)
概要	ドイツ全体に520か所ある、年齢や出身を問わずいつでも誰でも予約不要で利用できるコミュニティセンターであり、移民の言語サポートや学習サポートも行っている。同施設では、概要や取組内容について御講義いただき、質疑応答を行った。その後、施設内を見学し、施設の方々と利用者の方々に対して日本文化紹介としてソーラン節を披露した。

プログラム	ホームステイマッチング
所在地	ボン
主たる面会者	Claudia Mierzowski (IJAB 国際青少年政策連携担当プロジェクト担当官)
概要	ホームステイについて説明を受けた後、ホストファミリーと面会し、それぞれの家庭に向かった。

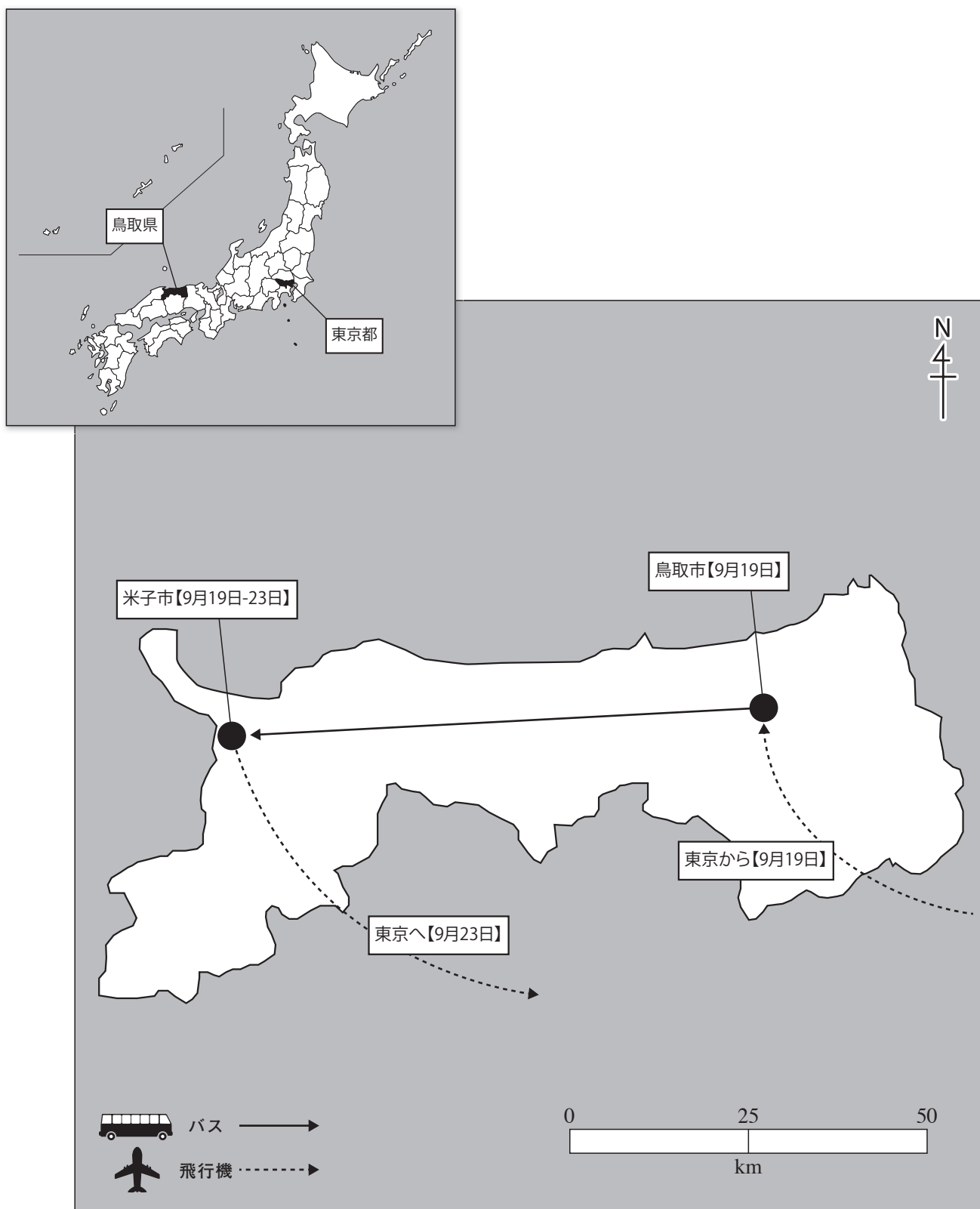
9月21日（日）

プログラム	Sudhaus Bonnにて歓送昼食会
所在地	ボン
概要	それぞれのホームステイ先からホストファミリーとともに会場に集合した。昼食の後、ソーラン節の披露と日本紹介クイズを行った。

9月22日（月）

プログラム	ライン川クルーズ (Boppard - St.Goar)
所在地	コブレンツ
概要	ライン川で1時間20分程度船に乗り、船から見える古城や歴史的建造物、葡萄畑等の景色を楽しみながら解説を聞き、ドイツについての文化的学びを深めた。

地方プログラム行動地図（鳥取県）



地方プログラム行動記録（鳥取県）

月日	時間	行動日程
9月19日 (金)	9:20 10:35 11:05 11:15-12:20 12:30 14:00-14:20 14:30 16:00 18:10 18:30-19:10	羽田空港発（ANA293） 鳥取空港着 鳥取空港発 鳥取砂丘見学 鳥取県庁着、昼食 中原美由紀鳥取県副知事表敬訪問 鳥取県から県の高齢者施策の説明 鳥取県庁発 ホテル着、ホームステイ準備 ホームステイマッチングセレモニー（ファミリープラザ） ホームステイ
9月20日 (土)		ホームステイ
9月21日 (日)	16:00	ホームステイ ホテルチェックイン 自由時間
9月22日 (月)	9:00-10:20 9:00 9:10 9:50 10:30-11:30 12:00-13:30 14:00-15:15 14:00 15:30-17:00 18:30	弓浜ホスピタウン訪問 ・医療法人・社会福祉法人真誠会理事長挨拶 ・米子市高齢者福祉施策説明 ・フレイル対策の実態説明 米子市弓浜地域・老人福祉センター訪問 ・フレイル活動視察 昼食 崎津夢農園訪問 ・多世代交流（芋ほり） 弓浜ホスピタウンにてローカルユースとのディスカッション 歓送迎会（ファミリープラザ）
9月23日 (火)	10:00-11:40 12:00-13:30 14:00 15:10 16:40	水木しげるロード散策 昼食 米子空港着 米子空港発（ANA1088） 羽田空港着



第5章

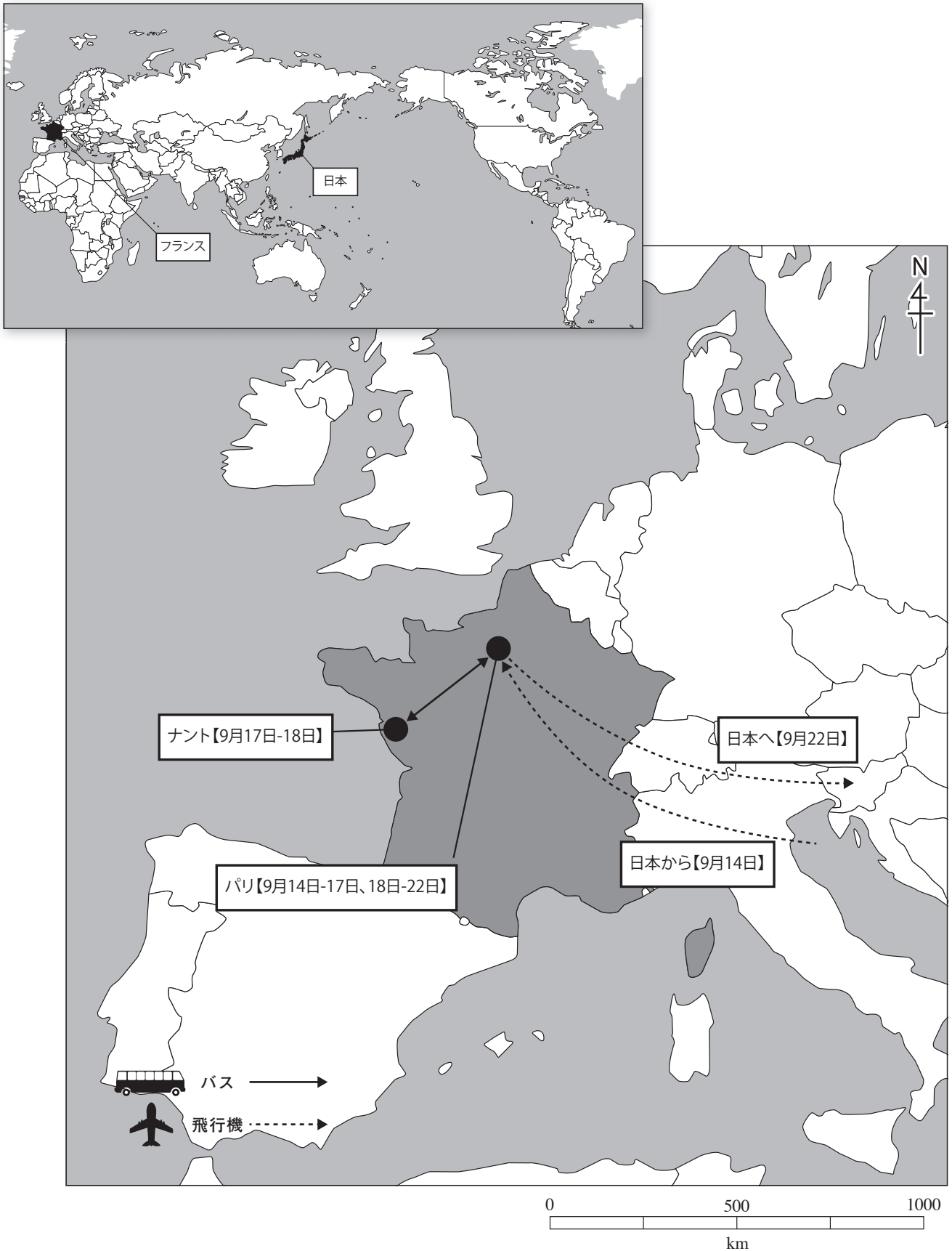
テーマⅢ バリアフリー・ユニバーサルデザイン分野

- 日本青年フランス派遣
- フランス青年日本招へい



日本青年フランス派遣

フランス派遣団行動地図



フランス派遣団行動記録

月日	時間	行動日程	滞在都市
9月14日 (日)	8:50 16:35 18:30	東京(羽田)発(AF163) パリ着 ホテル着	東京 ↓ パリ
9月15日 (月)	10:00-11:00 11:30-12:45 13:00-14:00 16:00-17:45	スポーツ・青少年・市民活動省訪問 オリンピック・パラリンピック関係省庁代表团(DIJOP)とのディスカッション 昼食 アディダス・アリーナ訪問 夕食	
9月16日 (火)	9:30 10:00-12:20 14:30-15:30 17:00-18:30	ホテル発 ピエール・ド・クーベルタン競技場訪問 昼食 在フランス日本国大使館表敬訪問 自由散策 パリ日本文化会館にてレセプション	
9月17日 (水)	8:45 9:39-11:54 14:30-16:00 16:30-17:30	ホテル発、モンパルナス駅へ ナントへ移動(TGV8973) 昼食 ブルターニュ公爵城訪問 インフォ・ジュヌ訪問 夕食	ナント ↓
9月18日 (木)	8:30 9:00-10:00 10:30-13:00 15:00-16:00 22:00	ホテル発 ナント市副市長、市議会議員、市役所職員との朝食会 ナントデザイン学校訪問 昼食 メゾン・ド・カルティエ訪問 ホテル着 夕食	パリ ↓
9月19日 (金)	8:40 9:30-12:00 12:00-13:00 14:00-16:20 17:00-19:00	ホテル発 ハンディ・ラボ訪問 昼食 パリ市アクセシビリティ強化地区訪問 ホームステイマッチング	
9月20日 (土)		ホームステイ	
9月21日 (日)	AM 13:00-14:30 14:30~	ホームステイ 歓送昼食会 自由行動	
9月22日 (月)	~18:00 18:00 22:00	自由行動 ホテル発 パリ発(AF274)	
9月23日 (火)	18:30	東京(羽田)着	東京

フランス派遣団プログラム一覧

9月15日（月）

プログラム	スポーツ・青少年・市民活動省訪問
所在地	パリ
主たる面会者	Thibaut de SAINT POL(青少年・国民教育・市民活動局長) Séverine ORIGNY-FLEISHMAN(国際交流室マネージャー) Christine LE MARCHAND Juliette M'HADHEBI
概要	スポーツ・青少年・市民活動省を訪問。同省ではスポーツや若者育成に関する活動を行っている。スケジュール確認・激励の言葉などをいただいた後、同省で取り組まれている施策について伺った。

プログラム	オリンピック・パラリンピック関係省庁代表团(DIJOP)とのディスカッション
所在地	パリ
主たる面会者	Alexandra BARRIER(DIJOP 事務局長) Julien HUGELE(DIJOP 専門家グループ)
概要	2024パリオリンピック・パラリンピックに際し、アクセシビリティ・ユニバーサルデザインを高めるために活動した団体。当時どのような活動が行われたのか、今後どのような活動が行われるのかなどのレクチャーを受けた。当事者目線のお話など貴重な体験を伺うとともに20分ほど質疑応答なども行った。

プログラム	アディダス・アリーナ訪問
所在地	パリ
主たる面会者	Pascal MATHIEU(パリ市スポーツ振興・競技施設管理部長) François HÉRAULT Amélia BAOUZ
概要	パリオリンピック・パラリンピックに合わせて竣工したアリーナ。ユニバーサルデザインに特に配慮しながら設計された施設である。アディダス・アリーナの見学を通して、フランスでアクセシビリティが評価されている最先端の建造物として計画についての説明を受けた。エントランスから客席、裏側など様々な場所を見学し、フィールドワークを行った。

9月16日（火）

プログラム	ピエール・ド・クーベルタン競技場訪問
所在地	パリ
主たる面会者	Pascal MATHIEU(パリ市スポーツコンセプション パリ市ハイレベルスポット パリ市国際スポーツイベント部長)
概要	古い建物をリノベーションして活用された競技場。同競技場の見学を通して、リノベーション時に苦労した点や工夫した点などの計画についての説明を受けた。エントランスから客席、裏側など様々な場所を見学し、フィールドワークを行った。

プログラム	在フランス日本国大使館表敬訪問
所在地	パリ
主たる面会者	齋藤敦（在フランス日本国大使館 公使） 小久保智史（在フランス日本国大使館広報文化部 一等書記官）
概要	在仏日本国大使館を表敬訪問。公使に激励の言葉をいただいた後、日本代表青年それぞれの自己紹介とフランスにおけるバリアフリー・ユニバーサルデザインに関する質疑応答を行った。

プログラム	大使館レセプション
所在地	パリ
主たる面会者	植田達也（在フランス日本国大使館 参事官） 小久保智史（在フランス日本国大使館広報文化部 一等書記官） Christophe CASTEL（スポーツ・青少年・市民活動省 青少年・市民活動に関する省庁間連携政策課長）
概要	パリ日本文化会館において開催。来賓のお二方に御挨拶いただいた後、派遣団による日本文化紹介を行った。日本青年とフランス青年の交流を深めることができた。

9月17日（水）

プログラム	ブルターニュ公爵城訪問
所在地	ナント
主たる面会者	Laurence Dhaene（企画開発・顧客戦略担当）
概要	フランスの地方都市ナントに位置する歴史ある城。歴史的建造物とバリアフリー・ユニバーサルデザインがどのように融合されているのかなどをフィールドワークを通して学んだ。それぞれの場所で解説をいただきながら適宜質疑応答も行った。

プログラム	インフォ・ジュヌヌ訪問
所在地	ナント
主たる面会者	Marinette Vidal（青少年情報提供員）
概要	フランスの若者に信頼度と包括性の高い情報を提供する活動している団体・施設。施設でどのような取組、活動が行われているのかをクイズゲームを利用して学んだ。後半には20分ほど質疑応答を行った。

9月18日（木）

プログラム	ナント市副市長、市議会議員、市役所職員との朝食会
所在地	ナント
主たる面会者	Pauline Langlois（ナント市副市長） Isabelle Kauffmann（青少年省 青少年・国民教育顧問） Gaëlle Weiersmuller（青少年ミッション責任者） 他、複数名の市議会議員
概要	副市長から御挨拶をいただくとともに市の施策についてお話を伺った。朝食を交えて市議会議員の方と日本青年の意見交換が行われた。

プログラム	ナントデザイン学校訪問
所在地	ナント
主たる面会者	Stéphane Gouret(副学長)
概要	ナントに位置するデザイン学校。ナントデザイン学校での教育内容やバリアフリー・ユニバーサルデザインに関するプロジェクトなどのレクチャーをそれぞれの担当者から受けた。後半では実際に学校内を周りながら、設備内容やどのように使われているのかなどの説明を受けた。

プログラム	メゾン・ド・カルティエ訪問
所在地	ナント
主たる面会者	Agathe Konate(ナント市ラ・ロコモティブ地区会館職員)
概要	地域のコミュニティ施設。施設を訪問し、若者支援や子育て支援の政策、それらに活用される空間について説明をいただいた。

9月19日(金)

プログラム	ハンディ・ラボ訪問
所在地	パリ
主たる面会者	Fanny COHEN(ディレクター)
概要	ユニバーサルデザインなどをはじめとした研究・開発が行われている施設。同ラボにおける開発プロダクトに関するプレゼンテーションがとり行われた。また、日本青年からは日本におけるバリアフリー・ユニバーサルデザインの例を紹介した。その後実際に行われている活動をそれぞれの担当の方からレクチャーをしていただいた。最後は昼食を交えながら日本青年とハンディ・ラボの方々と意見交換を行った。

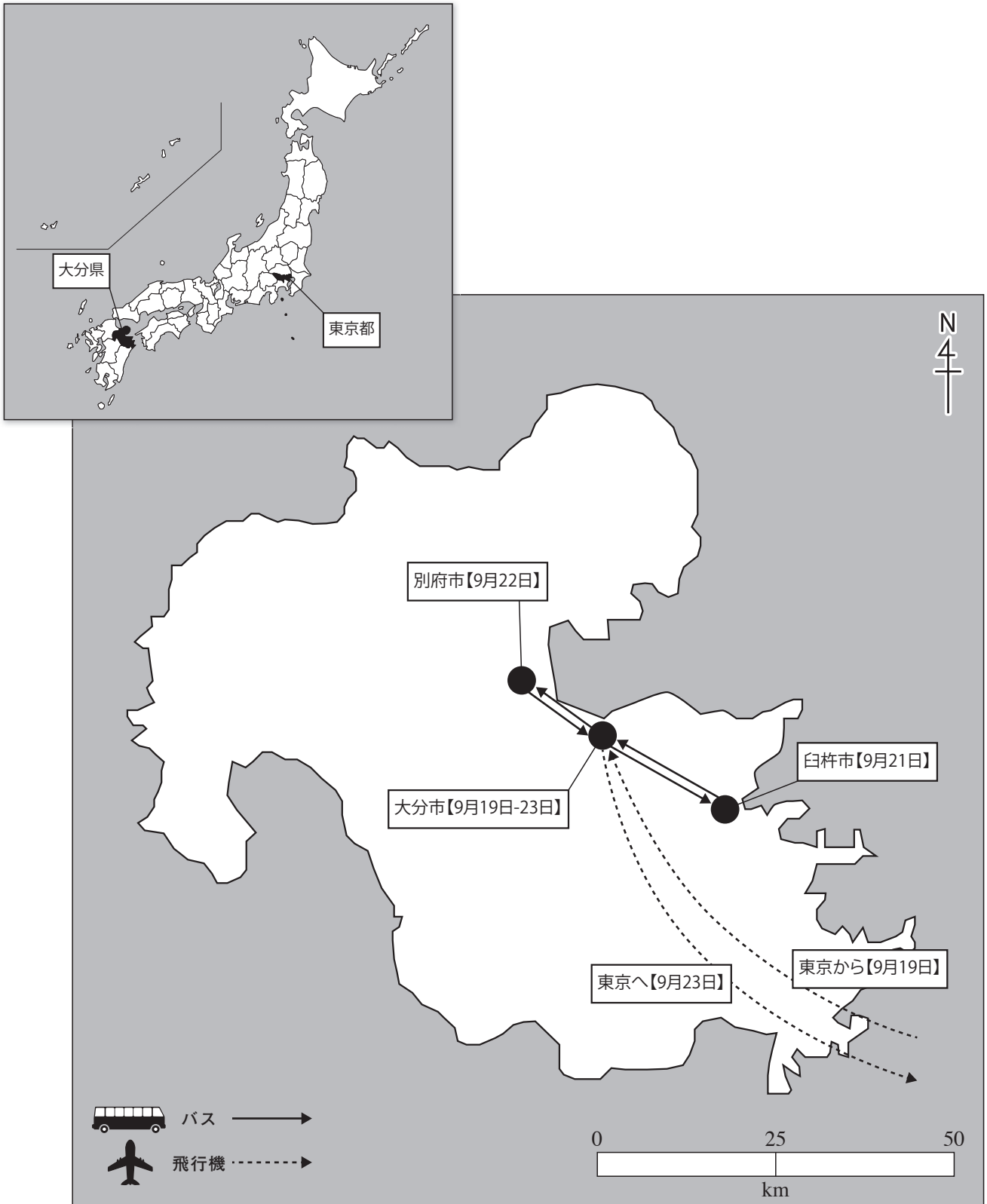
プログラム	パリ市アクセシビリティ強化地区訪問
所在地	パリ
主たる面会者	Anne-Sophie TISSIER(パリ市事務局 アクセシビリティ・障がいプロジェクトマネージャー)
概要	アクセシビリティに考慮し計画されたエリア。当該エリアを管理する団体と共に実際に街を歩きながら、道路・公園・施設など地区内のテーマに関する計画についてのレクチャーを受けた。

プログラム	ホームステイマッチング
所在地	パリ
主たる面会者	Thibaut de Saint Pol(青少年・国民教育・市民活動局長) Séverine ORIGNY-FLEISHMAN(国際交流室マネージャー)
概要	軽食を交えながら日本青年とホストファミリーのマッチングが行われた。マッチング終了後、日本青年は各家庭へと向かった。

9月21日(日)

プログラム	歓送昼食会
所在地	パリ
概要	ホストファミリーと日本青年が集まり、歓送昼食会が開かれた。

地方プログラム行動地図（大分県）



地方プログラム行動記録（大分県）

月日	時間	行動日程
9月19日 (金)	10:00 11:35 11:50 13:00 14:45 15:00 16:00 17:00 17:10 19:00-21:00	羽田空港発（JL663） 大分空港着 大分空港発 ホテル着 昼食 美術館自由散策 ホテルロビー集合 大分県庁訪問 ・県のユニバーサルデザイン・バリアフリー施策について講義 桑田龍太郎大分県副知事表敬訪問 大分県庁発 ホテル着 歓迎会・ホームステイマッチング ホームステイ
9月20日 (土)		ホームステイ
9月21日 (日)	10:00 10:30 11:10 12:00 12:45 13:00 16:00 16:45	ホームステイ ホテル集合 ホテル発 白杵石仏着、石仏散策 昼食 石仏発 白杵市街地・着物体験 街歩き→白杵城址 白杵発 ホテル着
9月22日 (月)	9:00 12:00 13:30-16:15 16:00 17:00	大分県立芸術文化短期大学訪問 ・学生によるプレゼンテーション 昼食 社会福祉法人 太陽の家訪問 ・太陽ミュージアム+パラスポーツ体験 ・バリアフリースーパー「サンストア」見学 ホテル着
9月23日 (火)	10:45 11:20 12:30 14:05	西大分ホーバーターミナル発 大分空港ホーバーターミナル着 大分空港発（JL668） 羽田空港着



第6章

東京プログラム

- 東京プログラムの概要
- テーマⅠ：障害者分野
- テーマⅡ：高齢社会分野
- テーマⅢ：バリアフリー・ユニバーサルデザイン分野



東京プログラムの概要

東京プログラムについて

日本参加青年及び外国参加青年は、令和7年9月24日(水)から26日(金)の2泊3日にわたり、都内において一堂に会し、「東京プログラム」に参加した。

本プログラムは、共通のテーマに関心を持つ日本参加青年と外国参加青年が多角的なディスカッションを通じて相互の事情や課題意識を共有し、さらにフィールドワークを通じて実践的な知見を深めることを目的とするものである。

9月24日には、辻清人内閣府副大臣への表敬訪問を実施するとともに、各テーマに分かれ、ファシリテーターの進行の下、グループディスカッションを実施した。

9月25日には、テーマ別視察を実施した。日本参加青年及び外国参加青年は、各テーマに関連する企業や団体等を訪問し、訪問先による説明や現場体験を通じて、それぞれのテーマに対する知見を深めた。

9月26日には、グループディスカッションにおける最終的な意見交換を経て、成果発表会・評価会にて、それぞれのテーマや事業全体から得られた学びや成果を発表した。夜間に開催された文化交流レセプションには、辻清人内閣府副大臣を始め、各国大使館からも多数の来賓が出席し、日本参加青年及び外国参加青年はそれぞれの国の歌や文化等を発表し、盛會裡に終了した。

東京プログラム日程

月日	時間	行動日程
9月24日 (水)	東京プログラム 第1日目	
	8:50- 9:30	内閣府へ移動
	9:30-10:30	オリエンテーション
	10:30-10:50	辻清人内閣府副大臣表敬訪問
	11:00-11:50	行政官によるテーマ別講義
	12:00-12:20	グループディスカッション
	12:20-13:20	ホテルへ移動
	13:30-14:40	昼食
9月25日 (木)	東京プログラム 第2日目	
	10:00-17:00	株式会社舞浜コーポレーション訪問
	11:30-12:30	昼食
	17:00-18:00	ホテルへ移動
	18:00-18:30	グループディスカッション
	9:30-12:00	社会福祉法人江東園訪問
	12:00-13:00	昼食
	13:00-13:40	移動
	13:40-15:45	社会福祉法人シルヴァーウィング訪問
	15:45-16:30	ホテルへ移動
	16:30-18:00	グループディスカッション
	9:30-10:30	都庁訪問
10:30-11:30	都営地下鉄視察&乗車体験(都庁前~国立競技場)	
11:30-12:15	国立競技場見学	
12:30-13:00	昼食	
13:00-13:30	東京体育館見学	
14:00-16:00	都営バス視察&乗車体験(小滝橋車庫~平河町二丁目)	
16:00-16:15	ホテルへ移動	
16:30-18:00	グループディスカッション	
18:00-20:00	夕食	
9月26日 (金)	東京プログラム 第3日目	
	9:00-12:00	グループディスカッション
	12:00-13:30	昼食
	13:30-15:00	成果発表会準備
	15:15-16:30	成果発表会・評価会
	18:00-20:00	文化交流レセプション

テーマ I : 障害者分野

本テーマでは、障害者に関連する日本と各交流国の施策の特徴や好事例を学び、ディスカッションを通じた比較検討によって相互理解を深めた上で、将来における共生社会の実現に向けて参加青年達にできることは何かを考えた。

テーマ別視察

株式会社舞浜コーポレーション

ファシリテーター

山下 恭子(一般財団法人あしなが育英会勤務)

ディスカッション全体概要

月日	令和7年9月24日～26日
場所	都市センターホテル会議室
テーマ	真のインクルーシブ社会
参加者	日本青年7名、外国青年8名
スケジュール	9月24日(水) 15:00～17:00 グループディスカッション 9月25日(木) 終日 株式会社舞浜コーポレーション視察 9月26日(金) 09:00～12:00 グループディスカッション 12:00～13:30 昼食 13:30～15:00 成果発表会準備 15:15～16:30 成果発表会・評価会

ディスカッショングループ別成果

グループ1 概要		
グループテーマ	① Opportunities & Possibilities ② Self - Determination ③ Human Rights	
参加者	日本青年 2名 池田奈々美 大友孝祐	イタリア青年 3名 Gaia SPASARI Sabrina LAMB Martina INTAGLIATA
グループ1 成果		
<h3>1. イタリアの現状</h3> <ul style="list-style-type: none"> 道や建物などに物理的なバリアが依然として多く残されており、身体障害者の移動に困難さがある。 テクノロジーの活用が進んでいない。(教育の場面ではデジタルデバイスではなく紙とペンでノートをとることが依然としてある) 障害者の人権や機会保障などに対する姿勢においては先進国である。 <h3>2. 日本の現状</h3> <ul style="list-style-type: none"> 物理的な面や法律などにおいては整備が進んでいるが、一般レベルの適切な障害理解は追いついていない。 教育や労働など日常場面において実質的な分離状態が続いている。 特例子会社に関しては、障害特性に配慮した環境が整えられている一方で、単一的な作業を繰り返す形式に終始しており、働きがいのある職場としては疑問が残る。 <h3>3. 学んだこと、気がついたこと</h3> <p>イタリア青年からの言葉として印象的であったのは、「イタリアは障害に対する向き合い方(マインドセット)は日本より進んでいるけれど、街中のバリアフリーは日本より遅れている」という言葉であった。日本はハード面、イタリアはソフト面においてそれぞれ先進国としての要素を持っているが、もう片方の視点が不足していると推測できる。本ディスカッションを通して、環境や法制度などのハード面、社会全体の理解や現場レベルでの対応などソフト面の双方から現状にアプローチしていくことが求められることを再確認した。</p> <p>また、イタリア青年とのディスカッションの中で、「日本には障害者のリーダーや活動家はいるのか」と質問されたことがあった。イタリアでは俳優や政治家など、著名な障害当事者が意見を表明したり、障害に関する活動を行っていたりするという。その場では、国内で一般的に知られている当事者の活動家が思い浮かばなかった。自分たちの国でできることを考える際も、イタリア青年たちの多くが「権利を主張する、自分の意見をもって上司と闘う(Fighting)」ことを今後のアクションとして挙げており、彼らから人権の視点や声に出して訴えていくことの重要性を学んだ。</p>		

グループ2 概要		
グループテーマ	Inclusive Education	
参加者	日本青年 3名 大井愛華 長根亜佐子 古川翔琉	イタリア青年 2名 Beatrice TASSONE Giulia ACAMPORA
グループ2 成果		
<h3>1. イタリアの現状</h3> <ul style="list-style-type: none"> イタリア全土で、原則として支援級・支援学校は無く、障害児も通常学校の通常クラスに通うインクルーシブ教育を行っている。 イタリア青年の課題意識として、学校で担任とは別に障害児ごとに1人つき、障害児の個別の支援や授業中のサポートを担っている支援教師の質が十分でないことがあるため、支援教師の教育が必要という意見があった。 障害者の法定雇用率は7%である。 <h3>2. 日本の現状</h3> <ul style="list-style-type: none"> イタリアと比較し、障害者分離がある。 通常学校の他に、支援級・支援学校がある。当事者家族の中にも分離した教育が効果的で良いと考える人もいる。 障害者雇用促進法において、現在、障害者の法定雇用率を2.5%と定めている。我々のグループディスカッションにおいて、インクルーシブ教育を行い幼少期から包摂された環境で育つことで、学校以外でも「障害者と障害のない人が共に過ごす環境が当たり前」というマインドセットになり、結果、障害者雇用率の上昇につながるのではないかという意見が出た。 イタリア青年より、公共交通機関など公共の場のアクセシビリティ対応がイタリアと比較し整っているという意見があった。一方、精神・知的障害者への配慮など、目に見えづらい部分の理解はイタリアに遅れをとっているとの意見があった。 <h3>3. 学んだこと、気がついたこと</h3> <p>日本における精神・知的障害者への理解を深めるためには、学校教育だけでなく家庭教育を含めた社会全体での取り組みが必要であると感じた。日本で障害者に用意されている学校教育は実質的には分離された環境であり、イタリアと比較し、教育者にも教育を受ける側にも、共生社会への意識が十分に浸透していない現状があることを、イタリア青年からの指摘を受けて改めて感じた。</p> <p>また、どれほど教育制度が整っていても、家庭の中に偏見が残っていれば真の共生は実現しない。したがって、学校と家庭の双方から教育の在り方を見つめ直すことが、知的・精神障害者への理解を深め、偏見を解消していくために重要であるという結論に至った。</p>		

グループ3 概要		
グループテーマ	Inform and Sensibilize to Include	
参加者	日本青年 2名 青木佑夏 鈴木日苗	イタリア青年 3名 Gaetano LO PRESTI GIUNTA Anna CONFORTINI Damiano SIGNORONI
グループ3 成果		
<p>話し合う順序としては、①インクルーシブな社会とは何かについて個人の考えを共有、②それぞれの考えを(1)個人の観点及び(2)社会の観点にグルーピングし、③インクルーシブな社会を実現するための方策について議論。</p> <p>(1) 個人の観点</p> <ul style="list-style-type: none"> 自身の生き方を実現する権利を有し、自身の潜在能力や個性を最大化して社会に貢献できること。 ⇒ 例) 職場、学校、住居、趣味等について、自らの希望を実現できること <p>(2) 社会の観点</p> <ul style="list-style-type: none"> 障害者に対する心理的な障壁を撤廃し、偏見なく障害者と接することができるようになること。 ⇒ キーワード) アンチスティグマ、偏見のない社会、マインドセットの変容 <p>インクルーシブな社会を実現するための方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼少期から障害者への配慮・理解・受け止め方(sensibilization)を形成する。 ⇒ 例1) 障害者と一緒に何かに取り組み、協働すること ⇒ 例2) 「道徳」のような情操教育や感情教育、またSEL(Social Emotional Learning)に関する双方向授業の実施 ⇒ 例3) インクルーシブクラスの実現(障害者と障害がない人が同じクラスで教育を受けること) ⇒ 例4) 障害に関わる情報の提供によって他者を尊重し理解することを促進 障害者への接し方について職場でコーチングを受ける。 政府機関等によって支援体制を構築する。 <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> Everything is linking, it's like a circle system (これらは全て繋がっていて、サークルシステムのように解決策を達成することができたら、個人も社会の課題も解決することができる・個人および社会の課題を解決することでインクルーシブな社会を実現するための方策が生まれる) 文化と障害者受容の関連性 ⇒ 日本では島国であるが故に、同様の特徴を持った人への受容を高めるとともに、自身とは異なる特徴を持つ人に対する拒否反応が生じやすいという社会的背景があると考えられる。この社会的背景があるからこそ、障害者に対しても、その他大勢とは異なる特徴がある人として異質な存在としてみなしてしまうのではないかと考察できる。一方、障害者への需要を推進したいという意図が身体障害者へのアクセシビリティの向上が進んでいる点では見受けられる。 ⇒ 一方、イタリアではさまざまな文化を受容してきた結果、障害者に対しても寛容な姿勢が見受けられる。これゆえに、特に知的・精神障害者への制度や施策が日本より進んでいると見受けられる。 		

ディスカッション成果発表スライド

INDEX 2025 Final Presentation

SEP 2025
Theme: Persons with Disabilities

Members:
Giulia SPASARI, Anna COMFORTI, Beatrice TASSONE, Gianrico SIGNORINI, Gianrico LO PRESTI GIUNTA, Giulia ACAMPORA, Martina RITAQUATA, Daniela LAMU
Yoko YUKA, BEETH, Harumi, CHIARA, OTTAVIO, Kiyoko, SUZUKI, Hideo, SUZUKI Hiro, NISANO Asako, FUJIKAWA, Kataro.

INTRODUCTION

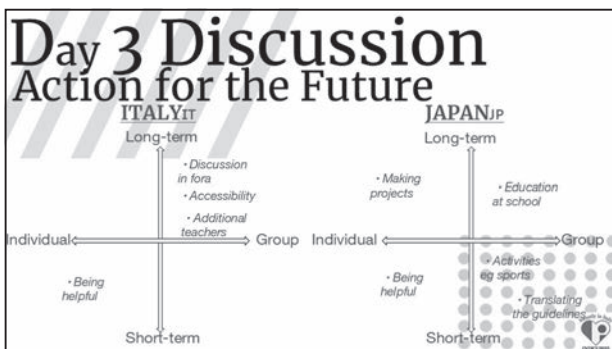
- A. Opportunities and Possibilities
- B. Inform and Sensibilize to Include
- C. Inclusive Education

Day 1 Discussion Inclusion and Inclusive Society

What are your ideas and outcome of the discussion?

Day 2 Tour to Maihama Corp

1. How did you find Maihama Corporation tour?
2. How did you find Tokyo Disneyland Cast Staff?



テーマⅡ：高齢社会分野

本テーマでは、高齢社会に関連する日本と各交流国の施策の特徴や好事例を学び、ディスカッションを通じた比較検討によって相互理解を深めた上で、将来における共生社会の実現に向けて参加青年達にできることは何かを考えた。

テーマ別視察

社会福祉法人江東園

社会福祉法人シルヴァーウィング

ファシリテーター

源 飛輝(株式会社ユーザベース所属)

ディスカッション全体概要

月日	令和7年9月24日～26日
場所	都市センターホテル会議室
テーマ	高齢者の孤立・孤独対策
参加者	日本青年8名、ドイツ青年8名
スケジュール	9月24日(水) 15:30～16:00 アイスブレイキング 16:00～17:00 グループディスカッション 9月25日(木) 15:30～16:00 アイスブレイキング 16:30～17:50 グループディスカッション 17:50～18:00 各グループからの中間発表 9月26日(金) 09:00～12:00 ディスカッション、発表準備 12:00～13:30 昼食 13:30～14:00 成果発表会準備 14:00～14:30 全体での発表練習 14:30～15:00 発表準備・発表練習 15:15～16:30 成果発表会・評価会

ディスカッショングループ別成果

グループ1 概要		
グループテーマ	住み慣れた場所で年を重ねる (Ageing in Place)	
参加者	日本青年 2名 関根弘暉 西尾七海	ドイツ青年 3名 Carolin QUAAS Adrian STÖTZEL Leonie SCHNACK
グループ1 成果		
<p>古くから住み慣れた地域で年を重ねながら暮らすことは、多くの高齢者が望む理想的な歳の取り方である。日本では、60歳以上の約9割が介護を必要とせず自立した生活を送っており、地域における高齢者の活躍は今後ますます重要な意味を持つと考えられる。一方、ドイツでは高齢者に限らず、多くの人々が地域でのボランティア活動や社会参加に積極的であり、そうした取り組みから形成されるコミュニティが重要な役割を果たしている。</p> <p>日本とドイツはいずれも世界的に見て高齢化先進国であり、高齢社会に関連する課題を数多く抱えている。私たちのグループでは“アクセシビリティ”、“健康”など細かく項目分けし、「地域で暮らす高齢者にとっての理想的状态とは何か」「その理想を妨げる要因は何か」「課題を解決し理想に近づけるために何ができるか」という三つの視点から両国に共通する課題とその解決策について議論を深めた。</p> <p>地域で暮らす高齢者にとっての理想状態とは？ (一部抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(アクセシビリティ)サービスやイベントに関する情報を入手でき、地域コミュニティに参加できる。 ・(自己決定)介護が必要になっても、自分の趣味や友人関係を維持できる。 ・(精神的健康)生きる意欲・モチベーションを保てる。 ・(持続可能性と資金)ボランティア活動に十分な財政支援があり、社会福祉団体や自治体が安定した資金基盤を持っている。 ・(アクティブエイジング)高齢者が地域社会の「積極的な参加者」となる。 ・(人間関係とコミュニティ)世代間交流が機能し、相互理解と学びを促進している。 ・(孤独への対処)一人ではあっても孤立していない状態。 <p>⇒理想状態:心身共に健康で、地域活動に参加し介護が必要になってもQOLを損なわない。 その結果、誰もが孤独にならず、誰もが社会に役割をもち参加できる」状態ではないか？</p> <p>日本とドイツに共通する理想状態を阻む課題は？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(アクセシビリティ)交通インフラの整備や情報拡散方法が十分でない。 ・(持続可能性と資金)高齢化社会問題にかけられる資金の不足。 ・(人間関係とコミュニティ)都市におけるコミュニティの欠如による孤独や孤独死、地域での高齢者の積極的な役割の欠如、退職などのライフイベントに伴う人生の目的喪失、そして世代間交流の不足が課題となっている。 ・(健康)精神的疾患や認知症に対する偏見。 <p>課題を解決し理想状態に近づけるにはどんなことができるか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(アクセシビリティ)地域内の移動を支えるシャトルバスやAI・自動運転技術の導入により、誰もが移動しやすい環境を整える。 ・(アクセシビリティ)デジタル教育を推進し、グループや地域内での情報共有を活発化させる。 ・(持続可能性と資金)国・自治体・地域団体・企業・社会的企業連携で持続可能な資金循環を実現。 ・(人間関係とコミュニティ)多世代が交流し、企業や地域が協働することで、年齢や立場を超えた包摂的な地域社会をつくる。 ・(健康)メンタルヘルス教育やボランティア活動、ロボット技術の活用を通じて、高齢者の心身の健康を支える。 		

グループ2 概要		
グループテーマ	施設ケアと人生の最終段階の医療(Residential Care and End-of-life Care)	
参加者	日本青年 3名 青木菜保 下川和也 松久凌大	ドイツ青年 3名 Nicole Eva ZÜNDORF-HINTE Marina SCHMIDT Johanna Maria SCHNITZLER

グループ2 成果

日独両国において、高齢社会に関係する諸課題は山積している。私たちはその中でも、少子高齢化による人口構造の変化が基盤となって、それら課題の根となっていると考えた。このため、初めにこうした人口構造から生まれる問題を法的・制度的なものとの社会的なもの、という二つの軸に分けて考えることとした。その上で、それぞれの軸に沿った解決策の提案と国際連携のあり方について、施設におけるケアに焦点を当てて、両国において学んだことをもとに話し合った。

解決策については、法・制度面においてケアワーカーを強化していく、社会面において高齢者施設の地域への開放という枠で提案がなされた。いずれにおいても、すべての人が「生きがい」を持って生きるために、多様な支援を提供する上でつながりを持つことと技術革新を積極的に取り入れることが強調された。

① 高齢社会の課題

図1に示す。両国の現状の課題は多少の差異はあるが根本は共通であり、優先度順にまとめた。

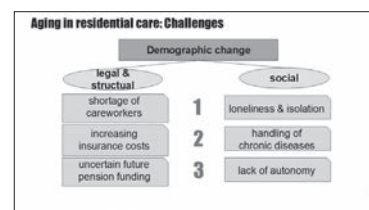


図1

② 両国で学んだ課題への対応策

ドイツでは、移民労働者がケアワーカーの大きな割合を占めている。行政はそうした人々のキャリアアップを教育機関や民間団体と連携しながら促進し、専門技術を持った人材の育成に積極的に取り組んでいる。また、数年かけて介護職種の給料の抜本的な底上げも実施した。こうした背景を受け、介護職のイメージの向上も進めてきた。

日本では、幅広いICT技術や動物介在療法も含めた利活用で、介護者の負担の軽減やサービス利用者の孤独感の軽減、生きがいの創出などに取り組んでいた。また、両国において見られたのが、施設の地域への開放を通して、多様な人々の集いの場として機能していたことだ。この点では、日本では未だ特異な存在であるが、ドイツでは、施設や団体の性質に応じて地域との接点の持ち方やテーマの焦点化の仕方が異なり、参加者全員でその可能性を確認した。その結論として、施設を地域に開くことが「老いること」のイメージを刷新し、世代を超えた対話の場の創出、世代を超えて楽しみを共有できるコミュニティを創っていく事ができるのだ、ということが理解された。

③ これからの解決策

両国において際立つ解決策の目線は異なった。ドイツでは人財面・人々のつながりに関して先進的な取り組みが際立った半面、日本は技術大国であり、深刻な課題となっている介護者の負担軽減において特に取り組みが進んでいる印象であった。こうした両国の取り組みには、お互いに補完し合うところが多分にあり、二律背反に弾きあうものではなく、むしろお互い掛け合わせて発展をみることができそうなものであった。

そのため、こうした国際交流の機会が肝要であり、あくまで今回の機会はきっかけ作りであったことから、それぞれ専門領域で活躍しつつ、繋がり続けて行くことを誓い合った。

「生きがい」をもってすべての人が幸せに暮らしていけるように、自身らの「生きがい」の充実感も高めつつ、密な関係を保っていきたい。

グループ3 概要		
グループテーマ	地域・社会による支援	
参加者	日本青年 3名 小牧裕美子 杉浦悠花 水谷琴音	ドイツ青年 2名 Ben Tim TWARROSCHK Natalie CHIRCHIETTI
グループ3 成果		
<p>①現状・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本もドイツも介護保険制度があるが、財政面での課題がある。 ドイツでは、現物給付・現金給付のいずれかもしくは両方を、介護度に応じて受けられる。 ドイツでは、介護保険の申請を自分で行う必要がある。情報のギャップが生じており、近年のデジタル化についていくことができない人もいる。 日本ではケアマネジャーが相談対応とサービスのコーディネートを行っているが、ケアマネジャーの業務過多や、ケアマネジャーの不足が課題となっている。 日本もドイツも共通して、家族が離れて暮らすことが増加し、高齢者の社会的孤立が課題となっている。 老老介護や、子育てと親の介護の「ダブルケア」も両国で増加している。 <p>②今後必要な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> 目指すゴールは、「どの年齢の人も社会の一員として生活することができ、全ての人が人生を楽しみ、社会や家族から支えられていると感じられる」と整理した。 その上で、財政的な課題や人口動態、生活スタイルの変化といった状態は容易には変えられず、今後も続いていく問題と考えたことから、それ以外のアプローチを検討した。 公的制度、コミュニティ、家族がコラボレーションして、支えることが必要である。 そのために、知識・ネットワーク・マインドセットという三つの観点でのアプローチが考えられる。 まず、知識という観点では、介護サービスや社会的活動、予防などに関する情報のギャップを解消していくことが必要である。介護が必要になる前に情報に触れる機会を作ることが有効である。 次に、ネットワークという観点では、地域の団体同士のつながり、コミュニティと個人のつながりを強化していくことが必要である。家族や地域の人、地域の活動団体が気軽に集まれる場所を作り、資源を各ステークホルダーに共有し、協働の機会を増やしていくことが考えられる。 最後に、マインドセットという観点では、信頼とリスペクトを築くこと、年を重ねることを人生の自然な段階だと受け入れる考え方を広めること、包摂と連帯に関する前向きな姿勢を増やしていくことが必要である。 <p>③議論から学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 両国とも共通の課題を有している。 それらに対してすでに有効な対策が打たれていることも多い。 他国の事例から生かすべき点を学び、取り入れることができる。 制度や地域、家族など多様な主体の協働が、高齢社会における共生において重要である。 協働していく上で、高齢化に対して、老化に対してのイメージを払拭していく必要がある。 以上を踏まえて、包摂と連帯を進めることで、以下の目標を達成することができる。 すべての年齢の人々、支援を必要とする人々も、支援を提供する人々も、生きがい、人生の目的を感じられることが皆に共通する目標である。 		

ディスカッション成果発表スライド

INTERNATIONAL YOUTH DEVELOPMENT EXCHANGE PROGRAM (INDEX)2025



Presentation of Discussion Results

theme : Aging Society

26/9/2025

Overview


We held discussions in the following three small groups:

1. Aging in Place
2. Residential Care and End-of-life Care
3. Support from Society and Community

1. Aging in Place

SEKINE Koki, NISHIO Nanami
Carolín QUAAS, Adrian STÖTZEL, Leonie SCHNACK

1. Desired State



Our desired state involves older people being healthy physically and mentally.

They are involved in the community and don't lose any quality of life if they're in need of care.

As a result of that no one is lonely and everyone can participate socially.

2. Current State

Accessibility

- Infrastructure
- Information

Community

- Lack of community in city
- No active role in community
- Losing purpose with retirement
- Stereotypes
- Lack of intergenerational exchange
- Living alone / lonely deaths

Funding

- Not enough funding

Health

- Not enough caretaker & time
- Mental health stigma



3. Potential Approaches

Accessibility



- Infrastructure/Transportation
 - Shuttle Bus system
 - Technologies like AI/Self-driving
- Information
 - Digital education
 - Group information dissemination

Funding

- National & local gov. funds
- Networking local groups & companies
- Community funding (revolving funds, social enterprises)

3. Potential Approaches

Community

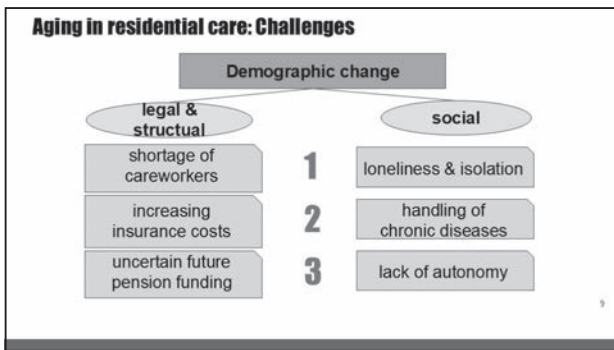
- Alternative Housing Projects
- Intergenerational institutions
- Education: stereotypes & ageism
- Collaborative projects between communities and companies
- Consultation about retirement activities

Health

- Education: mental health
- Volunteers for helping older people
- Increase the use of robots

2. Residential Care and End-of-life Care

AOKI Naho, SHIMOKAWA Kazuya, MATSUHISA Ryota
Nicole Eva ZÜNDORF-HINTE, Marina SCHMIDT,
Johanna Maria SCHNITZLER



Pathways to solutions

Empowering Caregivers

- invest in education and training (OSH)
- enhance the image of careworkers
- improve payment
- technical solutions
- skilled workers with migration background

Healthy aging in care facilities

- creating open spaces for everyone
- intergenerational projects
 - improve the image of aging
 - intergenerational dialogue

Inspirations to take home

- Diverse ways of support
 - connections
 - innovations
- Ikigai*

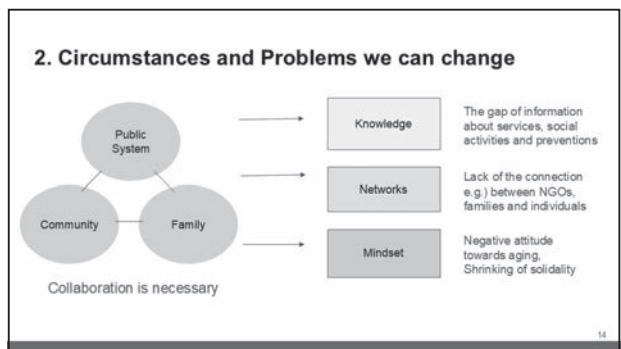
3. Support from Community and Society

KOMAKI Yumiko, SUGIURA Haruka, MIZUTANI Kotone
Ben Tim TWARROSKCH, Natalie CHIRCHIETTI

1.Desired State & Current circumstances

People in every age can be a member of society
Everyone can enjoy life and feel supported by family and society

Demographic Changes	Financial Problems	Change of Lifestyle
<ul style="list-style-type: none"> Increase in the elderly population Longer life expectancy Increase in people living alone 	<ul style="list-style-type: none"> Finance from the insurance is not enough Tax and social insurance burden 	<ul style="list-style-type: none"> Trend towards nuclear families Increase in dual-income households Lack of time for caregiving or volunteering



3.Solutions

Knowledge	<ul style="list-style-type: none"> Provide training opportunities and skill development Promote knowledge sharing and accessible information
Networks	<ul style="list-style-type: none"> Create spaces for families, communities, and organizations to connect, share resources across stakeholders (ex) NGOs, community Foster collaboration and mutual support
Mindset	<ul style="list-style-type: none"> Focus on building trust and mutual respect Encourage acceptance of aging as a natural stage of life Promote positive attitudes toward inclusion and solidarity

Our goal is that...
Everyone — people of all ages, supporters, and those in need of care — can feel *Ikigai* (a sense of purpose in life).

Thank you!

テーマⅢ：バリアフリー・ユニバーサルデザイン分野

本テーマでは、バリアフリー・ユニバーサルデザインに関連する日本と各交流国の施策の特徴や好事例を学び、ディスカッションを通じた比較検討によって相互理解を深めた上で、将来における共生社会の実現に向けて参加青年達にできることは何かを考えた。

テーマ別視察

東京都庁
都営地下鉄
国立競技場
東京体育館
都営バス

ファシリテーター

岩崎 裕美(合同会社B2B代表社員)

ディスカッション全体概要

月日	令和7年9月24日～26日
場所	都市センターホテル会議室
テーマ	Accessibility、Universal Designを再定義する
参加者	日本青年8名、フランス青年8名
スケジュール	9月24日(水) 12:00～12:20 アイスブレイキング 15:00～16:20 グループディスカッション 16:20～16:50 各グループのディスカッション内容を共有 16:50～17:00 グループディスカッション 9月25日(木) 16:30～17:35 グループディスカッション 17:35～18:00 各グループのディスカッション内容を共有 9月26日(金) 09:00～10:40 グループディスカッション 10:40～11:05 各グループのディスカッション内容を共有 11:05～11:35 グループディスカッション 11:35～12:00 成果発表会準備 12:00～13:30 昼食 13:30～15:00 成果発表会準備 14:30～15:00 発表準備・発表練習 15:15～16:30 成果発表会・評価会

ディスカッショングループ別成果

グループ1 概要		
グループテーマ	障害者にとっての物理的・心理的バリアフリーにおける課題とその解決策	
参加者	日本青年 3名 西脇嵩人 安田悠真 脇山輝衣菜	フランス青年 3名 Fatih Muhammed BOZKURT Clarisse Marie COUREAU Lucie Margot MASSON
グループ1 成果		
<p>①フランスの現状</p> <p>古いメトロの駅ではエレベーターの設置が困難で、車椅子利用者やベビーカーを利用する人にとって十分にアクセシブルな環境が整備されていない。一方で、トラムはホームと車体との隙間がなく、高さもフラットであることや、バスは扉付近の車椅子マークのボタンを押すと自動でスロープが出てくる仕組みになっており、車椅子利用者やベビーカーを利用する人の自立した移動を可能にしている。</p> <p>先進的な取り組み例として、多様なニーズを持った人が利用可能なトイレも一般のトイレと同様に男性用、女性用、すべての人用に分かれている。また、パリ市内に設定された拡張アクセシビリティ地区では交通機関や施設など公共の場での途切れのないアクセシビリティの整備が進んでいる。視覚に障害のある人に対する音声ガイダンスや聴覚に障害のある人に対するコミュニケーションサポート、車椅子を利用する人などに対する段差の解消、感覚過敏のある人が休める場所の設置など。</p> <p>②日本の現状</p> <p>公共交通機関やスポーツ・文化関連施設等の公共の場の物理的なバリアフリー化が進む一方で、多様な障害や病気、ニーズや背景を持つ人々に対する認知や理解、またそれらに基づき実際に行動を起こすことまでを含む心のバリアフリーに課題がある。</p> <p>③上記現状から学んだこと、気がついたこと</p> <p>歴史的建造物など古い建物のバリアフリー化の限界など、フランス、日本間で共通する課題が多くあった。可能な限り物理的なバリアの解消を進める一方で、それだけでは解決しない部分については、それぞれのケースごとに人的サポートやテクノロジーによる代替方法が検討されていた。</p> <p>両国ともにオリンピック・パラリンピックを契機として、新規の建築物に対するバリアフリー、アクセシビリティ強化が強化され、個々の建物や公共交通機関だけでなく、あらゆる場所を繋ぐ途切れのないバリアフリー、アクセシビリティの達成に向けて、現在も取り組みが続いている。</p>		

グループ2 概要		
グループテーマ	高齢者にとっての物理的・心理的バリアフリーにおける課題とその解決策	
参加者	日本青年 3名 鈴木類 渡邊正太郎 平賀美咲	フランス青年 3名 Sophie Julie Magalie CURE Suzelle HAMMAN Paul René GAUTIER
グループ2 成果		
<p>①フランスの現状</p> <p>フランスはユニバーサルデザイン・バリアフリーの文脈において、交通インフラやテクノロジー等のハード面が整っていない一方で、人の思いやりや法律等のソフト面が日本に比べて発達している状況がある。</p> <p>フランスには歴史的建造物や古い建造物が多く、スロープやエレベーターを設置することがなかなか難しく、その整備が未対応で高齢者にとって歩行や移動が困難。また地下鉄などは本数が少なかったり、自動ドアが時間制限で閉まってしまったりするなど、高齢者にとって利用ハードルが高い状況。</p> <p>②日本の現状</p> <p>老人ホーム等で増える高齢者に比べ、職員や介護士の人手不足である。それが原因で入居者(高齢者)の方の孤独や認知症、介護士による虐待などの問題が発生している。</p> <p>また、高齢者(特に老人ホームの入居者)の社会参画が限定的で社会やコミュニティとの関わりが薄い。これを阻む問題としては二点あり、老化による肉体的な制限とデジタルアクセシビリティの未整備による情報へのアクセスが限られているという状況がある。</p> <p>それらの解決への取り組みとして、卓球バレーというスポーツを通じた運動能力維持に加えて、他の人との社会的な繋がりを増やすという例があった。またLivevoice等の会話AI(複雑の操作を必要とせず会話を通して検索や必要な情報を得られる。)などの高齢者にもわかりやすいインターフェースによるデジタルアクセシビリティ向上などの解決策があげられる。</p> <p>③上記現状から学んだこと、気がついたこと</p> <p>フランスの現状は、人の思いやりや法律(ソフト面)だけでは、歴史的建造物などの「ハード面」の物理的な障壁は乗り越えられないことを示している。真のバリアフリーは、意識とインフラ整備の高度な両立が必須である。一方、日本の人手不足と高齢者の孤独の問題は、いくらデジタル技術(ハード)が進歩しても、「人による繋がり」という「ソフト」が欠ければ解決しないことを証明している。</p> <p>解決策として、日本で実践される卓球バレーは運動能力維持と社会的交流を同時に実現する。また会話AIは、高齢者にとって最も自然なインターフェースで情報へのアクセス制限を解消する。これらは、肉体的・情動的な二重の壁を打ち破る鍵となる。テクノロジーは人の代替ではなく、希薄になりがちな「繋がり」を補完するツールとして機能しなければならない。</p>		

グループ3 概要		
グループテーマ	妊婦・子連れの親などにとっての物理的・心理的バリアフリーにおける課題とその解決策	
参加者	日本青年 2名 川瀬崇裕 神戸愛心	フランス青年 2名 Eva Pauline Gabrielle HARDY Lucile Cathy HURET
グループ3 成果		
<p>①フランスの現状</p> <p>社会の中で、読み書きに困難を抱える人、視覚や知的障害のある人、小さな子ども、文化や言語に馴染みのない外国人など、多様な人々が日常の情報や環境にアクセスしづらい状況が見られる。これらの人々は「理解されにくい」「置き去りにされやすい」という、日本と共通する課題を抱えている。</p> <p>ハード面では依然として課題が大きい。古いメトロ駅では構造上エレベーター設置が難しく移動が制約され、建物や公共施設もインフラ整備が遅れている傾向にある。一方ソフト面では、行政や地域の支援者が「誰もが参加できる社会」を根付かせようと努力している。パラリンピックを契機に、会議やレポート、進捗管理を通じて、単なる整備にとどまらず「アクセシビリティを社会の文化にする」試みが進んでいる。このようにフランスは、ハードの遅れを抱えながらも、ソフト面で文化づくりへの意識が強く表れている。</p> <p>②日本の現状</p> <p>日本でも、読み書きに困難を抱える人や障害のある人、外国人や子どもなどが、日常の情報や環境にアクセスしにくい状況は依然として存在している。</p> <p>ハード面では、駅や公共施設におけるバリアフリー化が進みつつあるものの、地方や古い建物ではエレベーターや多言語表示が不足している。また、デジタル化が加速する一方で、高齢者やICTに不慣れな人が取り残されやすい課題も見られる。ソフト面では、法律や制度の整備が進み、企業や自治体もユニバーサルデザインや多様性を意識した取り組みを進めているが、現場レベルでは「形式的対応」にとどまる例も少なくない。意識や文化として十分に根づくには、まだ課題が多い。</p> <p>③上記現状から学んだこと、気がついたこと</p> <p>日本とフランスの双方で、多様な人々が情報や環境にアクセスしづらく、「理解されにくい」「置き去りにされやすい」という共通の課題があることに気づいた。</p> <p>インフラ整備には限界があり、歴史的建造物や既存施設の改修には時間とコストがかかるため、ハード面だけでは解決できないと学んだ。一方で、フランスではオリンピック・パラリンピックを契機にアクセシビリティを文化として根付かせる取り組みが進み、日本でも五輪を背景に制度や法律に基づく対応が広がっている。</p> <p>両国の比較から、制度整備と文化づくりを両輪として進める必要があると分かった。今後は、物理的整備や法令遵守にとどまらず、社会全体の意識を変え、「誰もが参加できる文化」を根付かせることが重要だと考える。</p>		

Our common goals:

Redefining Accessibility & Universal Design

Three segments of focus

Three perspectives

Disability Physical, intellectual or cognitive, Mental	Elderly Age-related changes	Others Difficult to access information because of language, literacy, cultural gaps
---	---------------------------------------	---

Challenges and solutions

Disability

- **Barriers:** Consistency - physical aspect
- **Solutions:** Remove obstacles, Expand enough accessibilities, alternative options to everywhere
- **Examples:** Route guidance, color contrast, signs and information



Route guidance, color contrast, signs and information

Elderly

- **Barriers:** Being part of society - Getting help with your need
- **Solutions:** Fighting isolation, digital barriers, lack of social role, Physical and mental preferences and fragility
- **Examples:** Play and sport in bonding and inclusion - Live voice, interfaces that are natural - Getting other help, the need of education



Play and sport in bonding and inclusion

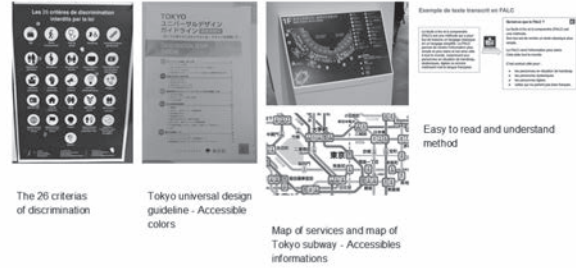
Live voice, interfaces that are natural

Getting other help, need of education and visibility

Others

- **Barriers:** inaccessible information, physical obstacles, social challenges, financial cost, open mindedness to others, time of development, complexity of everyone's needs
- **Solutions:** Tangible (to avoid digital barrier), Low cost (free for the users and affordable for the provider), Flexible (to allow evolution if needed)

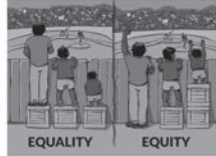
• Examples:



Main common challenge : Education & Visualisation

- **Awareness & Compassion**
open-minded society
- **Gathering not Separate**
Example of Takkyu volley
- **Co-creation**
inclusive multisensory experience
- **Nammed and representation**
visual support

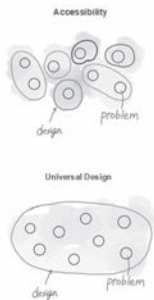
Equity rather than Equality



Redefinition

Redefining the Terms

Fairness
Opportunity
Respect and empathy
Inclusion and togetherness
Continuity
Balance between multiple people needs



Significance and outlook

What we have learned from the discussions

Accessibility/Universal Design:

- Mutual challenges but unique approaches in each country
- Acquired new perspectives by exchanging ideas from different perspectives
- Learned from each other and create more ideal solutions
- All these design improvements can benefit for the whole society

Future collaboration opportunities

- Balance between technology and historical
- Analyze and learn from ideas that could be improved
- Import and adapt good ideas

第7章

事業の成果

- 団長報告
- 事業アンケート
- 事業の総括評価



イタリアに至り、愛を以て

テーマ I：障害者分野 イタリア派遣団団長 南 由美子

1. はじめに

令和7年度国際社会青年育成事業(INDEX)は、「共生社会の実現」を総括テーマに掲げ、三つの派遣団が編成された。そのうち、イタリア派遣団はテーマ I「障害者分野」を担い、障害がある者やその家族、医療関係者、学生など、多様な背景を持つ青年たちによって構成された。

本団の目的は、それぞれの立場から「共に生きる社会」のあり方を見つめ直し、その学びを日本社会に還元することである。活動内容は国際交流や日本文化紹介など多岐にわたるが、本報告では「障害者分野」に焦点を当てる。

団目標「イタリアに至り、愛を以て」。詩的かつ情緒的なこの言葉には、主語も述語も存在しない。これは、青年が自らの経験や価値観に基づいて自由に意味づけできるように意図されたものであり、成果を「結果」ではなく「過程」として捉える姿勢を共有するための表現である。青年たちからは、「帰国後の活かし方は一様でなくてよい」という認識が示された。

今回の派遣先としてイタリアが選定された背景には、国際的な意義が認められる。イタリアは、国連「障害者の権利に関する条約(CRPD)」の提案・推進国の一つであり、G7諸国の中でも障害者政策において先進的な役割を果たしてきた。

2024年10月には、G7イタリアにおいて初めて「包摂と障害」を主題とした担当大臣会合が開催され、「ソルファニャーノ憲章」が採択された。私は市民社会の一員としてこの会合に参加し、パネルディスカッションにて発言の機会を得た。イタリアは、CRPDに基づくインクルーシブ教育と地域社会への包容の両輪を推進し、愛と尊厳を基調としたインクルージョンを社会全体で具体化しようとする姿勢が顕著である。

また、障害担当大臣であるロカテッリ氏との再会は、私にとって大きな励みとなった。大臣は常に障害があ

る者と同じ目線で語りかけ、現場に足を運びながら政策を牽引している。今回の派遣においても、大臣自らが施設視察の調整を行い、派遣団を温かく迎えてくださったことは、交流の意義を一層深めるものであった。

2. 事前研修と自主研修

派遣に先立ち、内閣府および外務省による講義に加え、「イタリアのインクルーシブ教育の概要」に関する専門的な研修が実施された。また、国際社会青年育成に豊富な経験を持つ白木邦貞副団長によるワークショップを通じて、青年一人ひとりが自らの学びの軸を定める機会が提供された。研修を通じて、青年は「美」や文化・芸術への関心を起点に、インクルージョンの実践を将来の日本社会に活かしたいという意欲を共有するに至った。

さらに、派遣前の約二か月間は自主研修期間として位置づけられた。青年は、イタリアのCRPD市民社会報告に記されたコラムを読み解き、日本の現状および国連の総括所見と比較しながら、教育・雇用などの分野を横断的に整理した。加えて、訪問施設の情報を収集し、現地で確認したい事項や質問内容をまとめるなど、主体的な準備が進められた。

3. 派遣活動報告

9月14日から実施されたイタリア派遣は、ローマから北イタリアを巡る10日間の行程であった。内閣府および現地コーディネーターである中川裕子氏をはじめとする関係者の尽力により、視察先での滞在時間を最大限に確保できるよう、直前まで綿密な時間調整が行われた。

視察先は当初の予定より2か所減少したものの、教育・福祉・就労・文化・スポーツなど多領域にわたり、CRPDの主要条項を実地に体感できる充実した内容となった。

① ローマ

初日、首相府への表敬訪問を行った後、サッカークラブを視察した。同クラブはアマチュアリーグに所属し、自閉症者と健常者が混在するチーム編成を特徴としている。

クラブでは、協働性・自己効力感・社会的スキルの獲得を意図的に促すコーチング技法とピア支援の設計がなされており、トレーナー向けや当事者・家族向けにガイドラインが作成されていた。青年からは「このガイドラインを翻訳し、日本でも広めたい」との声があった。

翌日、聴覚障害のある私にとって特に関心の高かったろう学校を訪問した。ここでは、イタリアならではの完全なインクルーシブ教育の土壌があるからこそ実現した「逆インクルーシブ教育」の現場に立ち会うことができた。後ほど詳しく述べたい。夜、在イタリア日本国大使公邸にて表敬訪問と交流を行った。

② クレモナ

18日、午前は障害者および高齢者支援を行っている社会福祉財団を訪問した。障害者棟では、美術館を思わせるほどアートに囲まれた美しい空間が広がっていた。壁一面に飾られた絵画や光の色合いは、利用者の感性に働きかけ、言葉に頼らない支援のあり方を体感することができた。その後、青空の下、農園で働く入所者とともに昼食をとった。ここでは彼らを「障害者」と呼んでいない。

午後には、家族会が運営する通所施設を訪問した。利用者との交流を通じて、支援の中に深く根付いたコミュニケーションの重要性を感じた。イタリアでは、支援の質を高める上で人と人との関係性を重視しており、豊かな対話が尊厳を生み出す環境づくりが随所に見られた。

③ コモ

19日には、コモ湖を見下ろす「COMETA」を訪問した。同施設は、障害のある人のみならず、受刑者、移民・難民、経済的困難を抱える子どもやその家族など、多様な背景を持つ人々を包括的に支援している。教育・職業訓練・家庭支援が一体となった支援の枠組みは、単なる地域移行支援を超え、人権アプローチに基づく人生全体を支える包括的なモデルとして印象深かった。

昼食は、施設が運営するレストランでいただいた。地域社会の中で誇りを持ち、堂々と働く姿が印象的で、接客におけるプロ意識と自己肯定感に満ちたまな

ざしは、今も心に鮮明に残っている。

④ ラヴェンナ

20日は、インクルーシブビーチを視察した。砂浜へのアクセスから更衣、移動、入水までが包括的に設計されており、余暇やレクリエーションの場においても、参加する権利が保障されていることを実感した。誰もが自然の中で自由に過ごせる空間づくりに、インクルーシブの理念が深く根付いている。夕刻にはローマへ戻り、青年はグループに分かれて、福祉に関連する家庭でホームステイを体験した。

⑤ ローマ

21日。この日はホストファミリーとの夕食を通じて、最後の交流を楽しんだ。団の目標である「愛を以て」を体現するような時間であり、イタリアの家庭単位での受け入れを通じて、政策や制度の枠を超えた文化的包摂のあり方を見出すことができた。支援の根底にあるのは、関係性を大切にする姿勢であり、それが日常のコミュニケーションとして自然に現れていることを、肌で感じることができた。

⑥ 学びを深め合うプロセス

すべての視察は、人生観が変わる瞬間の連続であった。移動中のバス車内では、青年同士の対話や振り返り、事後活動の計画が自然に生まれ、施設視察そのものと不可分な学びの環境が形成されていたことは、特筆すべき点である。特に印象的だったのは、各視察先で得た示唆について、マイクが席を渡り歩きながら感想や分析が即時に共有され続けた時間である。青年は、自らの言葉で気づきを語り合い、他者の視点に耳を傾けながら理解を深めていった。そのような対話の積み重ねが、視察の意味を何倍にも広げ、豊かな学びの場を生み出していた。

改めて、派遣に関するすべての調整を丁寧に行い、現地視察先との橋渡しをしてくださった日本およびイタリア双方の関係者の方々、そして長距離移動において安全運転を心がけてくださったドライバーの方に、感謝の意を表したい。

4. インクルーシブ教育と地域社会への包容

ここでは、総括テーマ「共生社会の実現」を成すうえで肝要な二つの軸、インクルーシブ教育では教育面の、地域社会への包容では生活面の接続を中心に記す。

① インクルーシブ教育

ローマのマガロット校は、1923年に公立のろう学校として設立された。現在もろう学校としての機能を維持しつつ、聴児の入学が年々増加している。1クラス15名中、ろう児は最大4名までという構成であり、一般的にみられる「多数派の中に少数派が混ざる」インクルーシブ教育とは逆の現象が生じている。このような形態を「逆インクルーシブ教育」と呼ぶ。

校内では手話が基本言語として用いられており、年度の初めには聴児が手話を学ぶカリキュラムが設けられている。そのため、誰が聴者で誰がろう者であるかを見分けることが難しいほど、自然なコミュニケーションが行われている。この環境は、ろう児にとっては自尊感情を育む場であり、聴児にとっては文化的多様性への理解を深める教育の機会となっている。

また、コモにあるCOMETAでは、ローマのマガロット校と同様に、卒業後も社会の一員として誇りをもって生活し、自らの力を最大限発揮できるよう、教育と雇用の接続を意識した実践的なプログラムが充実していた。校舎は船を模したデザインで、その空間の中でインクルーシブな就労への道筋を導いている。一方で、こうした先進的な取り組みの背景には、教員不足や財政面など共通する課題も垣間見えた。

② 地域社会への包容

クレモナの家族会では、サッカークラブのトレーナー向けガイドラインのように、独自のプログラムを開発し、新たな地域文化の創出に挑戦する姿が見られた。ここでは、家庭が「地域共生の核」として尊重されており、孤立の予防や社会参加の促進に加え、恋愛や家族形成といった人生の多様な側面までもが支援の対象となっていた。

象徴的な事例として、現地で紹介された二組のカップルのエピソードが挙げられる。子どもを持つかどうか、今後の暮らしをどのように構成するかといった重要な意思決定に対し、支援者は「決定を与える」のではなく、時間をかけて丁寧に対話を重ね、本人の意思を尊重する姿勢を貫いていた。その関わりには、深い愛情と信頼が感じられた。カップルが地域の友人に囲まれ共に生きる姿は人権アプローチが息づく事例であった。さらに、視察の場では、青年から包括的な性教育のあり方についての質問も出され、関心の高さがうかがえた。

ここまでの視察が表面的な理解にとどまらず、本質に迫るものとなったのは、質の高い通訳の支えがあっ

たからこそである。同行した通訳者・中島元子氏から次のようなメッセージが寄せられた。

「イタリアも日本も自然災害が多い国です。避難所や仮設住宅の視察は行われていますが、障害の視点と結びついた具体的な事例は知る限りありません。考察テーマとして障害問題を含めた被災後も重要課題となるかもしれませんね。『持続可能性』『多様性』という言葉が乱用され、実質を伴わないものにならないように。そして、インクルーシブが同じ道を辿らぬように。(略文)」道中の語りからアドバイスをいただいた。深い敬意と感謝を表したい。

5. 東京プログラム

9月24日から3日間実施された東京プログラムでは、テーマに関する討議のみならず、文化交流も意義ある要素として位置づけられた。とりわけレセプションにて披露された「花笠音頭」は、青年の団結と日本文化の「美」を体現するものであった。青年は、イタリア青年団との別れを惜しみつつ、花笠を贈呈した。

6. 結びにかえて

昨年の旧優生保護法違憲判決を契機に、人権教育、包括的性教育、そしてインクルーシブ教育の在り方が、改めて社会全体に問われている。さらに、2022年に示された障害者権利条約(CRPD)の総括所見では、多くの懸念事項とともに、第19条「自立した生活および地域社会への包容」、第24条「教育」について、特に強い改善要請がなされた。フォローアップにおいても、これらの条項は明確に取り上げられており、障害者政策の転換点にあることは明白である。

このような時代の節目において、青年たちが本研修で得た経験を、どのように事後の活動へとつなげていくのか。その歩みを見守り、共に進んでいくことこそが、次なる世代への責任であると感じている。

最後に、深い感謝の意を込めて本報告を締めくくりたい。本研修を通じて築かれた知見と連携は、真のインクルージョン、すなわち「共生社会の実現」に向けた揺るぎない基盤である。今後もこのINDEXが継続され、さらなる発展を遂げることを強く願うとともに、共に歩んだ青年たち、そして支えてくださったすべての関係者の皆様に、心より深く感謝を申し上げる。

イタリアに至り、愛を以て。色あせることのない物語を胸に。

日本とドイツから考える高齢化に対する取り組みと人的資源の活用

テーマⅡ：高齢社会分野 ドイツ派遣団団長 芳賀 和恵

1. ドイツの概要とテーマ「高齢化」

令和7年度国際社会青年育成事業の派遣国の一であるドイツ連邦共和国は、日本に似ている国であるといわれることが多い。ドイツと日本は同程度の面積を持ち(日本:約378,000km²、ドイツ:357,000km²)、経済の規模を表す指標の一つであるGDP(一国当たり、名目)も世界3位(ドイツ)と4位(日本)である。同じような面積を持つ国は、国内の意思決定、例えば政策立案や実施に類似の条件を備えていることが多い。このように似ている国同士の比較は意義がある。

本事業のドイツ派遣団のテーマは「高齢社会(Ageing Society)」である。日本人が日本とドイツの類似点・共通点としてまず思い浮かべるのは、「第二次世界大戦後のめざましい経済復興」、「大きな自動車産業」、「勤勉な国民性」であり、高齢化・高齢社会に関する共通項はすぐに想起されるものとはいえない。しかし、日本とドイツは高齢化率(総人口における65歳以上の割合)がともに高い。ドイツの高齢化率は2024年に23%であり(Statistisches Bundesamt, n.d.)、ヨーロッパ諸国の中で高齢化が進んでいる。また、日本とドイツは両国とも、高齢化が急速に進展している。高齢者が人口の7%に達した社会を「高齢化社会」、14%に達した社会を「高齢社会」と呼ぶが、日本は高齢化率が7%から14%になるまでに21年を要した(内閣府, 2025:9)。フランスが127年かかったのに比べて、非常に短い期間である。日本ほどではないが、ドイツも急速に高齢化が進んだ国であり、高齢化率が7%から14%になるまでに40年しか要していない(内閣府, 2025:9)。高齢化が急速に進む社会は、準備する時間を十分に与えられずに、高齢化に伴う社会の変化に対応をしなければならない。これは社会にとって大きな挑戦である。

2. ドイツ派遣団プログラム

国際社会青年育成事業のプログラム構成は全3団共通である。派遣国でのプログラムの前の7月に事前研修、9月に出発前研修、派遣国でのプログラム、東京プログラム、帰国後研修を実施した。

事前研修では、次の3つの内容を行った。1.ドイツ団のチームビルディング、2.日本の高齢化と高齢社会の諸相、ドイツ連邦共和国の概要のレクチャー、3.東京プログラムのディスカッションと日本紹介プログラムの準備である。様々なバックグラウンドを持つ8名の参加青年が本事業で豊かな学びを得るためには、各人のそれぞれ異なる知識や経験がお互いに補完的に共有されることが有効である。そのように密度の濃い有機的なコミュニケーションの基盤形成の時間が事前研修でとられたことは有意義であった。

日本の高齢化の状況および課題と対策の取り組みのレクチャーで得た知見も踏まえて、東京プログラムでのディスカッションのテーマと構成について話し合いを行った。ドイツ人参加者との有意義なディスカッションのために工夫を考えた。ドイツ派遣までの期間に個人、また、団全体で何をどのように準備学習するのが明確になり、有意義な対面型研修であった。

3. ドイツでの視察

派遣先であるドイツでの視察からは、多くの知見が得られた。以下のまとめかた以外にも、専門や興味・関心やこれまでの経験によって、さまざまなまとめかたが可能である。参加青年たちはそれぞれの視点から、ドイツでの視察内容を整理し、自身の固有の知としていくはずである。

3.1 高齢者・高齢社会問題を包括的にとりまとめる組織とそのネットワーク

ドイツでの第一番目の訪問先として9月15日に訪問したドイツ高齢市民組織全国協議会(BAGSO)は、ドイツの高齢者の声やニーズを社会に反映させる役割を担う非営利団体である。BAGSOには120の団体が加盟している。教会関係の団体やスポーツ関係の団体を含む多彩な団体がBAGSOに加盟している。その結果、さまざまな高齢者の声を集めることができ、高齢者に関わる諸相に対する取り組みを多用かつ包括的に行っている。

ドイツでの視察先はBAGSOによってコーディネートされたのであるが、視察先の幅広さにBAGSOが持つ

社会の様々な領域・階層との接点が見て取れる。

- 中央省庁： ドイツ連邦教育・家庭・高齢者・女性・青少年省（9月15日に訪問）
- 地方自治体関連： ブリュール市役所（9月17日に訪問）、トロイスドルフ市多世代ハウス「国際ハウス」（9月19日に訪問）
- 地域自助活動： ロレスブロイヒ村の商店DORO（9月18日に訪問）
- 非営利団体： フランクフルト高齢者・障がい者支援協会（9月16日に訪問）、「サイクリング・ウィズアウト・エイジ」ドイツ調整事務局（9月17日に訪問）

視察先はBAGSOに加盟しているか、あるいはBAGSOとのネットワークがあり、BAGSOはこれらの組織、団体と積極的に関係性を持っているという印象を受けた。

さらに、日本青年派遣団のドイツでのホームステイと、ドイツ招へい青年団は、ドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関(IJAB)によってコーディネートされたが、コーディネートにあたってBAGSOとIJABは密接に連携していた。顔の見える形での具体的な連携は効果がある。このような具体的で活発な活動が、BAGSOの強みであると考えられる。加盟団体や連携する団体との関わり方が、日本の類似の高齢者組織を統括する団体では異なる点があると思われる。

3.2 高齢者を含む市民の共同決定と参加

ドイツでの視察で印象的だったのは、多くの視察先で「市民参加」と「共同決定」が実践例を伴って具体的に語られたことである。9月17日に訪れたブリュール市役所では、高齢者市民の政策作成への関与が説明され、9月18日に視察したロレスブロイヒ村の商店DOROの運営の中心的メンバーには、企業の定年退職の活動として参加しているメンバーがいた。

「高齢社会先進国」である日本の高齢社会対策は、他国と比べて優れた点も多い。例えば、地域包括支援センターのサービスは各市町村で充実・成熟しており、柔軟なサービス利用が実現している。しかし、高齢者政策の作成や各種のサービス提供にあたって、日本では高齢者やその他の世代の市民参加は、それほど深いものではない。サービス需要者としての高齢者の意見を聞く仕組みはあり、日本でもリビング・ラボなどの取り組みが広まっている。しかし、日本では、高齢者が最終的な生成物に対する責任や組織の運営に責任を負うケースは少ない印象である。

ドイツで市民参加が成熟した形で活発に実践されている要因として、様々な社会的な要因が考えられるが、歴史的な要因としては「補完性の原理」、「共同決定制度」、「組合組織」が考えられる。

「補完性の原理」(ドイツ語: Subsidiaritätsprinzip)は、社会の課題は可能な限り課題に直面する個人もしくは当事者の近くにある社会的な階層によって課題解決がなされるべきであるという考え方である。「補完性の原理」は、個人の尊厳と権利を尊重するキリスト教の思想を反映しており、ドイツに限らずヨーロッパ諸国で受け入れられている。また、欧州連合(EU)における連合と加盟国の関係性を規定する原則となっている。

「共同決定制度」(ドイツ語: Mitbestimmung)においては、組織運営の決定に、様々な立場のステークホルダーが対等の立場で関わる。一般に「共同決定制度」は、企業の意思決定に従業員代表も参加するドイツの特徴的な経営手法として知られている。しかし、「共同決定制度」は企業以外の組織でも見られ、大学でも大学の自治運営に大学各領域のステークホルダーが関わる。学生代表も対等の立場で参画する。

ドイツでは伝統的に「組合組織」(ドイツ語: Genossenschaft)が盛んである。協同組合の特徴は、ボトムアップで民主的な運営にある。組合員が各人一票の投票権を持つ。ドイツの「共同組合の父」と呼ばれるフリードリヒ・ヴィルヘルム・ライプアイゼンが唱えたモットー「一人はみんなのために。みんなは一人のために」が、組合組織の性格を表している。

ドイツの今日の「市民参加」と「共同決定」が、上記の歴史的な積み重ねの結果であると考えられるならば、同じような経路依存性を持たない社会が短期間で模倣することは難しいと思われる。

3.3 地理的条件

高齢化の課題は、地方の中山間地域で深刻であるイメージが持たれてきた。しかし、日本でも都市部での高齢化が進み、空き家問題のような地域社会の課題が都市部でも顕在化している。ブリュール市役所とロレスブロイヒ村の商店DOROの視察からは、高齢化による課題への示唆に富む視座が得られた。

ブリュール市は、ケルンおよびボンの近くに位置する。都市部に位置する市である。人口は約46,000人であり、2024年時点で、25歳から54歳の人口が37.8%と最も多い。また、同年の高齢化率は23.1%である。

しかし、ブリュール市では高齢化が急速に進展しており、ブリュール市が属するライン・エアフト地区の中で、2050年までに介護が必要となる住民の増加率は、ブリュール市が最も高いと予測されている。

一方で、ドイツとベルギーとの国境近くに位置するロレスプロイヒ村の人口は約1,100人であり、地理的条件からは中山間地域である。しかし、ロレスプロイヒ村では、比較的近くにあるアーヘン工科大学との協働を進めており、大学が開発している新規技術のプロジェクトを積極的に行っている。ロレスプロイヒ村を含むジンメラート地区は他所からの転入者が多いために、近年人口が微増している。

都市部にもブリュール市のように、深刻な高齢化の課題に直面する自治体は存在する。高齢化による地域課題には、大都市からの距離のような地理的条件だけではなく、近隣の大学や企業との関係性の有無やその他の社会的条件も影響を与える。また、地域単体で高齢化による課題を解決しようとするのではなく、ロレスプロイヒ村のように、村内の人材活用と合わせて、他の地域にある大学との関係性を構築することにより、大都市から遠い中山間地域も高齢化による課題への対応策の選択肢を増やすことが可能であると考えられる。

4. 東京プログラム(9月24～26日)と今後の展望

東京プログラムでは、ドイツ招へい青年団と合流

参考文献

内閣府(2025).『令和7年版高齢社会白書』.

Statistisches Bundesamt (n.d.). Bevölkerung Ältere Menschen. Die Bevölkerungsgruppe der älteren Menschen ab 65 Jahren, <https://www.destatis.de/DE/Themen/Querschnitt/Demografischer-Wandel/Aeltere-Menschen/bevoelkerung-ab-65-j.html>, 最終閲覧: 2025年10月18日.

し、高齢者関連施設の見学およびディスカッションを行った。ドイツ招へい青年たちはすでに就業しており、8名中5名が学生である日本人参加青年と職業ステータスの構成が異なる。加えて、ドイツではマイスター制度やデュアルシステムにみられるように、職業訓練が伝統的に重視されており、職業意識も日本とは異なる部分がある。

このようにバックグラウンドが異なる日本青年とドイツ青年は、ディスカッションから多くの異文化理解のきっかけを得たと考えられる。バックグラウンドが異なる者とのディスカッションは、有意義であるが容易とは言い難い。東京プログラムの前にドイツの在フランクフルト日本国総領事公邸でドイツ招へい青年と会う機会を得て、事前に情報交換ができたことは、ディスカッションを円滑に行うための貴重な準備となっていた。

本事業においては、高齢化の社会というテーマの学びと、国際社会に求められる人材になるための学びの2つの目的が設定されている。本事業におけるドイツと日本での経験を通して、参加青年たちは、高齢社会やドイツについての知見を多く得たとともに、それがきっかけとなって新たな疑問も増えたと思われる。参加青年たちは、本事業を通して、他国の成功事例を自国にそのまま取り入れることは、必ずしも可能ではなく、また、有意義とはいえないことをしばしば実感していた。それではどうすればよいのかを探求し、それぞれの専門性に应用することが、本事業に続く重要な学びである。

団長報告

テーマⅢ：バリアフリー・ユニバーサルデザイン分野 フランス派遣団団長 藤本 浩志

本事業の概要として応募要領の冒頭に、世界的な社会課題をテーマに設定し、関心を持つ青年たちが相互に訪問した上で一堂に会してディスカッションや文化交流を行うとある。その目的としては、これらの活動を通じて、世界共通の社会課題の解決に貢献する日本青年を育成するとともに、国際社会で指導性を発揮し社会貢献活動へ寄与する青年を育成することを目指すとしている。なお、今年度は総括テーマである「共生社会の実現」の下に3つのサブテーマが定められており、筆者が関わったのはテーマⅢ【バリアフリー・ユニバーサルデザイン分野】で、相手国はフランスであった。

以上の目的を踏まえて、この間の活動内容を団長の立場から報告する。記録の意味から、基本的には時系列で活動を列挙し、その中にあくまでも個人的な感想や印象ではあるが、コメントを挟むこととする。構成は大きく2項目からなり、順に総括的な報告と、事業の成果に関する所感を述べる。

1. 総括的な報告

1.1 本事業の活動の全体的な流れ

まず本事業に於ける青年たちの具体的な活動を時系列で示す。

(1) 事前研修：7月10日～12日

都内での合宿研修で、まず本制度の主旨や事業全体のスケジュールを理解し、さらに国土交通省からテーマであるバリアフリー・ユニバーサルデザイン、続いて外務省から派遣国であるフランスに関する講義を受けた。その後、派遣先であるフランスの在京大使館を訪問し、担当者と意見交換を行った。これらの活動を通じて日本代表団である自覚が芽生え始めたように感じた。その後の研修ではメンバー間でテーマに関連する課題を整理した。また派遣時の訪問先が示され、訪問先ごとに想定される論点を調査した、この課題整理や調査は出発前研修までの約2ヶ月間継続し、ミーティングで相互に理解を深めて知見の共有に努めた。

(2) 出発前研修：9月12日～13日

都内での合宿研修で、派遣先での活動に向けた役割分担を確認し、各自が調査した内容を共有して派遣に備えた最終的な準備を行った、

(3) 外国派遣プログラム：9月14日～23日

派遣先のフランスに於いては、概ね予定されていたスケジュールに沿って活動した。ストライキのためにナント市からパリ市に戻るTGVが運休となったが、現地の関係者の適切な判断によってバスがチャーターされ、その後の活動日程への悪影響は回避できた。具体的な活動内容は、1. 2で後述する。

(4) 東京プログラム：9月24日～26日

帰国翌日から合宿形式による東京プログラムでは、同じテーマⅢに関して招へいされたフランスの青年たちと合同でディスカッションや交流を行った。フランス青年たちも日本国内の関連機関を訪問しており、互いに相手国の関連機関を訪問したことで、それぞれの視点で双方の状況を理解することができ、活発なディスカッションとなった。また9月25日にはフランス招へい青年たちと一緒に都内の現状を視察した。まず都庁を訪問して、テーマであるバリアフリーやユニバーサルデザインに関する東京都の取り組みの説明を受け、その後は実際に都営地下鉄に乗り込んで国立競技場・東京体育館を訪問して東京のオリンピック・パラリンピック(以下、オリ・パラ)の会場で取り組みの説明を受けた。日本の青年たちがフランスで同様にパリのオリ・パラの会場を訪問して経験とあわせて、比較考察する良い機会となった。その後、都営バスの営業所で低床バス等の説明を受けた後、実際に路線バスに全員で乗り込んで現状を体験した。その後ホテルに戻り、フランスの青年たちと合同で英語によるディスカッションを行った。現場を一緒に体験できたことで、双方の青年たちにとってテーマⅢに関する相手国への理解の深化と同時に、青年たち同士の国際交流の場として大変濃密で貴重な時間になったことが強く感じられた。

最終日の夜は文化交流レセプションが開催され、来賓として海外から大臣も列席され、他の2テーマの両

国青年たちとも今後に繋がる歓談の機会となった。

(5) 帰国後研修：9月27日

前日までの東京プログラムでフランス青年たちとの交流やディスカッションを通じて得られた成果をまとめる研修の時間を設け、その後に内閣府の担当官も同席いただいて成果発表会を開催した。その後に3名の団長から講評を行い、最後に解散式を行って予定されていた活動は終了となった。

1.2 上記(3)外国派遣プログラムでの活動の詳細な報告

以上、本事業の活動を時系列に5段階に分けて報告した。続けて以下に、上述の(3)外国派遣プログラムの期間に於ける活動に関しても、記録の意味も兼ねて同様に時系列の形式で報告する。

・仏スポーツ・青少年及び非営利市民活動省を訪問

まず、内閣府の本事業の実施に際してフランス政府側のカウンターパートを訪問した。前半では当該省の活動内容の説明があり、後半では2024年にパリで開催されたオリ・パラに関して、障がい当事者の立場からの取り組みも紹介された。特にスポーツや青少年に関する社会課題が同じ省内に位置づけられている在り方も印象に残った。

・アディダス・アリーナを訪問

2024年に開催されたパリオリ・パラのために新設された屋内競技場を訪問した。パリ市のスポーツ施設でバリアフリーの課題に取り組む担当者から、詳細な説明を受けた。予算の範囲内で可能な範囲とは言え、新しい建築物なので高いアクセシビリティが実現できている様子が確認できた。

・ピエール・ド・クーベルタン競技場を訪問

上述のアディダス・アリーナと同様にパリオリ・パラでも使用された屋内競技場を訪問し、同じ担当者から説明を受けた。近代オリンピックの基礎を築いた創立者の名を冠したこの競技場については、上述のアディダス・アリーナとは異なり、歴史ある既存の建築物であるため、バリアフリー化には多くの困難が伴うことが説明からも理解できた。二つの屋内競技場を見学できたことで、青年たちも既存の建築物に対するバリアフリー化の困難さを理解でき、同時に担当者の強い思

いを感じる事ができたことは収穫だったと言える。

・日本国大使館を訪問

在フランス日本国大使館を表敬訪問した。公使や一等書記官が対応くださり、歓迎と激励の言葉をいただいた。また懇談の席上、フランスに於けるバリアフリーの状況も紹介いただき、日本代表でもある青年たちにとっても貴重な体験となった。また同日の夕方にパリ日本文化会館において開催されたレセプションでは、フランス政府の青少年政策担当副局長や日本国大使館の参事官からの挨拶があり、さらに参加したフランス招へい青年たちとも交流できた。

・ブルターニュ公爵城を訪問

TGVで約2時間の距離のナント市に移動し、まず歴史的建造物であるブルターニュ公爵城を訪問して、企画開発・顧客戦略の担当者から説明を受けた。歴史的な建造物に対するエレベータ設置等のバリアフリー化の困難な課題に対して、一つの解を現場で体験することができたことは青年たちにとっても良い経験になったと感じた。

・Info Jeunes Pays de la Loireを訪問

すべての若者を歓迎して情報を提供する活動を行っているNPOを訪問した。サービスや情報を提供する組織が、それを必要としている利用者が入ってきやすい雰囲気や環境を整えることは当然として、そのうえで利用者からの問い合わせを待つばかりでは無く、積極的に地域や現場に出て行くアプローチが印象に残った。

・ナントデザイン学校を訪問

ナントデザイン学校を訪問した。社会実装を念頭に置いて、ユニバーサルデザインも強く意識された教育システムである印象を受けた。活動の紹介のなかでは、関連する国際標準や欧州標準に関しても説明が聞けて有用であった。さらに教育機関としても、学生が自由に使えるワークショップも充実していた。

・メゾン・ド・カルティエを訪問

ナント市の地域の公民館やコミュニティセンターの機能を備えたセンターを訪問した。地域住民へのサービス内容に関しては日本と顕著な違いがあるわけでは無いが、例えば厨房を備えたスペースの利活用や、

地域住民を対象としたおもちゃの貸し出しサービス等、日本の青年たちの関心を引いていた。

・ハンディ・ラボを訪問

再びパリ市に戻り、障がいがある人たちへの支援にフォーカスした研究機関を訪問した。基礎的な試作品を開発するレベルから、スタートアップ企業による商品化に至るまで様々なフェーズの研究が行われており、ユニバーサルデザインの考え方を踏まえた開発研究も紹介されて、青年たちの関心を大いに引いた。訪問時には、基礎的研究から製品化された成果まで様々な事例のプレゼンテーションがあり、その後用意されていた立食のランチでは青年たちの意見交換等の交流も行われた。

・Quartier d'Accessibilité Augmentée – QAAを訪問

施設というよりは、パリ市に於いてアクセシビリティの向上を目指した特区のような位置づけの地域を、パリ市のアクセシビリティの担当者に案内され説明を受けた、例えば公園に設置された遊具、街中の交差点での視覚障がい者向けの音声案内装置やその規格の共通化、歩道に設置された障がい者対応の公衆トイレ等々が挙げられる。特区の範囲内のみでの先行的な取り組みや、一方で特区以外の地域でも既に徐々に一般的に普及している設備等にも気づくことができた。

・仏スポーツ・青少年・市民活動省を訪問

人材育成や文化交流の観点から期間中にホームステイがプログラムされており、庁舎ビルの最上階のラウンジでホストファミリーを招いたパーティーが開催され、青年たちにとっては初めての対面の場となった。その後ホストファミリーに連れられて順次退席していったが、メンバーによっては少し不安げな印象も感じられた。しかしホームステイ期間終了時にホストファミリーも交えて開催した昼食会では、どの青年たちもすっかり打ち解けた様子で、昼食会終了後には別れを惜しんで涙されるホストファミリーも居られた。また青年たちから個別に話を聞くと、文化交流の観点からは大変意義ある時間だったと理解できた。お引き受けくださったホストファミリーの皆さんには大いに感謝している。

以上、フランスでの活動を全て詳細に網羅できた訳では無いが、本事業での派遣先での活動は、総じて青年たちにとっては貴重でかけがえの無い体験になったと確信している。

2. 事業の成果に関する所感

日本の青年たちは7月の事前研修から相手国への派遣を通じてメンバー同士で2ヶ月間以上にわたって蓄積してきた知見を元に、この東京プログラムの舞台に於いてフランス青年たちとディスカッションを重ね、更に深いレベルの気付きと理解に繋がり、青年たちの成長を確かに感じとることができた。

さらに今回の事業に参加することで、例えば今後バリアフリーやユニバーサルデザインの普及啓発に向けて、さらには社会課題の解決の一助となるような社会実装に向けたビジネス的な見通しのきっかけやヒントを得たという青年もいた。今回の事業は、本報告の冒頭で確認した本事業の目的の実現に資する活動である手応えを感じた。今回の事業は一旦終了するが、この経験は今後は青年たち自身の発展に繋がる第一歩と理解する青年も少なからずいたことは成果として喜ばしい。

本報告の冒頭で、本事業の目的を募集要項から引用したが、団長の立場からは本事業の目的は十分に達せられたと認識している。フランス政府の担当の方からも、今後も本事業を発展的に継続していてもらいたいとの伝言を頼まれたが、これは団長としての考えでもある。

本事業に関わった約3ヶ月の間、実に多くの方々にお世話になった。個々の皆様のお名前を挙げるのは差し控えるが、本事業を企画運営された内閣府の青年国際交流事業を担当される皆様、加えて運営に関わられている一般財団法人青少年国際交流推進センターや日本青年国際交流機構の皆様、改めて心から感謝すると共に深く敬意を表したい。

今回参加した青年たちの今後の活躍と、それによって本事業の成果が着実に広く深く根付いていくことを祈念して総合評価に代えたい。

事業アンケート

日本参加青年アンケート

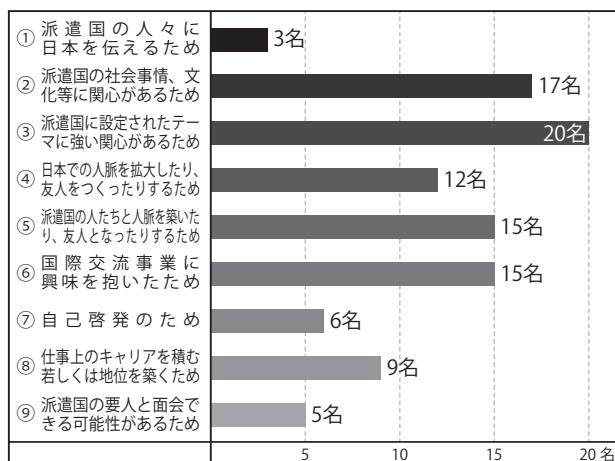
アンケート対象者：団長、副団長除く参加青年24名

※「3. 東京プログラム（9/24～26）について」の対象者は参加青年23名

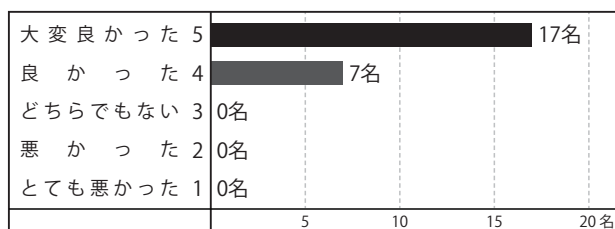
1. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。

(複数回答可)



(2) 事業全体をどのように総合評価しますか。



- 自分自身の力だけでは到底経験し得ない様々な体験ができた。さらに大臣をはじめとした専門家の方や同じ関心を持つイタリア青年たちとのコネクションを作ることができ、単にこのプログラムだけで終わらないつながりを得ることができた。(イタリア団)
- テーマに関する深い学びと国際交流を両立できる素晴らしい事業であった。タイトなスケジュールだったため、体力面でハードではあったが、適応力を鍛えるという面でも良い学びになった。イタリア青年や現地との交流では、テーマ面での学びとどう組み合わせるかが課題となったが、その課題に団で上手く対応できたことで、どのような側面からも素晴らしい学びを得られる事業となった。(イタリア団)
- 国際交流が主軸となっている派遣ではあったが、障害者分野という深いテーマを扱ったので各々の専門知識をフル活用しながら、各施設への訪問を通して実りある学びだった。ディスカッションでイタリア青年と十分に話し合うことができたものの、障害者分野への興味関心を抱いたきっかけをより深く掘り

下げることや、互いのバックグラウンドについて語る事ができれば、国際交流と障害者分野という二軸をより強く持った事業となったのではないかと思う。とはいえ、尋常ではない量の学びを得ることができた絶対に忘れられない最高の事業だった。(イタリア団)

- 学びが多くとても充実していた事業だった。普段は訪れることができないような施設を訪問し、様々な人々の話を聞くことができた。また、同じような関心分野を持つ外国青年との交流や現地の視察、さらにはホームステイを通して、相手国の価値観や文化などを肌で感じ、テーマである高齢社会について理解を深めることができた。(ドイツ団)
- 様々なプログラムがあり、国際交流もテーマについての学習もどちらもとても充実したものとなった。日本での研修とドイツでの派遣活動、一つ一つの時間に意味があり、緻密に設計されていると感じ、どの時間も実り多い時間だった。また、プログラムで出会うすべての方々がとても優しく、興味深いお話をすることができ嬉しかった。ドイツにおいても、日本の帰国後研修においても、ある程度自由時間があつたおかげで交流する方法を自分たちで企画し、交流を深めることができ、今後にいかせる人脈を作ることができた。(ドイツ団)
- 日独両国のテーマに関連する様々な施設に視察に行けたことはとても貴重な経験であり、今後のキャリアにおける財産になると思った。一方で過密日程とレセプションなどの慣れない場での精神的疲労で体調管理が難しい面もあった。(ドイツ団)
- 事前研修から現地での活動まで、一貫して学びの多い充実したプログラムだった。事前研修では、ユニバーサルデザインやバリアフリーの基礎的な概念を整理し、日本の現状や課題を把握することができた。その準備があつたことで、フランスでの視察や講義内容をより深く理解できたと感じる。現地では、デザインが単なる利便性の追求ではなく、「人の尊厳を守る文化」として根づいていることに驚かされた。施設見学や現地の専門家との対話を通じて、制度の背景にある社会的な考え方まで学ぶことができ、日本の取組を相対的に見つめ直す機会となった。(フランス団)
- 特定のトピックにフォーカスし、国内外の様々な人

間と交流するという面において、通常の留学などでは絶対に得られないものがあると思った。一方で、出発までの自己研修のあり方や、帰国後研修のタイトすぎるスケジュールなどは、参加青年の肉体・精神の両方の健康上の観点から、少々改善してほしいと思う点もあった。(フランス団)

- 派遣国の様々な訪問機関で多くの専門家から貴重なお話を聞くことができ、大変有意義な機会だった。温かく迎え入れてくださったホストファミリー、現地のコーディネーターや通訳の方など、多くの方々のサポートにより派遣テーマを超えた学びや気づきがあった。一方で、活動スケジュールが過密だったことで多くの団員の体調に影響が出てしまい、活動に十分に専念できなかったことが少々残念だった。(フランス団)

(3) この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。

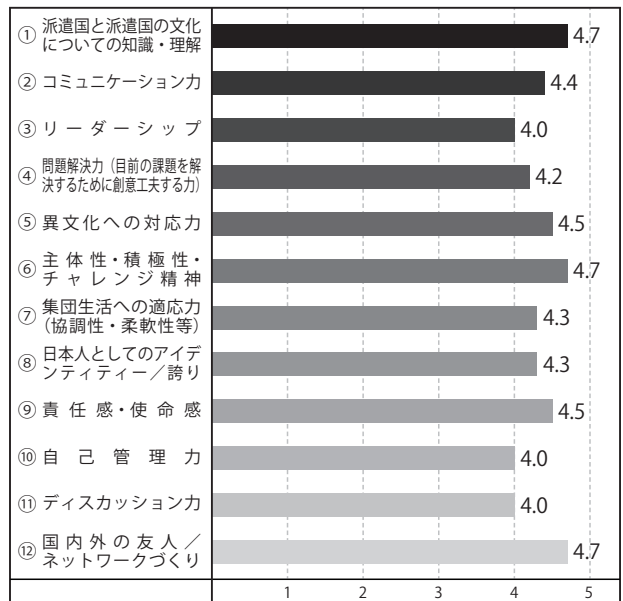
目標を超えて大きな成果を得ることができた	5	9名
達成できた	4	15名
どちらでもない	3	0名
あまり達成できなかった	2	0名
まったく成果を得られなかった	1	0名

- 自身の専攻分野の学びを深めること。海外での自身のあり方や文化圏が異なる人々との交流について研鑽を積むこと。(イタリア団)
- 自分自身と向き合い、障害者との関わり方を見直すこと。自分が障害者に対する実際とイメージの乖離を改める一助となること。(イタリア団)
- 異文化交流を通し、相手国への理解を深めると同時に、自身を見つめ直して日本人としての自分の価値観を磨いていくこと。また、高齢社会というテーマにおいてドイツと日本の違いや共通点を把握し、将来日本の社会のために貢献できるようになること。(ドイツ団)
- 団員と全力で協力しながらテーマに対する見解を深め、自分自身の社会課題への関わり方を模索すること。(ドイツ団)
- よりインクルーシブな社会を達成するために、様々なデザイン(アクセシブルデザイン、ユニバーサルデザイン、インクルーシブデザイン)のバランスや役割分担をどのようにするのか考え、知ること。(フランス団)
- 派遣国やヨーロッパにおける派遣テーマに対する課題や取り組みを学ぶこと。派遣テーマに関連する現地の方々との関係を築くこと。国際交流を通して異なる文化を知り、自分自身の価値観や考え方を見つ

め直すことで、より多様な社会に開かれた視点を得ること。(フランス団)

- (4) 以下の①～⑫までに掲げる項目に関し、この事業全体を通じて得られた自らの成長等への効果について、以下の5～1のうち、該当すると思われるものを選択してください。

5：大きな効果があった／4：効果があった／
3：どちらでもない／2：あまり効果がなかった／
1：効果がなかった



※数値は参加青年24名の平均

- (5) 上記(4)に掲げたもの以外で、事業参加によって具体的に得られたものがあれば記入してください。

- 様々なバックグラウンド、専門性、立場を持つ人同士での話し合いをする機会を得られたのが良い経験だった。また、団全体が疲弊しているときに努めて明るく振る舞うというような、雰囲気に対する俯瞰的な意識も身についたと思う。(イタリア団)
- 全体を見て行動する力が身についた。私たちの団ではあえて団員の中でリーダーを決めていなかったが、団にとって足りていない所や現地での急なスケジュール調整などに臨機応変に対応することにより、それぞれが状況に合わせたリーダーシップ力を発揮できたと思う。(イタリア団)
- 一見ハードルの高そうな事業内容だが、万が一ミスをしてでもチャレンジしたことを評価してくれるような温かい空気を周りの方々を作ってくださり、私たち青年の挑戦を後押ししてくれた。おかげで普段よりも思い切ってチャレンジできた。(ドイツ団)
- 英語を母語としない青年同士で英語によるコミュニケーションをしたことで、完璧な英語を話さなければいけないという縛りを捨てることができ、より積

極的に自分の考えを表現できるようになった。ドイツの方々がとても寛容に受け入れてくれたため、その姿勢を見て、異文化に対する接し方を学ぶことができた。また、日本人同士の役割分担やチームワークの発揮の仕方も勉強になった。(ドイツ団)

- ・能動的に学ぶ力、スケジュール管理。(フランス団)
- ・今回の派遣を通して国際社会で通用するコミュニケーション力の必要性を改めて感じた。自分は派遣前から英語でのコミュニケーションには不安がなかったが、団員と派遣国の人々とのコミュニケーションもサポートすることができ、得意な分野でチームの力となれることを実感した。(フランス団)

(6) あなたはこの事業への参加を通じて、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか。

人生の進路を考え直すほどの大きな影響を受けた	5	4名				
大きく変わった	4		20名			
どちらでもない	3	0名				
あまり変わらなかった	2	0名				
全く変わらなかった	1	0名				
			5	10	15	20名

- ・自身の進路について元来官公庁もしくは研究職を志すつもりでいたが、その両面についてより具体的な像が見えてきたと感じている。また、障害に関する基本的な考え方が拡張し、障害の有無に関わらず人に対してこれからより一層優しくなれるようになったと思う。(イタリア団)
- ・SNSなどからうっすらと想像していた海外へのイメージを、身をもって体験することができた。人生において「海外」という選択肢がより身近に、現実性を持って存在するようになった。社会については、国を実際に動かす人間の考え方を間近で見ることができ、社会を動かすために求められるクオリティのレベルを知ることができた。(イタリア団)
- ・これまではっきりと人生の目標を持っていたわけではなかったが、訪問先でのお話やドイツ青年との交流などを通して様々な刺激を受け、高齢社会の問題の深刻さを再認識すると同時に、将来仕事を通してその解決に尽力したいという思いがより一層強くなった。(ドイツ団)
- ・自分の専門分野において様々な人が国内外で尽力していることを知り、私ももっと頑張ろうと思った。(ドイツ団)
- ・自分の社会との関わり方をもう一度見直す機会になった。今までも大学等で社会課題に関する講義は受けてきたが、自分事として捉えることが難しかった。しかし、本事業を通して、自分にできる方法で共生社会を作る一員になれると気づくことができた。

(フランス団)

- ・これまで国際的な視点にはあまり関心がなかったが、今回の経験を通じて「比較することで見えるもの」があると感じた。日本の取組を相対化して考える習慣が付き、社会をより広い文脈で捉えるようになった。(フランス団)

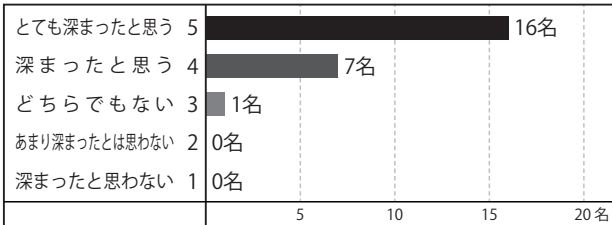
(7) この事業を通じて、あなたと派遣国の人々との相互理解が深まったと思いますか。

とても深まったと思う	5	10名				
深まったと思う	4		14名			
どちらでもない	3	0名				
あまり深まったとは思わない	2	0名				
深まったと思わない	1	0名				
			5	10	15	20名

- ・日本国内でもイタリア国内でも、イタリア人と短いながらも濃密な時間を過ごすことができた。英語だけでなく、イタリア語を使ったコミュニケーションに挑戦することで、イタリア人がどのような思想の上に日常を過ごしているのかを実感を持って知ることができた。日本との違いを明確に実感し、相互に影響を受け合うことで、どちらの良いところも理解することができた。(イタリア団)
- ・視察先でのコミュニケーションももちろんだが、東京プログラムのディスカッションでは障害者をどのように捉えるかという点において文化的価値観が背景にあることを仮説とし、様々な議論を行うことができた。その中で、どのような文化的価値観が相互にあるか、また、どのようなロジックで障害者への対応や制度設計の変遷が生じているのかを理解することができた。(イタリア団)
- ・ドイツ青年との交流及びホームステイは派遣国の人々との相互理解を深めるのに大きく寄与したと思う。特にホームステイでは、受け入れてくださった家庭の日常生活の一部となることで、ドイツの価値観や文化などを肌で感じ取ることができた。これは普通の旅行ではなかなかできることではなく、ドイツに対して理解を深めることに大変役に立った。(ドイツ団)
- ・ディスカッションを通して自国や相手の国で視察したものについての考えをお互いに共有できた。しかし、共に過ごす時間が短かったため、もう少し長い時間関わられるようなプログラムだと良いと思った。(ドイツ団)
- ・ホームステイを通して、フランスの文化や伝統をはじめインターネットにはない生で新鮮な本当の生活を体験でき、文化理解が深まった。(フランス団)
- ・現地の学生や専門家との対話を通じて、互いの文化

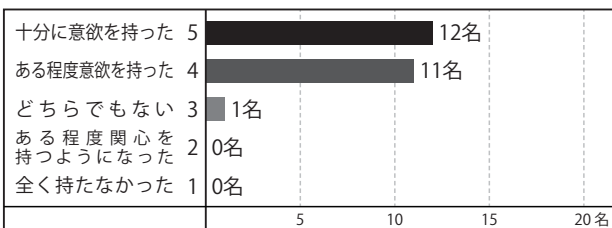
や考え方への理解が深まった。ユニバーサルデザインという共通テーマがあったことで、言語や背景の違いを超えて議論できたのが印象的だった。(フランス団)

(8) この事業を通じて、あなたと派遣国の人々との友好が深まったと思いますか。



- ・イタリアの方はとても友好的に日本人に接してくれた。我々もイタリアの方と関係を長く維持するべく、今後もメールなどでやり取りを継続する予定だ。(イタリア団)
- ・間違いなく深まったと感じる。正直この事業に参加するまでイタリアについての興味や知識は乏しかったが、今回の事業参加を通してイタリア人との繋がりが生まれ、日伊の関係に寄与できる機会が増えたことはとても嬉しい。(イタリア団)
- ・ドイツ青年とただ話をするだけでなく、ディスカッションを行い、一つのを共に作り上げる経験ができ、普通の何倍も仲を深められた。(ドイツ団)
- ・真剣なディスカッションの時間と、文化交流レセプションや昼の休憩時間などの交流の時間があることで、真剣な話題・日常的な話題どちらについても知ることができた。しかし、共に過ごす時間が短かったため、もう少し長い時間関わられるようなプログラムだと良いと思った。(ドイツ団)
- ・ホストファミリーやフランスからの招へい青年とテーマを超えて互いの文化や生活様式を実際に体験できたことで、心の距離が縮まり、この事業が終わってからも続く関係性が築けた。(フランス団)
- ・国際交流を通して、お互いの国の違いや今後何をしていくことができるのかについて腹を割って話すことができ、とても良い経験だった。(フランス団)

(9) 事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか。

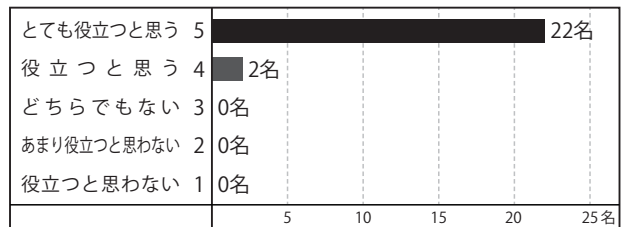


- ・国のプログラムとして、世界でも最先端のインクルー

シブ社会への視察に派遣されたことを考えると、ここで得た学びを何かの形で社会に還元していくことが使命(もちろん自発的な意味で)だと感じている。(イタリア団)

- ・障害者という社会性の強い分野上でここまで濃い体験をした以上、社会貢献活動への関心は高まらざるを得ない。障害者分野以外でもこの事業で出来た人脈をいかして、社会貢献活動を行っていきたい。(イタリア団)
- ・ドイツのボランティアの文化に触れてとても感銘を受けた。ドイツの人々はボランティアをやるのが当たり前という感覚を持っており、そのような姿勢がすばらしいと思った。(ドイツ団)
- ・今回の学びをいかし、自分のできる方法で社会貢献活動に参加もしくは始動する一員になりたいと考える。派遣国や日本でのプログラムを通じ、今両国が抱えている社会課題を目の当たりにし、私たち青年が行動する必要性を感じたからだ。(ドイツ団)
- ・派遣以前からも関心はあったが、派遣国に関わる内容や、派遣国と日本の友好関係に寄与するような活動など、関心の幅が広がった。(フランス団)
- ・実際に社会貢献活動を自身でもしているが、今後は国際交流という観点からも社会貢献活動ができればなお良いと思った。(フランス団)

(10)-1 この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。

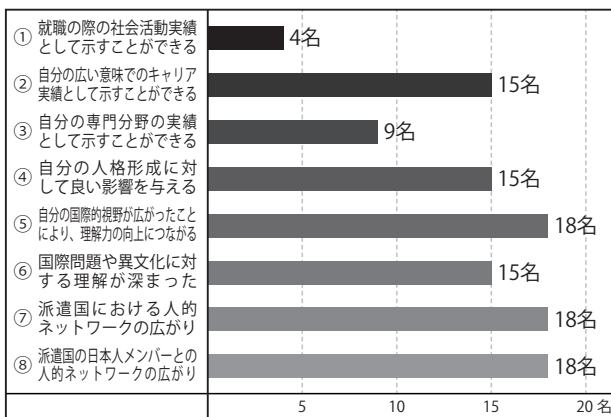


- ・この事業でしか得られない経験をした。この経験は自分自身を成長させてくれ、周囲の人が困っている時などに助けるスキル向上に繋がったと感じている。(イタリア団)
- ・自分自身のキャリアや国際交流に対する姿勢が変化し、自身としてのあり方も大きく揺さぶられた。(イタリア団)
- ・間違いなく役立つと思う。先進的なイタリアのインクルーシブ社会から受けた影響を糧にして自分のコミュニティに還元したり、自分のこれまで関わってきた友人にも共有したりできれば良いと思う。(イタリア団)
- ・事業を通して得たバックグラウンドの異なる様々な人との繋がりや、高齢社会というテーマについての理解、そして異文化交流の経験は私の将来において大

きな糧になったと信じている。(ドイツ団)

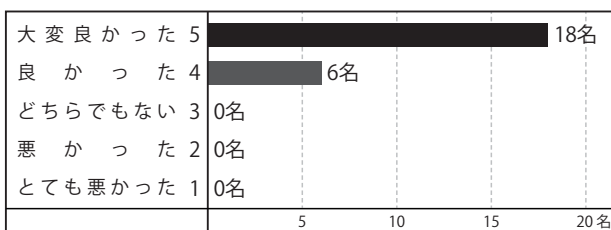
- ・テーマ(高齢社会)に関連する調査研究の仕事をしているため、派遣国の現状と日本の特徴を相対的に理解できたことが非常に意義深かった。(ドイツ団)
- ・この事業を通して、テーマに対する知識だけではなく、様々な人々と出会い、協調する意義を再認識できたため将来に大いに役立つと考える。今回の経験は今までで一番学び、挑戦した期間であり、この挑戦は今後社会で活動していく上で欠かせない経験だと考える。(ドイツ団)
- ・自分からここまでの規模で能動的に学びに行こうとしたのは初めてだったので、一つやり終えたことは自信に繋がった。(フランス団)
- ・多様な文化や宗教、さらには一人一人異なる個人が共生する国際社会で求められることとして、複眼的な視点と領域横断的な知識が得られた。(フランス団)
- ・本事業で得た国際的な視点やネットワークは、広告業界で働く上でも大きな財産になると感じている。デザインや表現の背景にある文化的要素への理解が深まり、より多様な人に届く企画を考える力が養われた。また、同じ団のメンバーとの出会いも今後の成長に欠かせない刺激になっている。(フランス団)

(10)-2 上記において、5～4を選んだ方は、どのように役立つと考えるか、以下の内容から当てはまる項目を選んでください。(複数回答可)



2. 派遣国活動について

(1) 派遣国活動プログラム全体をどのように評価しますか。



- ・濃密なスケジュールで、どのタイミングにおいても

普段では体験出来ない学びがあった。ハードな側面もあったが、それを乗り越えることも自分の力に繋がったし、楽しかった。(イタリア団)

- ・スケジュールはとても忙しく、ハードだった。訪問施設数が多いのはメリット・デメリット両方あると考えるが、団員やコーディネーターの努力により、充実したものになったと感じる。(イタリア団)
- ・高齢社会分野に関連する施設に多く訪問させていただきだけでなく、視察終了後の自由時間においても知らない国で自分たちだけで行動するという貴重な経験をさせていただき、とても面白かった。(ドイツ団)
- ・講義だけではなく、派遣国青年との交流や表敬訪問、レセプションなど、普段経験できないプログラム内容となっており、青年育成事業として素晴らしいと感じた。(ドイツ団)
- ・非常に充実したプログラムだった。フランスでの学びを通じて、ユニバーサルデザインやバリアフリーが「制度」ではなく「文化」として社会に根付いていることを実感した。講義や施設見学だけでなく、現地の学生との交流から多様な価値観を知ることができ、日本の課題を客観的に考えるきっかけにもなった。同じ団のメンバーとのディスカッションも刺激的で、異なる専門分野の視点を知れたことが印象的だった。(フランス団)
- ・派遣活動を通して色々なセクターを見ることができ、内閣府事業ならではと感じた。特に国際交流の観点でホームステイをすることができ、社会人になってからこのような経験をすることができ、とても楽しい日となった。自分自身の日頃の活動にも少しずついかすことができた。(フランス団)

(2) 派遣国活動プログラムから得たこと、発見したことは何ですか。

- ・障害に対する捉え方の違いを感じた。具体的には障害の社会モデルと呼ばれている考え方について、言葉上は理解したつもりになっていたが、それが実践されている場を視察し、日本との根本からの違い(良い面も悪い面も)を感じた。(イタリア団)
- ・特に施設訪問において、現地の人々は日本とは異なる視点で障害を持っている人を見ているということを感じた。イタリアにおける先進性を日本に導入するにしても、根本的に意識改革を行わなければ定着しないということを痛感した。(イタリア団)
- ・ドイツにおける高齢社会対策の理念や具体的な施策に関する知識を得た。また、様々なバックグラウンドの違う人々とコミュニケーションを取ることを通して視野を広く持つことの大切さを感じた。(ドイツ団)

- ・ドイツでの人の温かさや異文化の人に接する際の気遣いなどを直接学ぶことができた。また、テーマである高齢社会に関しても、自分が知らない様々な取組を知ることができ、大きな学びになった。(ドイツ団)
- ・派遣国と日本それぞれのバリアフリー、アクセシビリティに関する取組の違いや共通する課題、多様なニーズや背景のある人に対する社会の眼差し。(フランス団)
- ・現地で感じた最大の学びは、「ユニバーサルデザインが制度ではなく文化として重視されている」という点だ。特別な配慮というより“当たり前の設計”として誰もが使いやすい環境を整備しようという努力が見られた。この背景には、デザインを社会的な責任として捉える考え方があることを知り、日本の状況と比較することで多くの気づきを得た。また、他分野の専門性をもつ団員との議論を通じて、デザインの力を社会にどう応用できるかという新しい視点も広がった。(フランス団)

(3) 派遣国活動プログラム中、最も印象に残ったのはどのようなことですか。

- ・訪問施設での様々な考えや意見を知ることができたこと。また、ホームステイでホストファミリーたちの普段の生活を知ることができたことも、より深く相手国のことを知ることができた気がして印象的だった。(イタリア団)
- ・陸路の道中で全員で行ったディスカッションが印象に残っている。それぞれが感じたことやこれから自分たちがどうしていくべきかを誰からというわけでもなく話し始め、最終的には全員を巻き込んだ話し合いに発展したことが印象に残っている。有意義な会話はバッファの時間から生まれるのだと思った。(イタリア団)
- ・楽しんで一緒に時間を過ごすことを大切にしているようなボランティア活動の取組・コミュニティの取組が多かった。(ドイツ団)
- ・訪問先の方々が口を揃えて仰っていた「高齢者を『支える存在』として扱うのではなく互いに助け合う」という価値観が印象に残っている。高齢者を自立した存在と考え、互いに相手を助け、互いが相手から何かを得る。高齢者を「社会の中の一人の人間」として考えることは高齢者の自立した生活を実現することに繋がる大切な考え方だと知った。(ドイツ団)
- ・2024パリ五輪に向けた制作を行った団体の方にお話を伺ったこと。バリアはどうして生まれるのか。生まれるのは個人のせいではなく社会のデザインのせいであり、それがなくなった瞬間彼らは障害というものを忘れるということを強く再確認させられた。

(フランス団)

- ・Stade Pierre de Coubertinの視察。社会課題とは多くの場合、単純な正解を持たない。伝統を守ることと新しい価値を取り入れることは、しばしば緊張関係が生じる。しかし、そこで大切なのはどちらかを選ぶことではなく、限られた条件のなかで最も誠実なバランスを模索し続ける姿勢であると感じた。(フランス団)

(4) 地元青年との交流をどのように評価しますか。

大変良かった	5	11名
良かった	4	10名
どちらでもない	3	3名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20名

- ・双方の素晴らしさを尊重しつつ、今後どのような社会を作っていきたいかを考える時間は楽しく、充実していた。ただ、より中身のあるディスカッションをするために、個人的にはもう少し英語力を培っておけばよかったと反省している。(イタリア団)
- ・あまり交流できなかったが質疑応答などにも快く対応していただき、彼らの考えを知ることができたと思う。(イタリア団)
- ・とてもよかった。地元青年の方々は皆とても親しみやすく、言語も文化も違う私に分け隔てなく接してくれた。とても仲を深めることができたと思う。(ドイツ団)
- ・地元青年は社会人の方が大半であり、専門的知識を持っていたため、ディスカッションや日々の会話を通じてそれらの専門的知識を学ぶことが多かった。また、日本文化への興味も常に持ってくれていたため、普段の会話を通じて文化の相互理解を成し遂げられたと考える。(ドイツ団)
- ・ナントのデザインスクールに訪問した際に現地の学生(グラフィックデザイナー)の方と一緒にプロジェクトを行うことになったり、東京プログラムを通してさまざまなネットワークができたりと、意義のある交流になった。(フランス団)
- ・地元の青年との交流は学びの理解を深める重要な機会になった。お互いの文化や日常生活について話し合う中で、価値観や社会の構造の違いを肌で感じる事ができた。特に、彼らが「自分たちの町を良くする」という意識を強く持って行動している姿勢に感銘を受けた。単なる友好交流に留まらず、社会参加のあり方を考えさせられる時間だった。(フランス団)

(5)-1 施設訪問をどのように評価しますか。

大変良かった	5	21名
良かった	4	3名
どちらでもない	3	0名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25名

(5)-2 特に印象に残った訪問先を、印象が強い順に3つ挙げてください。

<イタリア>

<COMETA>

- ・美を基調とする空間で、子供たちが障害の有無や、経済的に厳しい状況乗り越えて生活しているのが印象的だった。
- ・教員一人一人のコミット率が高く、究極的には障害者を障害者として区別する必要はないという信念に基づく強い精神性を持つ施設だった。

<Fondazione Sospiro>

- ・障害者が自由にアクティビティを選択できる環境が整備されるとともに、障害者一人一人への心理的療法によって障害の程度が緩和されていた。
- ・様々なニーズに対応するアクティビティを提供しており、入居者の精神的な自立を促していた。

<Romulea Autistic Football Club>

- ・自閉症を持っているとは思えないコミュ力の高さと、チームとして元気にスポーツを楽しもうという意思が感じられてすばらしかった。
- ・EUという共同体の偉大さを感じた。各国が自らの利益を優先的に考えざるを得ない状況で、上層の倫理的な政策に着手できる余力があるのは素直に感銘を受けた。

<ドイツ>

<サイクリング・ウィズアウト・エイジ>

- ・無料の人力車を通じて、高齢者が会話を楽しみ、地域に参画できるサービスとなっていた。
- ・何歳になっても外で風を感じたいという高齢者のニーズに対してとてもうまく応えていると思った。

<ロレスブロイヒ村の商店 (DORO)>

- ・地域に開かれた店であり、住民の居場所となっていた。文化的な活動も定期的開催されており、共生社会を体現している場所だと感じた。
- ・高齢者を含め、地域の方の交流施設に必要なのは、来るためのハードルを下げる事だと実感した。

<ブリュール市役所>

- ・高齢者に優しい街づくりを目指しており、実際にどのような取組をしているのかを知ることができたのはとても貴重だった。
- ・さまざまな取組がなされており、街にもさまざまな高齢の方々がおり、生き生きとしていたのが印象的だった。

<フランス>

<ナントデザイン学校>

- ・単なるデザインではなく、機械工学や情報工学の学科もあり幅広い視点からデザインに向き合っていたのが印象に残った。またフランスのデザイナーの根本思想に言語の必要としないデザインの思想があった。
- ・学生たちの自由な発想と社会課題に対する探究姿勢が印象的だった。ユニバーサルデザインを「人と社会の関係を再設計すること」と捉える姿勢は、日本のデザイン教育にも通じるヒントだと感じた。

<アディダス・アリーナ>

- ・スポーツ施設においての、ユニバーサルデザインの可能性を学ぶことができた。
- ・日本にはない視点からスタジアム設計を行なっているのが興味深かった。センサリールームやカルムダウンルームなど感覚過敏の方のための部屋があり、ピクトグラムのデザインも工夫されていた。

<ハンディ・ラボ>

- ・起業家時代がユニバーサルデザインという想いのもと、プロダクトデザインをしていてそこが面白いと思った。
- ・ビジネスの観点からユニバーサルデザイン・バリアフリーに取り組んでいて興味深かった。

(6) ホームステイをどのように評価しますか。

大変良かった	5	21名
良かった	4	3名
どちらでもない	3	0名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25名

- ・テーマ分野の領域に関連する団体に所属するご家庭だったため、単なるホームステイだけではなく、より日常的な観点でテーマ分野や派遣国の文化に触れることができた。(イタリア団)
- ・大学教授のご夫妻と六人の子供のご家庭で、とても温かく迎えていただいた。テーマとの関連は特にな

かったが、両国の政治・社会問題についても意見を交わし大変有意義な時間となった。(イタリア団)

- ・ホストファミリーの方々が皆本当にオープンマインドで優しく受け入れてくださり、最高のホームステイだった。現地の生活に溶け込むことで普通は経験できないような現地文化や価値観を感じることができた。(ドイツ団)
- ・ホストファミリーはとても優しく、様々なドイツ文化について教えてくれたため、素晴らしい時間だった。また、初対面の人と会う際にお辞儀をする等の作法や畳文化など、日本文化を事前に調べ、接してくれたことが印象に残っている。文化の違いを好意的に受け取り、学ぼうとするホストファミリーの姿から異文化理解の姿勢の重要性を再認識できた。(ドイツ団)
- ・言語が上手く使えない中でも、お互い試行錯誤しながら楽しむことができた。実際のフランスの家庭の一員になって生活を体験することは非常に貴重な時間だった。(フランス団)
- ・ホストファミリーとの生活を通じて、文化の違いを体験的に理解することができた。食卓での会話や日常の過ごし方から、フランスの家庭文化や価値観を知ることができたのは非常に貴重だった。言語の壁を超えて温かく迎えてくださり、人と人との関わりの基本に「尊重」があることを強く感じた。(フランス団)

(7) 派遣活動全体を通して気になった点、改善点があれば記入してください。

- ・国際交流を全面に押し出した感じのプログラムがもう一つくらいあっても良かったのではないかと思う。テーマ面での学びが重要なのももちろんだが、国際交流は同じくらいの優先度で存在していると思うので、国際交流の面においても団員全員の力が試されるようなプログラムがあればもっと良かったと思う。(イタリア団)
- ・移動距離がとにかく長かった。しかし、その時間を活用して団としての必要な話し合いができたと感じているので、そのような時間を最初からスケジュールに組み入れてもいいかもしれない。(イタリア団)
- ・とても多くの施設を訪問させていただいた一方で、日程がかなり過密で少し大変だった。派遣と東京プログラムの間が半日ほど空いているとありがたかった。(ドイツ団)
- ・ドイツ青年と交流できるプログラムをより設けていただくと、交流がより盛んになったと考える。(ドイツ団)
- ・時差などを考慮したスケジュール、日々の団員による

ミーティングの時間確保なども考慮したスケジュールにしていただけると嬉しい。(フランス団)

- ・参加青年の年齢層が広く、経験の差によって視座が異なる場面があった。年長の方々の意見や支援に助けられる一方で、議論のテンポや価値観にギャップを感じることもあった。(フランス団)

3. 東京プログラム (9/24~26) について

(1) 東京プログラムをどのように評価しますか。

大変良かった	5	11名
良かった	4	11名
どちらでもない	3	1名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
	5	10
	15	20名

- ・イタリア青年と積極的にコミュニケーションを図ることができた。(イタリア団)
- ・テーマにおいて、日本独自の取組を取り上げて頂いたことで、イタリア青年たちの率直な意見を聞くことができて大変よい機会になった。一方で、時差ボケなど体力面でかなりつらい思いをしたため、その点についてはもう少しご検討頂けると嬉しかった。(イタリア団)
- ・ディスカッションの時間の他に、自由に交流できるような時間ももっとあるとよかった。(ドイツ団)
- ・時差ボケもありとてもハードなプログラムだったが、ドイツ青年と一緒にさまざまな施設を回り、ディスカッションすることができた。テーマへの理解が深まるこの事業ならではの体験ができ、とても有意義だった。(ドイツ団)
- ・自分たちが派遣国で学んだこととフランス青年が日本で感じたことを共有できたことがとても新鮮で興味深かった。(フランス団)
- ・スケジュールがタイトすぎた。招へい青年との自由時間の交流がもう少し欲しかった。(フランス団)

(2) ディスカッションをどのように評価しますか。

大変良かった	5	11名
良かった	4	9名
どちらでもない	3	3名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
	5	10
	15	20名

- ・互いに英語がノンネイティブな中で、できる限り察しようとして向き合ってディスカッションできたことは、国際交流において語学の鍛錬だけが大切なのではないと感じるよいきっかけになった。(イタリア団)

- ・ディスカッションする日が隔日になってしまったことや、朝から始まる時もあったため、どうしても100パーセントコミットできていない時間があった。しかし、素晴らしい学びや知見を持っているメンバーが多く、そこに助けられた。(イタリア団)
- ・英語で実務経験豊富なドイツ青年とディスカッションするのは、最初は不安が大きかったが、ドイツ青年がこちらの意見を聞き出そうとしてくれたり、理解しようとしてくれたりしたため、とても意義深いディスカッションをすることができた。(ドイツ団)
- ・ディスカッションの目的ややり方が不明瞭で、時間も短すぎたと思う。(ドイツ団)
- ・時間の制約や参加者の言語レベルに差がある中で、十分な議論と成果をまとめる作業がとてもチャレンジングだった。(フランス団)
- ・全体の話し合いを含めて勉強になった。(フランス団)

(3) テーマ別視察(9/25)をどのように評価しますか。

大変良かった	5	15名
良かった	4	6名
どちらでもない	3	2名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20名

- ・イタリアだけでなく、日本の事例を学んで比較できたことがディスカッションで役立った。(イタリア団)
- ・派遣国活動で複数の施設の要素を含めた訪問先を選んでいただいたことで、自身も日伊の比較ができたことが非常に良かった。(イタリア団)
- ・日本において高齢社会分野の取組がどうなっているか知らなかったのが、その実情を知れたのは良かった。(ドイツ団)
- ・ドイツ青年と一緒に視察をできたことで感想を共有したり、ドイツと日本の比較について意見交換したりできたのが有意義だった。介護事業所以外の主体が実施している取組についても視察をできるとよりよかった。(ドイツ団)
- ・東京の地下鉄における、普段は気づきにくいアクセシビリティに気がつくことができた。(フランス団)
- ・日本の全体を見ることができ勉強になった。(フランス団)

4. 事前・出発前・帰国後研修について

(1) 研修内容をどのように評価しますか。

大変良かった	5	10名
良かった	4	13名
どちらでもない	3	1名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20名

(2) 研修の良かったところ、改善すべきところをそれぞれお答えください。

〈良かったところ〉

- ・プロトコル研修や旅行についての心構えなど、基本的な所から教えてくれるのはとても良いと思う。国際交流の面では団員は皆初心者であるため、きめ細やかなサポートがあったのはありがたかった。(イタリア団)
- ・事前研修等を通じて、一人一人の課題が明確になり、十分に準備できた点が良かった。団員同士で積極的に交流しなければ、成し遂げられない派遣活動であるため、チームビルディングに必要な準備を派遣前に認識できたのは大いに役立った。また、帰国後研修では自身の学びを発表する機会もあり、受け身で終わらない点が良かった。(ドイツ団)
- ・派遣前に基礎的な知識を整理できたことで、現地での学びをスムーズに理解できた。特に、ユニバーサルデザインやバリアフリーに関する講義を通じて、日本の現状と課題を整理する良い準備になった。また、同じ団のメンバーと顔を合わせる機会があったことで、現地活動への安心感にもつながった。(フランス団)

〈改善すべきところ〉

- ・前研修・事後研修共に時間が足りなく、遠方のメンバーとは対面で十分にコミュニケーションが取れずに終わってしまった。また、スケジュールがタイトで体調を崩してしまったメンバーもいたので、もう少し時間に余裕があったらさらに充実したものになると思う。(イタリア団)
- ・他の団との交流時間があると、より幅広い視点を得ることができたと思う。(ドイツ団)
- ・全体的に情報が曖昧で、事前準備の方向性をつかむのが難しい場面があった。「話し合って発表を」と指示されても、誰に向けてどのような内容を発表するのが不明確で、進めづらさを感じた。事業の性質上、直前まで情報が確定しないのは理解しているが、参加者が安心して主体的に動けるよう、もう少し具

体的な指針や参考資料があると助かる。(フランス団)

5. 事業を終了して

(1) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていききたいですか。

- ・ 今後本事業を身近なところから還元していきたい。友人に難聴の方がいるので手話を覚え、手話通訳者なしで会話ができるようになりたい。そして、これから始まる団全体の事後活動にも責任感を持ち、参加していきたい。(イタリア団)
- ・ もっとイタリアのインクルージョンを学んで日本に取り入れたい。イタリアへの留学も検討している。(イタリア団)
- ・ 日本の介護分野の調査研究に携わっているため、今後の政策のあり方の検討にいかしていきたい。国際交流の機会に積極的に参加したい。(ドイツ団)
- ・ 今回の学びを活かし、自分が高齢社会という課題にどのように関わっていくのか、常に考えながら、様々なことに挑戦していきたい。高齢者の社会的孤立だけではなく、精神的孤立が大きな課題であることを再認識できたため、自分が長年学んできた演劇等の療法を通じて、精神的孤立を防ぐような取組を実施していきたい。しかし、簡単にそれを実施することはできないため、今回のように様々な人と交流しながら、自分にできることを模索していきたい。(ドイツ団)
- ・ 自身の専攻である都市開発に応用していきつつ、可能であれば公共政策院などまで学問を追求して答えのない「ユニバーサルデザイン」という概念を追い続けたい。(フランス団)
- ・ 派遣活動で得た新たな知識や派遣国から学ぶべき取り組みについてよりリサーチを重ね、まずは自分の身の回りから何を変えていけるかを引き続き検討したい。(フランス団)

(2) その他、この事業の感想や事業に対する意見・提言があれば記入してください。

- ・ 国際交流に関して大きな一歩を踏み出せる大変貴重な機会だった。この経験は自身が今後、国外に向けた活動をする場合に大きく役立つと感じている。(イタリア団)
- ・ 団員・団の中でテーマ性と国際交流のどちらを優先するかが常に大きな課題となるのがこのプログラムだと思う。イタリア団は最終的にそこに上手く折り合いを付けながら全員の希望を反映した良いものを作り上げられたと感じているが、メンバーによっては良い所を打ち消しあって深い学びのないプログラ

ムになってしまう危険性も孕んでいる。団員それぞれがどの点に重きを置いているのかを定期的に確認し、研修から派遣まで団として方向性を明言していくことが必要だと思う。(イタリア団)

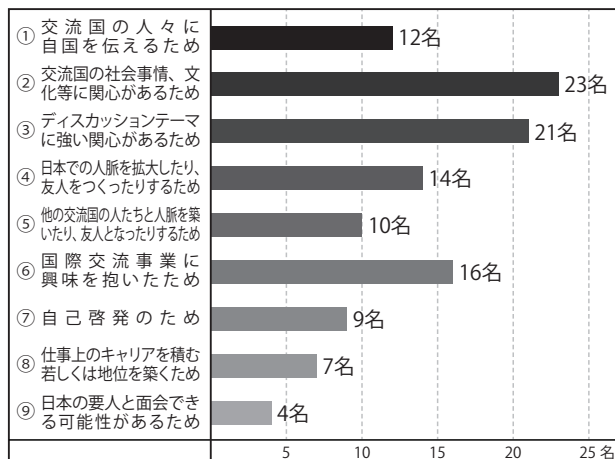
- ・ 今回、専門職枠で参加させてもらい英語力の乏しさで凄く苦労をした。アプリ等の活用やメンバーの協力で乗り越えたことは自分にとってプラスであり、貴重な体験だった。もし今後、専門職枠で採択され、英語力に不安がある方がいたら自身のノウハウを共有したい。(ドイツ団)
- ・ 本事業を通じて、社会課題に対して、自分ごととして捉え、積極的に行動している人々に出会い、社会を変革する一員となるには学ぶ姿勢を常に持ち続けるべきだと気づいた。ドイツ派遣中のプログラムや東京ディスカッションはほぼ英語で行われたため、私はついていくのに必死だった。意見を積極的に言うことや質問をすることを常に心がけてはいたが、結果的に他の班員よりもその機会は少なく、自身の実力不足を痛感した。しかし、この充実したプログラムを通じて、自分の課題に気づけたことは大きな進歩である。悲観的に終わらず、今回の反省点をいかし、次の挑戦につなげていきたい。そして、常に助けてくれた団長、副団長、団員に感謝の気持ちを忘れず、また胸を張って交流できるように、努力し続けていきたい。(ドイツ団)
- ・ スピーチを拝聴するなかで、より様々なお話を聞いてみたいと思った。また、私も内閣府の皆様のような行政官になることができるよう勉学により一生懸命取り組みたいと思った。(フランス団)
- ・ 社会人を中心にしたプログラムがINDEXとは別にあると良いと思う。(フランス団)

外国参加青年アンケート

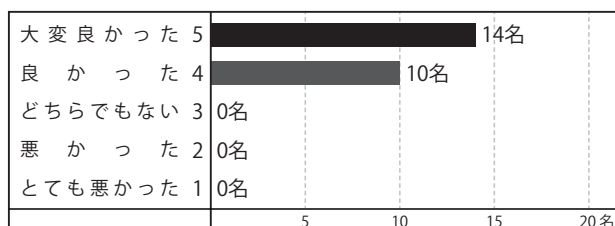
アンケート対象者：参加青年24名

1. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。
(複数回答可)



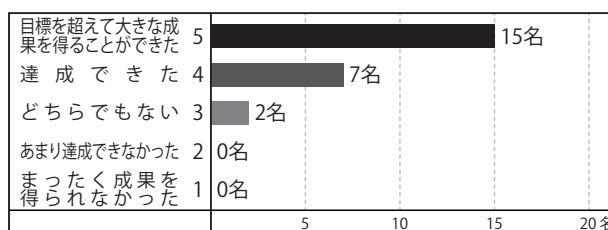
(2) 事業全体をどのように総合評価しますか。



- ・ スケジュールが少し過密すぎたように感じる。そのせいで、参加者同士で形式にとらわれずに意見を交わすような時間が十分に持てなかった。(イタリア)
- ・ 人間的な面でも、教育的な面でも、自分を大きく成長させてくれた経験であった。素晴らしい文化的知見を携えて帰国することになるが、学んだことすべてを実践に移すのが待ちきれない思いだ。(イタリア)
- ・ 非常にうまく計画され、考え抜かれたプログラムであった。国際経験を積み、自分の専門分野について新しい視点を得たいと考えている若手専門職には、ぜひ勧めたい内容である。専門家の方々だけでなく、世界中の若手専門職に出会える機会を得られたことに、心から感謝している。すべてのプレゼンテーションや現地視察は非常に興味深く、多くの学びがあった。多くの新しいアプローチに刺激を受けたので、それらを自国でも定着させていきたいと考えている。(ドイツ)
- ・ これまで見たことのない日本の一面を見ることができた、素晴らしい機会であった。障害や高齢化

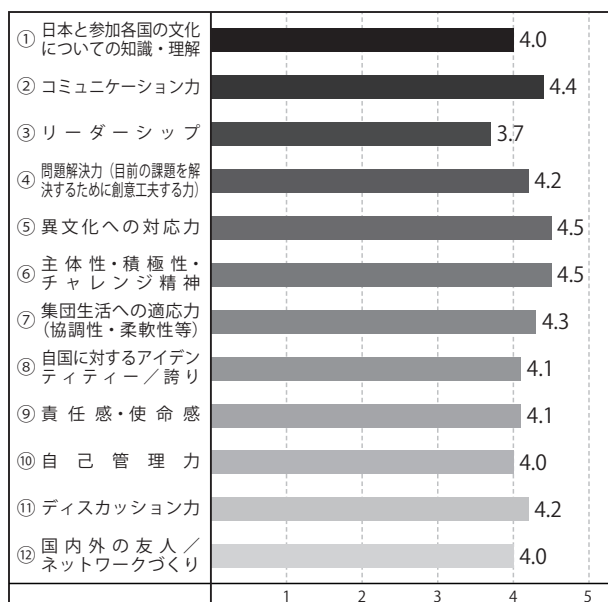
という視点を通して、日本人の日常生活を深く知ることができた。プログラムは濃密で、一日に多くの活動があったため、時々リズムについていくのが大変なこともあった。しかし、スタッフが素晴らしく、根気強く接してくれたおかげで、安心して信頼することができた。(フランス)

(3) この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。



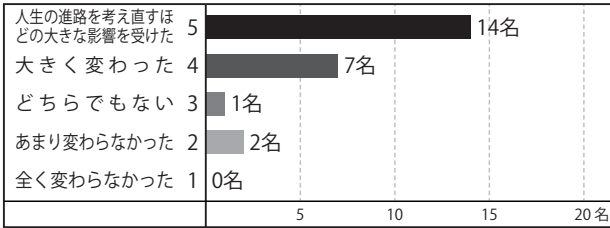
(4) 以下の①～⑫までに掲げる項目に関し、この事業全体を通じて得られた自らの成長等への効果について、以下の5～1のうち、該当すると思われるものを選択してください。

5：大きな効果があった／4：効果があった／
3：どちらでもない／2：あまり効果がなかった／
1：効果がなかった

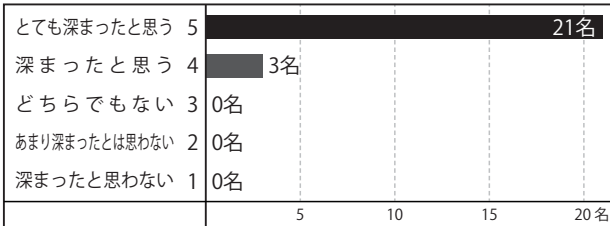


※数値は参加青年24名の平均

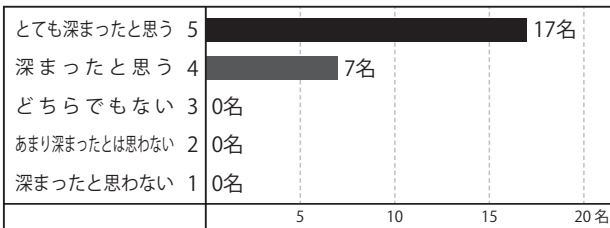
(5) あなたはこの事業への参加を通じて、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか。



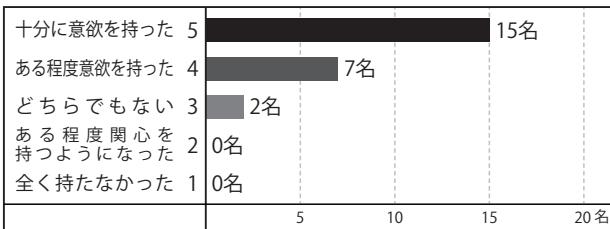
(6) この事業を通じて、あなたと派遣国の人々との相互理解が深まったと思いますか。



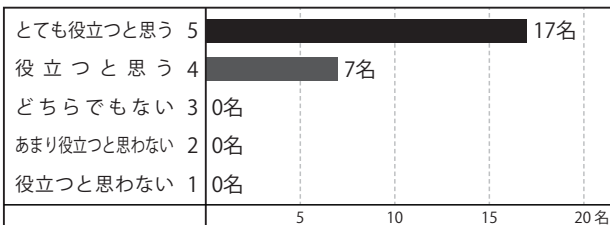
(7) この事業を通じて、あなたと派遣国の人々との友好が深まったと思いますか。



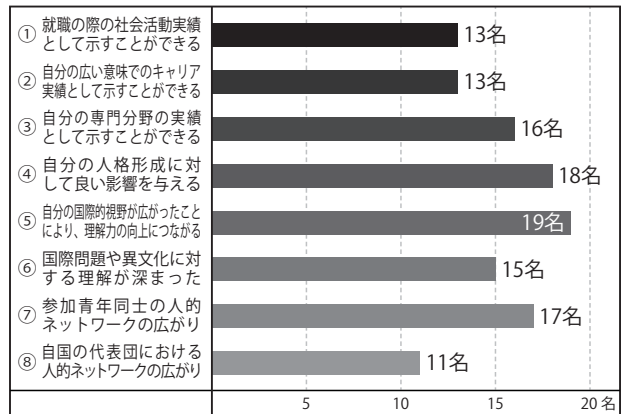
(8) 事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか。



(9)-1 この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。

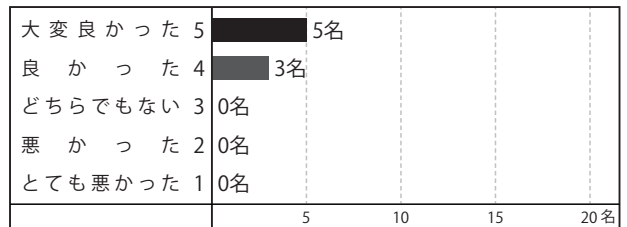


(9)-2 上記において、5～4を選んだ方は、どのように役立つと考えるか、以下の内容から当てはまる項目を選んでください。(複数回答可)

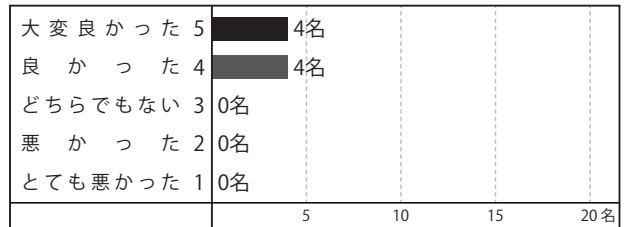


2-1. 地方プログラムについて： 新潟県（イタリア）9/19～23

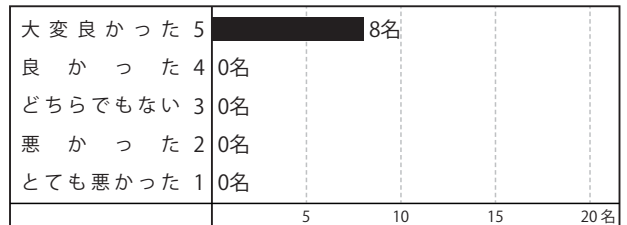
(1) 十日町小学校及び新潟県庁訪問（9月19日）をどのように評価しますか。



(2) 歓迎会（9月19日）をどのように評価しますか。



(3) ホームステイをどのように評価しますか。



(4) 新潟県障害者交流センター訪問（9月21日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	5名			
良かった	4	3名			
どちらでもない	3	0名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

(3) 弓浜ホスピタウン及び米子市弓浜地域・老人福祉センター訪問（9月22日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	6名			
良かった	4	2名			
どちらでもない	3	0名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

(5) 豊栄福祉交流センター「クローバー」及び新発田訪問（9月22日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	4名			
良かった	4	3名			
どちらでもない	3	1名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

(4) 歓送迎会を（9月22日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	7名			
良かった	4	1名			
どちらでもない	3	0名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

(6) 新潟市内見学（9月23日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	3名			
良かった	4	3名			
どちらでもない	3	2名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

(5) 水木しげるロード散策（9月23日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	6名			
良かった	4	2名			
どちらでもない	3	0名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

2-2. 地方プログラムについて： 鳥取県（ドイツ）9/19～23

(1) 鳥取県庁訪問（9月19日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	6名			
良かった	4	1名			
どちらでもない	3	1名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

2-3. 地方プログラムについて： 大分県（フランス）9/19～23

(1) 大分県庁訪問（9月19日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	2名			
良かった	4	3名			
どちらでもない	3	3名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

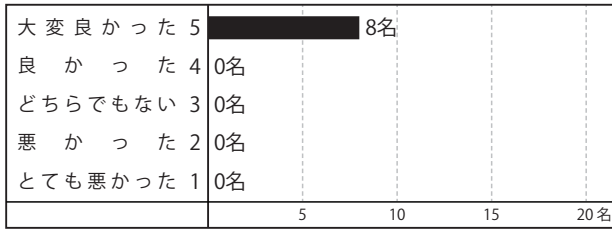
(2) ホームステイをどのように評価しますか。

大変良かった	5	8名			
良かった	4	0名			
どちらでもない	3	0名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

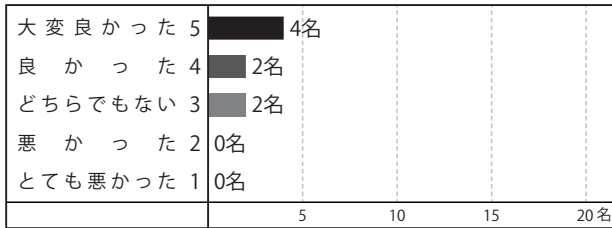
(2) 歓迎会（9月19日）をどのように評価しますか。

大変良かった	5	5名			
良かった	4	3名			
どちらでもない	3	0名			
悪かった	2	0名			
とても悪かった	1	0名			
			5	10	15 20名

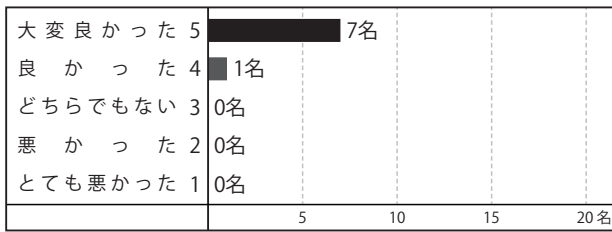
(3) ホームステイをどのように評価しますか。



(4) 臼杵市内散策と着物体験（9月21日）をどのように評価しますか。

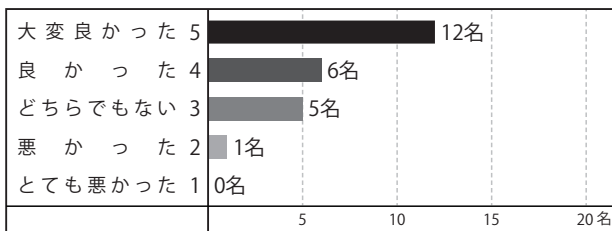


(5) 大分県立芸術文化短期大学と「太陽の家」への訪問（9月22日）をどのように評価しますか。

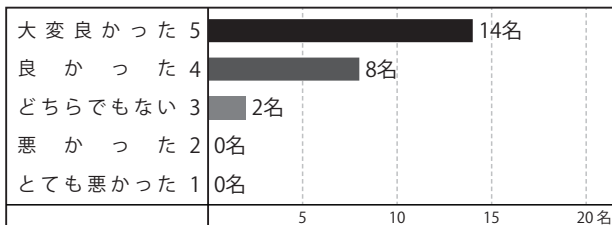


3. 東京プログラム（9/24～27）について

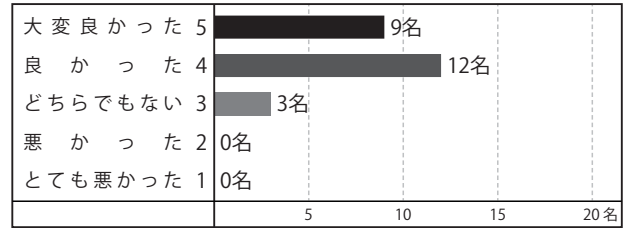
(1) グループディスカッションをどのように評価しますか。



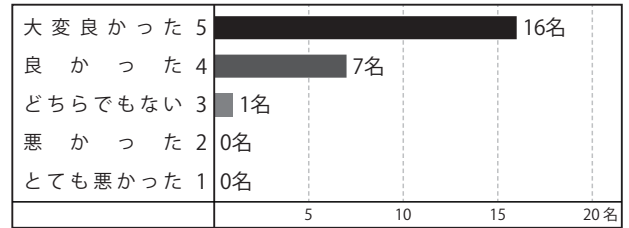
(2) テーマ別視察（9/25）をどのように評価しますか。



(3) ディスカッション成果の発表をどのように評価しますか。



(4) 文化交流レセプションをどのように評価しますか。



事業の総括評価

I 趣旨

本年度事業の成果を測り、次年度以降の事業に活かすため、日本参加青年に対して事業終了時にアンケートを行った。当該アンケートの結果も踏まえ、事業を総括評価する。

II 評価結果

1. 事業目的の達成度

① 日本と交流相手国の相互理解の促進 [1-(7)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との相互理解が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の全員が5段階評価の4（深まったと思う）以上と回答し、極めて高い評価であった。

② 日本と交流相手国の友好の促進 [1-(8)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との友好が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の95.8%が5段階評価の4（深まったと思う）以上と回答した。全体の9割を超える者が相手国の人々との友好が深まったと回答し、極めて高い評価であった。

③ 派遣国活動プログラムへの満足度 [2-(1)]

派遣国活動プログラムの内容についての全体評価は、

※アンケートは、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とした。アンケート結果の詳細は「第7章 事業の成果 事業アンケート」参照。

日本参加青年の全員が5段階評価の4（良かった）以上と回答し、極めて高い評価であった。

④ 社会貢献活動への意欲 [1-(9)]

「事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか」との問いに対して、5段階評価の4（ある程度意欲を持った）以上と回答した者は95.8%であり、大多数の者が社会貢献活動への意欲を持ったことが伺えた。

⑤ 事業参加による参加青年の将来への影響 [1-(10)-1]

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の全員が5段階評価の4（役立つと思う）以上と回答し、極めて高い評価であった。

III 総括評価

「事業全体をどのように総合評価しますか[1-(2)]」との問いに対し、日本参加青年全員が、5段階評価で4（良かった）以上と回答しており、全体として極めて高い評価が得られた。自由記述欄においては、事前研修から派遣へと継続する一連のプログラムを通じてテーマに関する知見が深化したことに加え、個人単位では実現が困難な政府機関への訪問や専門家による講義、ホームステイ等を通じた派遣国現地の人々との交流が、有意義かつ貴重な経験であったとの意見が多くみられた。また、交流国及び日本におけるテーマ関連施設の視察経験についても、今後のキャリア形成に資する重要な学びとなったとの声がきかれた。

事業終了後の展望について、「今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。[5-(1)]」との問いに対しては、多様な分野で活躍する国内外の仲間との出会いを通じ、切磋琢磨していくことが可能な人的ネットワークが形成されたことから、今後の人生及び活動において、これ

らのつながりを活用していきたいとの意見が寄せられた。さらに、現在従事しているテーマ関連業務や自身の専攻分野における研究に、本事業で得た視点を反映させたいとの声や、事業を通じて涵養された国際性を基盤として、ビジネスの場において国際的に活躍する人材を目指したいとする意欲的な意見も多数確認された。これらの回答からは、参加経験を将来の活動へと主体的につなげていこうとする姿勢が明確に読み取れる。

以上を総合すると、日本参加青年は本事業を通じて、テーマ及び各派遣国に対する理解を一層深めるとともに、国際的な社会課題に向き合うための視点及び能力を着実に高めたものといえる。今後は、事業で得られた学びや人的ネットワークを基盤として、それぞれが身を置く国内外の専門分野やコミュニティにおいて、指導的役割を担いながら活躍していくことが期待される。このことから、本事業は当初の目的を十分に果たしたものと総括できる。